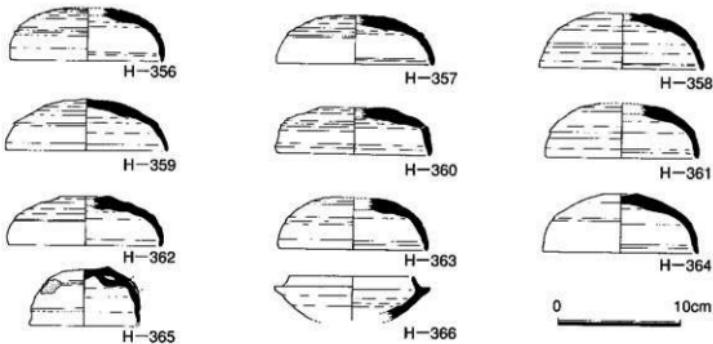
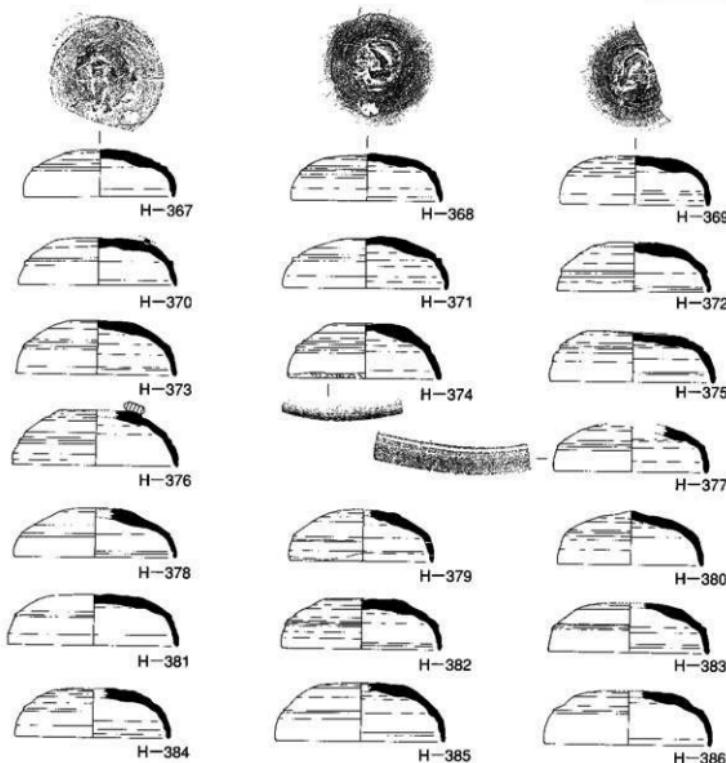


第100図 H区 I ラインアゼ出土遺物③

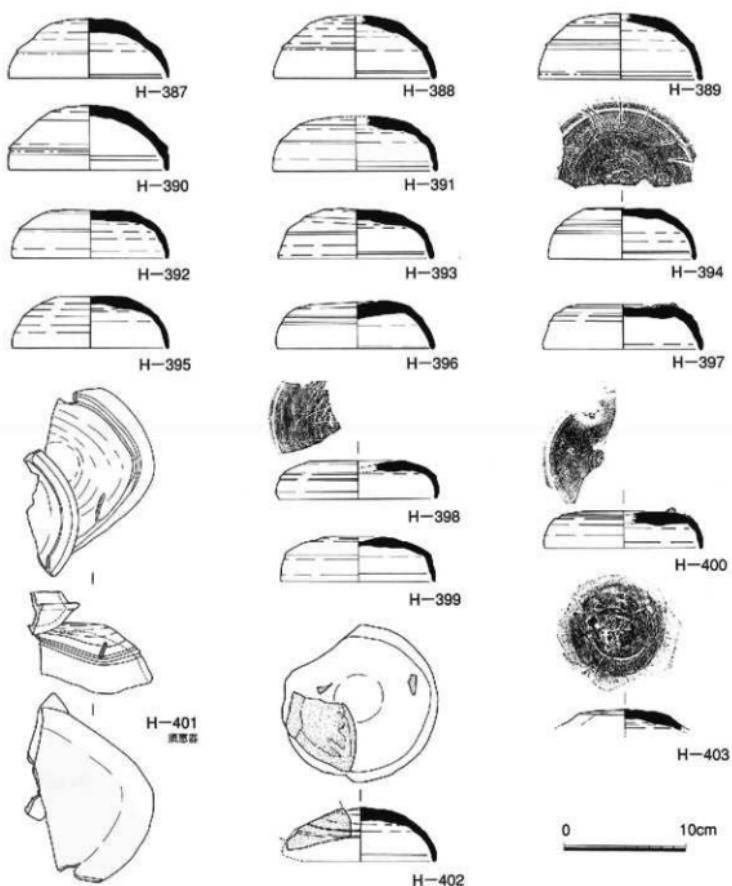


iライン②層出土遺物



iライン②層出土遺物①

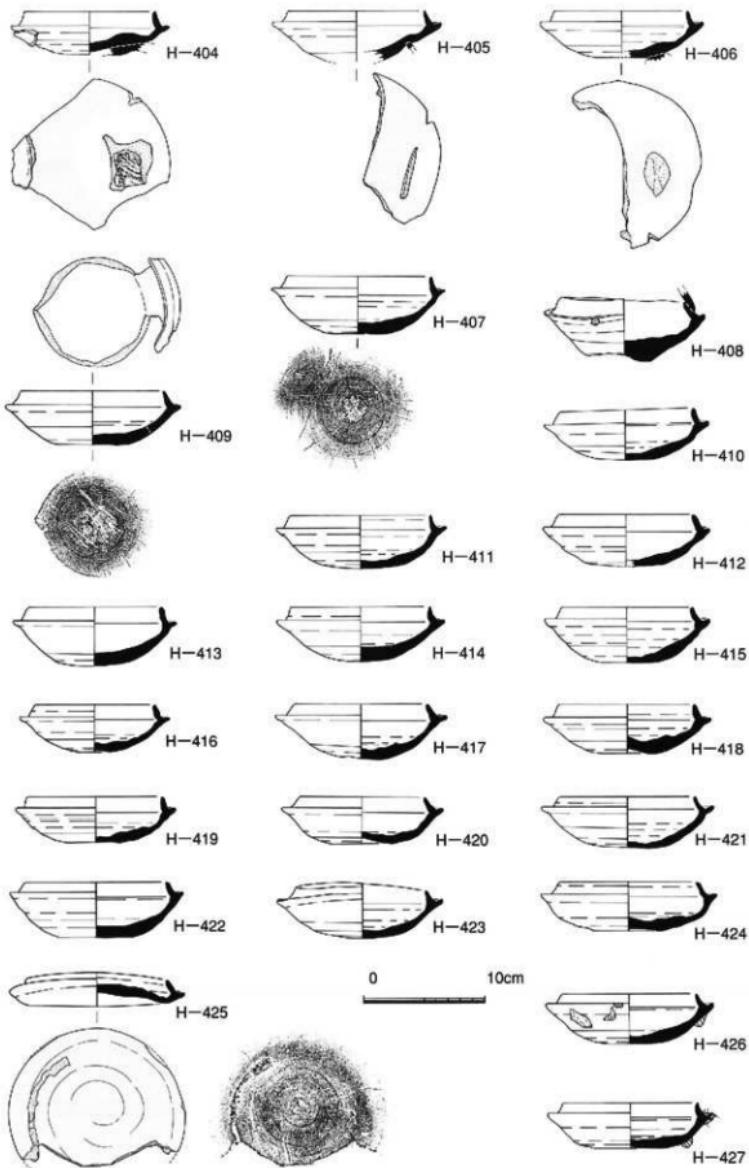
第101図 H区 i ラインアゼ出土遺物④



トーン淡：植灰

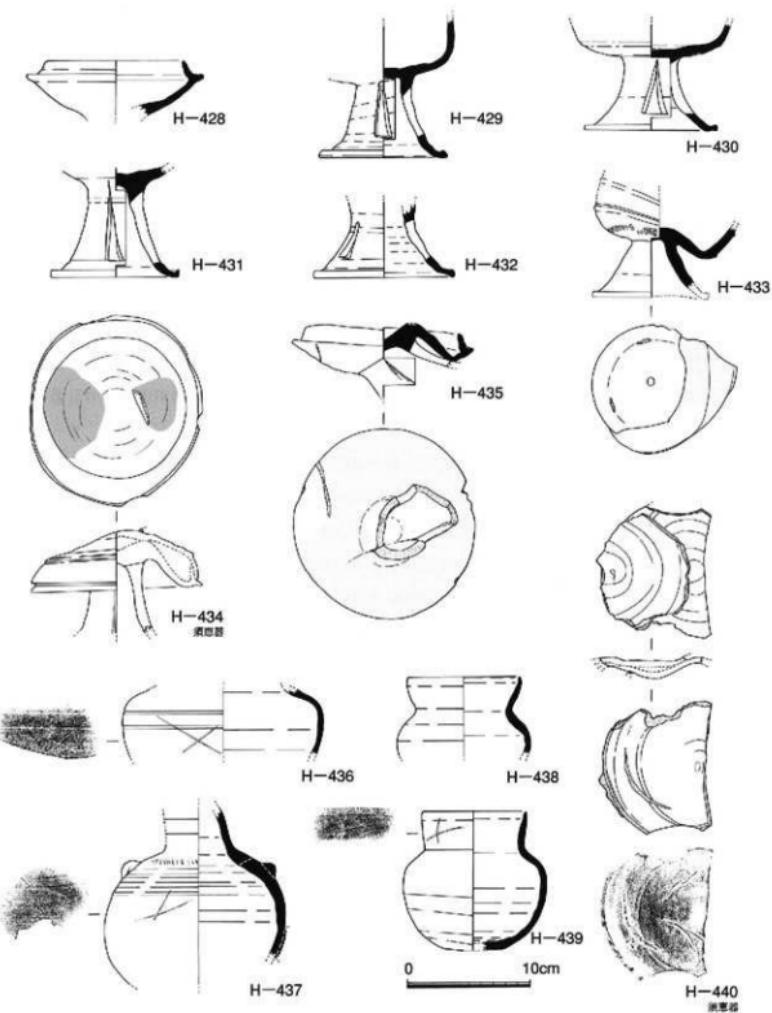
iライン②層出土遺物②

第102図 H区 i ライン出土遺物⑤



i ライン回層出土遺物③
第103図 H区 i ライン出土遺物⑥

トーン演：桂尻



|ライン⑯層出土遺物④

トーン淡：桙灰
トーン濃：米色

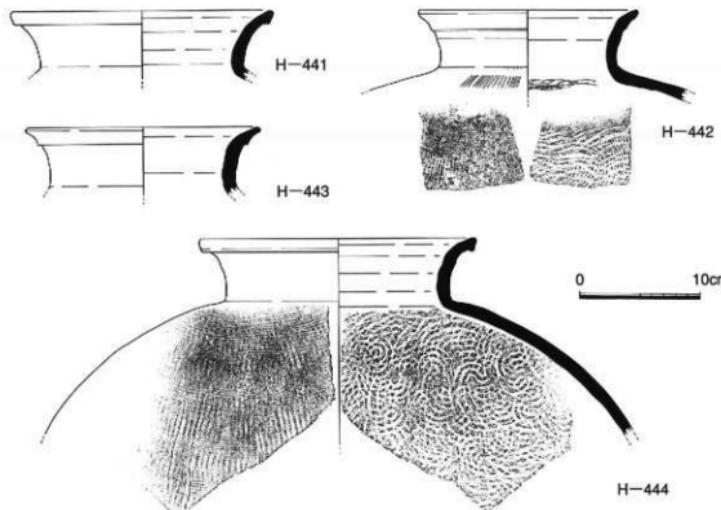
第104図 H区 i ラインアゼ出土遺物⑦

H-367~444はⅠライン⑩層出土遺物で、幅が30cm前後のセクション内ながら極めて多量の遺物を検出した。H-367~403は环Hである。H-367は焼成がやや甘くチョコレート色を呈している。天井頂部はほぼケズリが及んでいない。H-368も天井頂部にはケズリが及んでおらず未調整（わずかにナデ）。H-369は天井頂部にヘラ記号を施している。H-374は口縁端部の外面に回転ナデが及んでおらず、刻目状の痕跡が見られる。H-376は天井に窓壁片が付着し、H-377の外面には回転ナデによる条痕が非常に良く残っている。H-378は体部が黒灰色に還元しており、口縁外面（稜付近まで）と内面に白灰が被灰している、これらは焼成時の重ね焼きと思われる。H-379は口縁外面に粘土紺の痕跡と思われるものが観察出来、H-381は外面全面に被灰している。H-385~387・391は軟質で非還元炎焼成、H-388・389も焼成がやや赤褐色を呈している。H-390は口縁外面部分が黒班状に黒くなり、天井は赤褐色でやや焼成が甘い。H-394は天井頂部が平川でナデ、周辺はケズリを施す。H-398・400・403は天井部にヘラ記号を施しており、H-399は天井部に被灰するが、稜より下には全く灰が被っていない。H-401は环Hの蓋と身との重ね焼き資料、H-402も重ね焼きの結果と思われる剥離痕が天井に残っている。

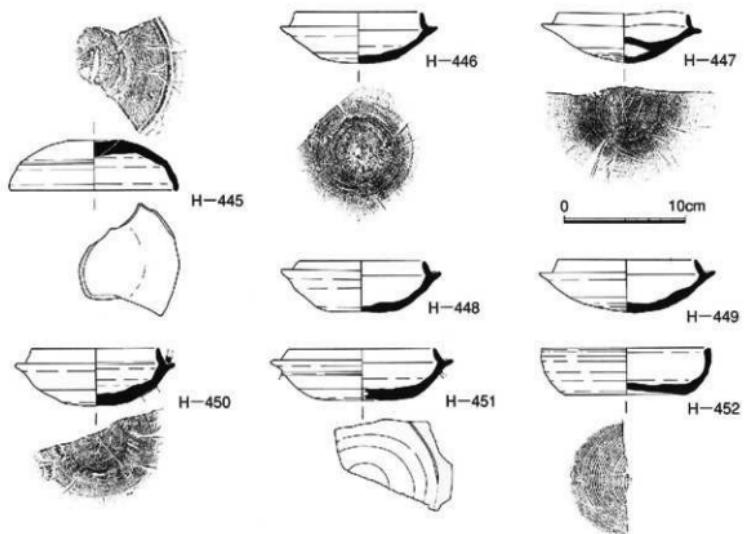
H-404~427は环Hの身である。H-404~406は底部外面に被灰と、別須恵器片の付着があり、H-407の底部にはヘラ記号が施されている。H-408は完形であるが火彫れが激しく、H-409は体部の接合痕が擴口縁状に剥離している。また、H-409は底部に工具による条痕が見える。H-410・412・414・415・417・418・419・420・422・423・424・426・427は外面に灰や釉を被っている。H-413は底部調整がナデ、僅かにケズるか。H-425は歪みがあり、外面に被灰し、円弧状に別の須恵器片の剥離痕が残る。焼成時の重ね焼き痕か転用したものかは不明である。

H-428~435は高坏である。H-428有蓋高坏（高坏A）の坏部で頸部との接続部分が残存していなかったら环Hとの見分けが付かない、外面に厚く白灰を被っている。H-429は坏部を欠損しており歪みが著しい、脚部は完存する、透かしは一段二方向三角透かし。H-431はやや細長い脚で残高8.9cmを計る、内外面に被灰している。H-433は歪みが大、脚部の外面と坏内面に被灰しており、残存部では透かしなし、脚の内面に径6cm程の円形の剥離痕が認められる。H-434・435是有蓋高坏（高坏A）である。H-434は脚部を欠損しているが、蓋と身が溶着したままで、かつ、蓋外面の左右に別の須恵器片が接していたと思われる剥離痕が見られる、また、脚内面（环の底）と坏部外面に釉を被り、H-434の自重で歪んだような形態を示している。H-435も歪みが著しい、坏部底面に被灰しており、別の須恵器片が接していたような痕跡が残る。

H-436~439は壺である。H-436は体部片でヘラ記号を記している、H-437は把手付きの壺（壺N）で肩部にやや退化したような小さな把手を付す、頸部は歪んでいるが、約6cm程度の頸径で直立していたものと思われる、横瓶とは異なり体部は完全に球状の壺で、肩部に列点文を施し、体部にヘラ記号を記す、頸下から体部にかけて被釉しており、体部下部に別須恵器片が付着している。H-438は壺の小片、基本的には直口壺（壺C）の部類に入ると思われるが、頸部が直口せずにやや内湾する。H-439は直口壺で80%残、口径8.4cm、器高11.4cmを測る、頸部にヘラ記号を施し、外面に被灰している。



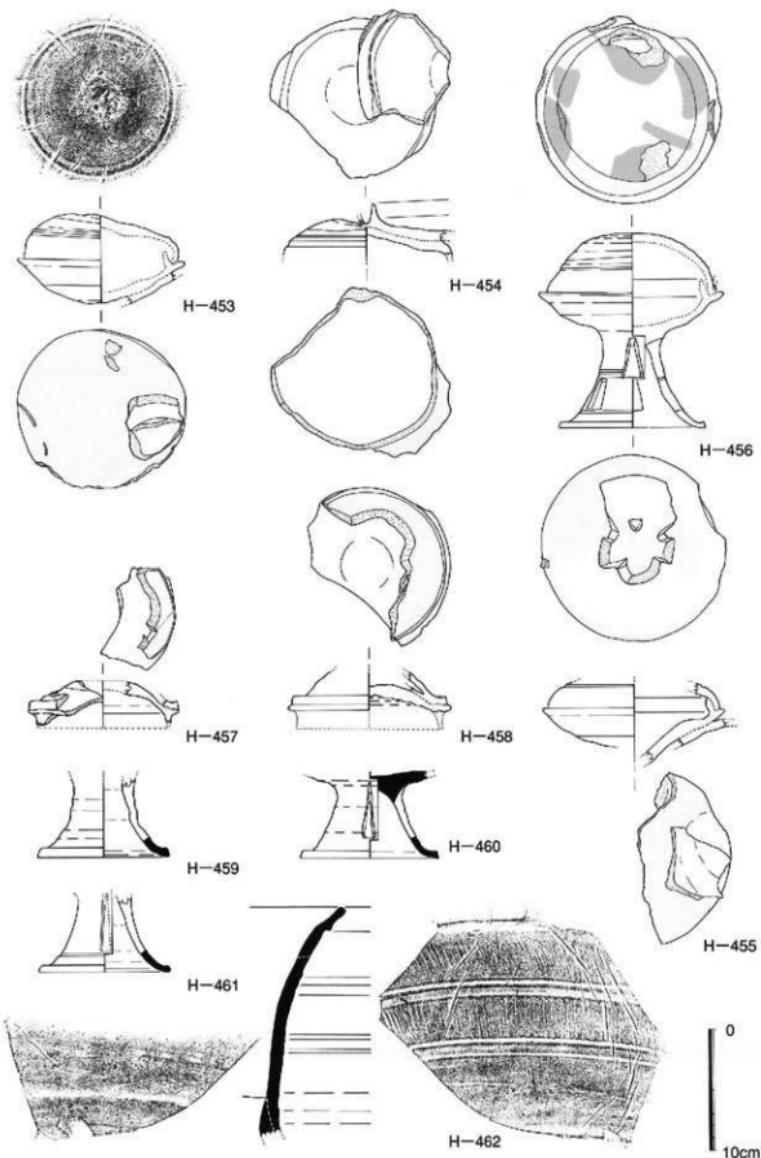
iライン⑯層出土遺物



iライントレンチ出土遺物①

トーン法：板灰

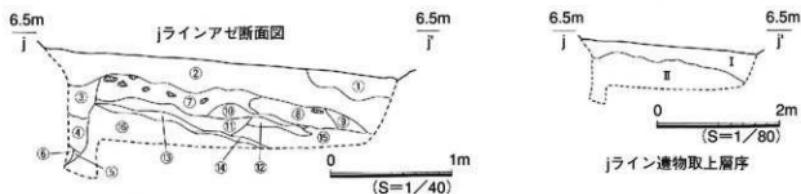
第105図 H区 i ラインアゼ出土遺物⑧



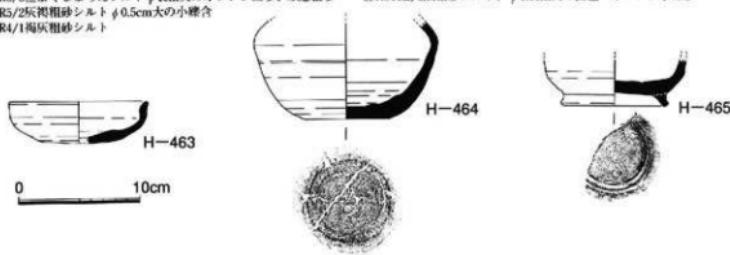
i ライントレンチ出土遺物②

H-453~460: 瓦器
トーン淡: 銀灰
トーン濃: 青色

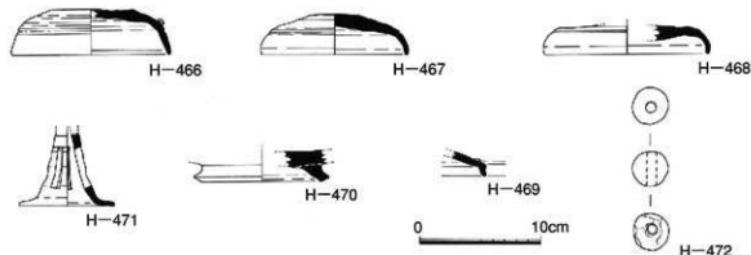
第106図 H区 i ラインアゼ出土遺物⑨



- ①10YR6/2灰黄褐 ϕ 0.5cmの小礫含
- ②10YR6/1褐色シルト ϕ 1cmの大・小礫含
- ③10YR6/2灰黄褐 ϕ 0.5cmの大・小礫含
- ④7.5YR2/1黒褐色十茶色ブロック上粗砂シルト
- ⑤7.5YR3/2褐色粗砂シルト
- ⑥7.5YR3/2黒褐色粗砂シルト
- ⑦7.5YR6/6棕よくしまったシルト ϕ 1cmの大・オレンジ練多・須恵器多
- ⑧7.5YR6/2灰褐色粗砂シルト ϕ 0.5cmの大・小礫含
- ⑨7.5YR4/1褐色粗砂シルト



jライン II 層 出土遺物



jライン II 層 出土遺物

第107図 H区 j ラインアゼ出土遺物

H-440は溶着資料で、環H同士の溶着と思われる、また、図の下面に円弧状の別須恵器片が見られるため、恐らく環Hの焼成で失敗した溶着の破片を置台に転用していると思われる。

H-441～444は甕片で、口縁端部に面を有する甕Bである。このうち、H-444は（復）口径が23.0cm、残高16.4cmを測る大型甕で、焼成がやや甘く、赤黄褐色を呈している。

H-445～462はiラインのトレンチ出土遺物である。層位不明瞭なものもあるが、iラインの出土遺物を概観して分かるように、大部分は灰原下層の1号窯に伴う灰原からの出土遺物と見て大過ない。

H-445は環Hの蓋、H-446～451は身である。H-445は天井部に工具による条痕が残り、また粘土組（板）の剥離痕が明瞭に残っている。H-446は70%残、口径10.4cm、器高4.1cmを測る、底部調整は回転ヘラケズリで底部にヘラ記号を記す。H-447はやや歪みがあり外面に被灰している、また、底部に工具による条痕が見られる。H-448は外面に被釉しており、H-450は外面に×（+）印のヘラ記号を施す。H-451は約30%残、焼成は基本的に灰色を呈するが、受部外面に別の須恵器片が付着しており、それより上部は黄灰を被り、黒色に変色している、重ね焼き痕と思われる。H-452は塊Aで底部の切離しは回転糸切りである。

H-453～458は溶着資料で、H-453～455は環Hの蓋と身とが溶着したもの、H-453は完形で蓋と身とが溶着している、蓋の口径12.5cm、蓋・身の高さが7.0cmを測り、身の外面全体に被灰しており、かつ身の外面には別の須恵器片が付着している、蓋の天井部分にヘラ記号を施す。H-454も破片であるが、セットではない蓋と身との溶着である、身外面に被灰する。H-455は蓋と身とがセットにあり身外面に被灰する、また、身の外面に別須恵器片が溶着しており、その重みのためと思われる歪みが生じている。H-456は有蓋高坏（高坏A）の溶着資料で85%残、蓋と身とがセット関係にある、蓋の口径13.7cm、全器高15.9cmを測り、脚部は二段三方三角透かしで千鳥状に配置されている、高坏の环部外面に緑色の釉が被っており、蓋外面は変色部分が見られる、有蓋高坏の蓋と身のセット関係が良く分かる好資料であるが、これを見ると有蓋高坏の蓋にはつまみがなく、形態そのものは环Hの蓋と区別出来ない。H-457・458は高坏と环Hの溶着資料で、実測図の上側が高坏、下側は环Hの身が逆位になっている、殊にH-458では环Hの身の受部部分が（意図的に欠損したのか）完全に擬口縁状に剥離して円形を呈しており、それを転用して高坏の置台にしているものと思われる、被灰は高坏外面と、坏側の高坏より外側で、坏底部部分は被灰していない。

H-459・461は高坏片で、H-462は甕Aの口縁片で脚部との接合痕が明瞭に残る。

j-j'（以下、jライン）のセクションはH区の最西部に位置するセクションである。

遺物の取り上げはセクションの上層（①層）と下層（②層）とに大別した。H-463～465がjライン①層出土遺物で、H-466～472が②層出土遺物である（第107図）。

jライン①層出土遺物のH-463は30%ほど残、（復）口径11.4cm、器高3.4cmを測る、底部調整はナデ、口縁端部が僅かに外反するので、身として実測したが蓋かもしれない。H-464は壺の底部片である、底部調整はヘラケズリでヘラ記号を記している。H-465は歪みのある高台片で、底部調整は静止糸切り→ナデ？、×印のヘラ記号を施す。

H-466～472はjライン②層出土遺物である、H-466～468は环Hの蓋、H-469は口縁が屈曲す

る坏F蓋の網片、H-470が壺の高台片、H-471が高坏Cの脚片、H-472が明赤褐色を呈する土師質の土玉である。

H区の土層堆積状況の小結

以上、H区の山津1号窯に直交して北西—南東方向に設けられたセクション断面の堆積状況と、その確実な層位出土遺物を概観した。H区の堆積は大部分が灰原の堆積である。そのため、黒色土と黒色土との切り合いが重なっており、現状での調査技術では明確な分層発掘や遺構の検出は不可能といえる。

但し現地調査では、そういう限界を承知の上で各セクションの駐やトレンチから、可能な限り確実な各層位資料を注意深く取り上げたのは先に報告した通りである。その結果、H区の堆積状況としては次のような事実が確認できる（第75図）。

先ず、H区の最も古い上器としては山津I期の土器（6世紀後半～7世紀初頭）がある。これのみに限定できる単純時期が堆積した層としては、aラインの①・⑩層（H-1～11）、即ち、山津1号窯の窯埋土が挙げられる。

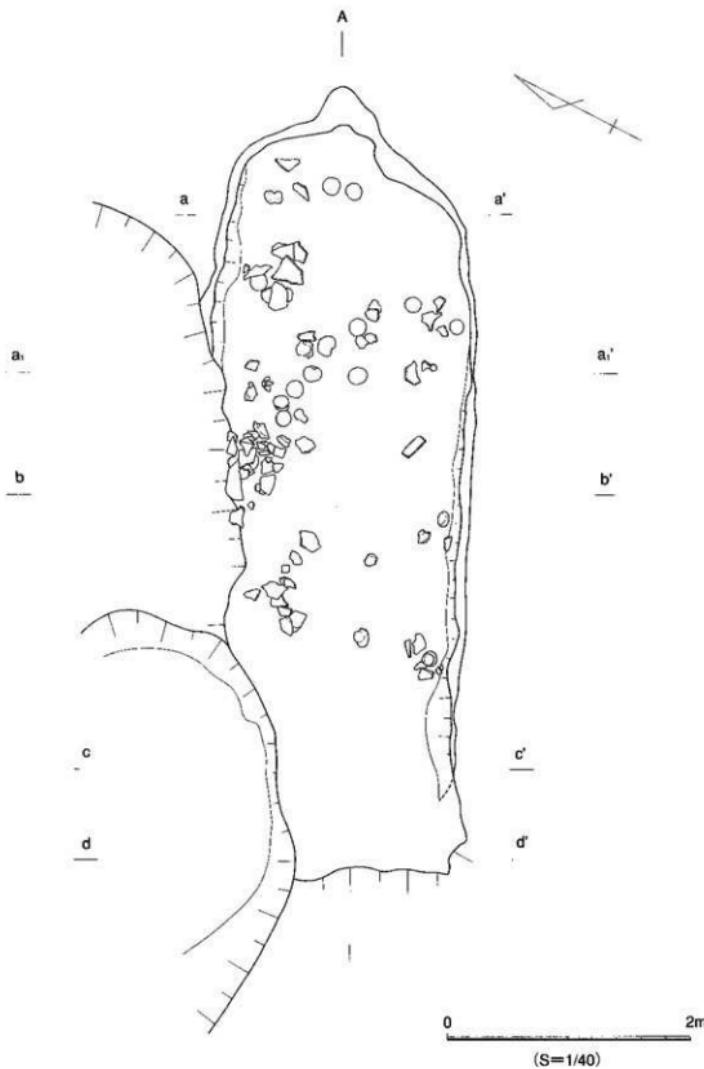
またgラインの①層（H-198～202）、hラインのⅤ層（H-258～273）、iラインのⅦ層以下（H-310～444）も同時期の単純時期堆積である。これらの各層は山津1号窯の西側に厚く堆積している黒色の灰原（灰原下層）に該当し、この灰原（H区灰原下層）は位置（地形）的にも時期的に見ても山津1号窯の灰原であることは確実である。

灰原層と1号窯との間の地山には長さ2.5m、幅1.5m程度の平坦な地点があり、1号窯の前提部と考えられるが、出土した同層の遺物としてはdラインⅣ層（H-99～103）、eライン⑨層（H-137・138）などがあって、山津1号窯の遺物よりやや新しい。二次堆積を受けたものであろうか。

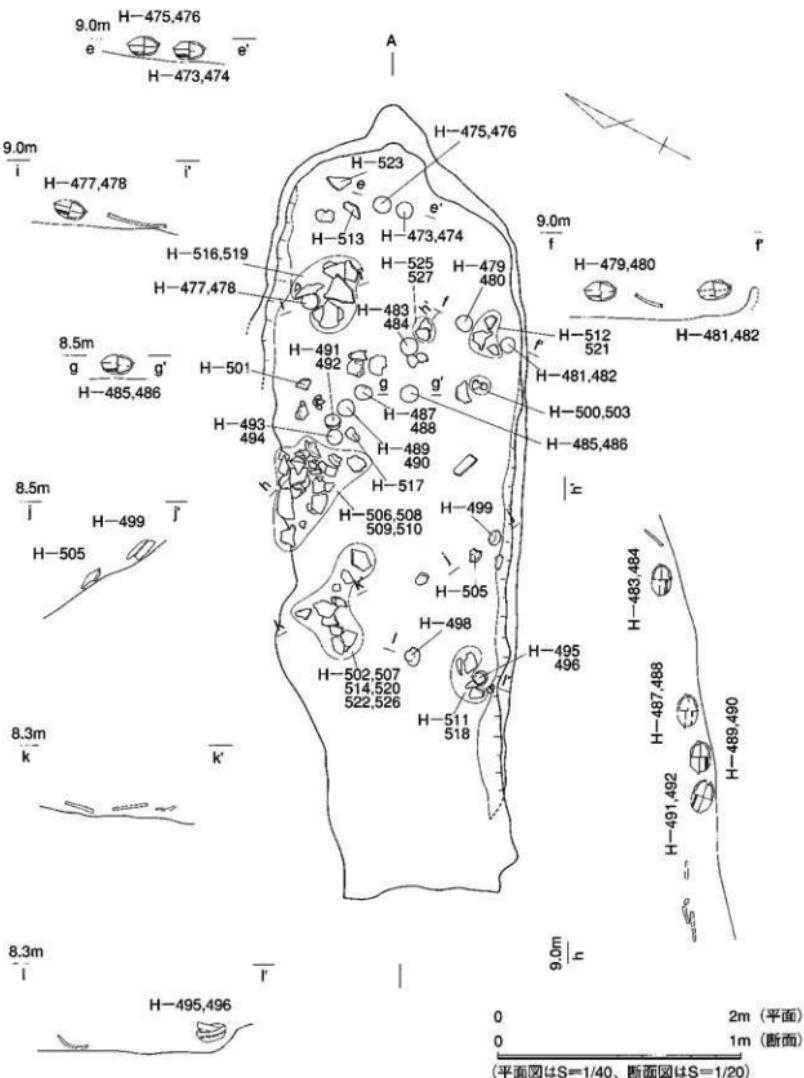
1号窯関連以外に山津I期の単純時期が堆積している層としてはdラインのⅣ層（H-104～112）がある。これはSH101・102として検出した遺構の下層に見られた黄色の砂礫層で、当初は地山と考えた層である。しかし、トレンチ掘削の結果、遺物が出土したので包含層と判断した。埋土は先述したように地山によく似た明黄褐の砂礫層である、位置的には山津1号窯の南に当たり、層の平面的な広がりは明確に確認出来なかったが、概ねdラインの南東部分を中心として同層の遺物を検出した。埋土はほぼ地山の黄色砂礫層で、H区内では最も古く（山津I期古段階）の遺物が出土している。出土層から考えると、1号窯の築窯前後、又は營窯期の地山部分に何らかの手を加えている痕跡と思えるが、詳細は不明とせざるを得ない。

この他、dライン①層（SH101埋土・H-62～74）、dライン⑩層（SH102埋土・H-77～81）も確実な分層資料を見る限り、山津1号窯の時期とほぼ同時期の遺物が出土している、しかし後述するようにSH101・102の遺構掘削として検出した遺物（H-1210～1284）にはやや新しいII期初頭（7世紀前半）の遺物も見られるので、土坑SH101・102はぎりぎり山津1号の窯業時期か、若しくは廃絶直後くらい堆積した土坑と考えられる。

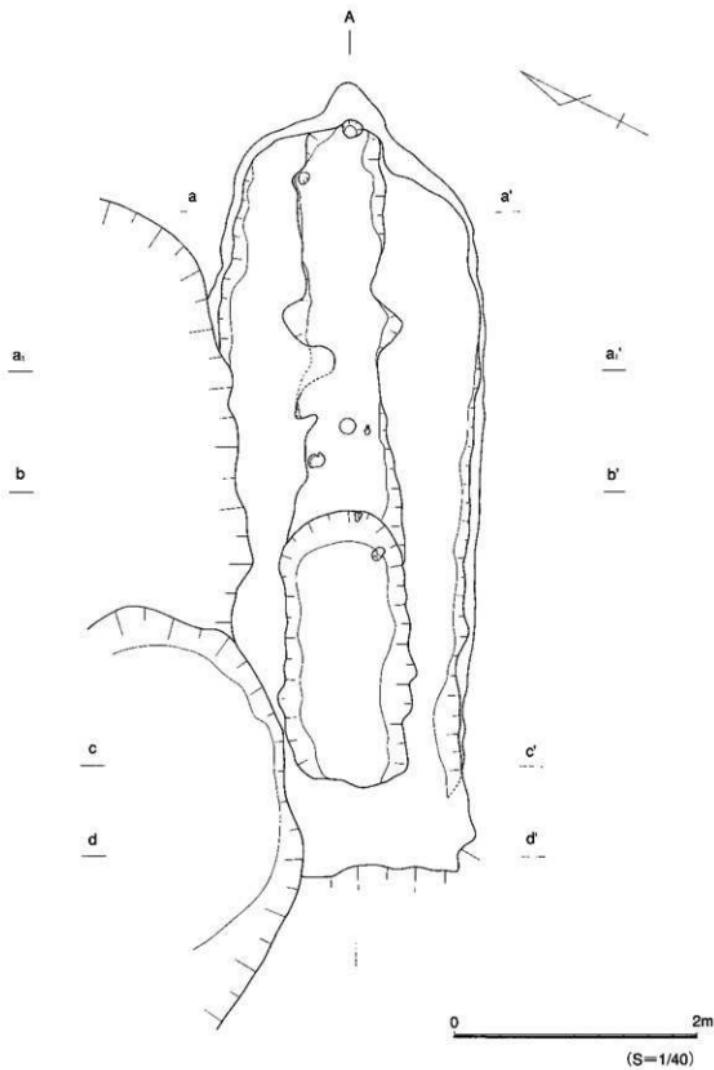
bライン①・⑩層（H-12～24）、cライン①・⑩層（H-28～40、H-42～61）、dライン⑩層



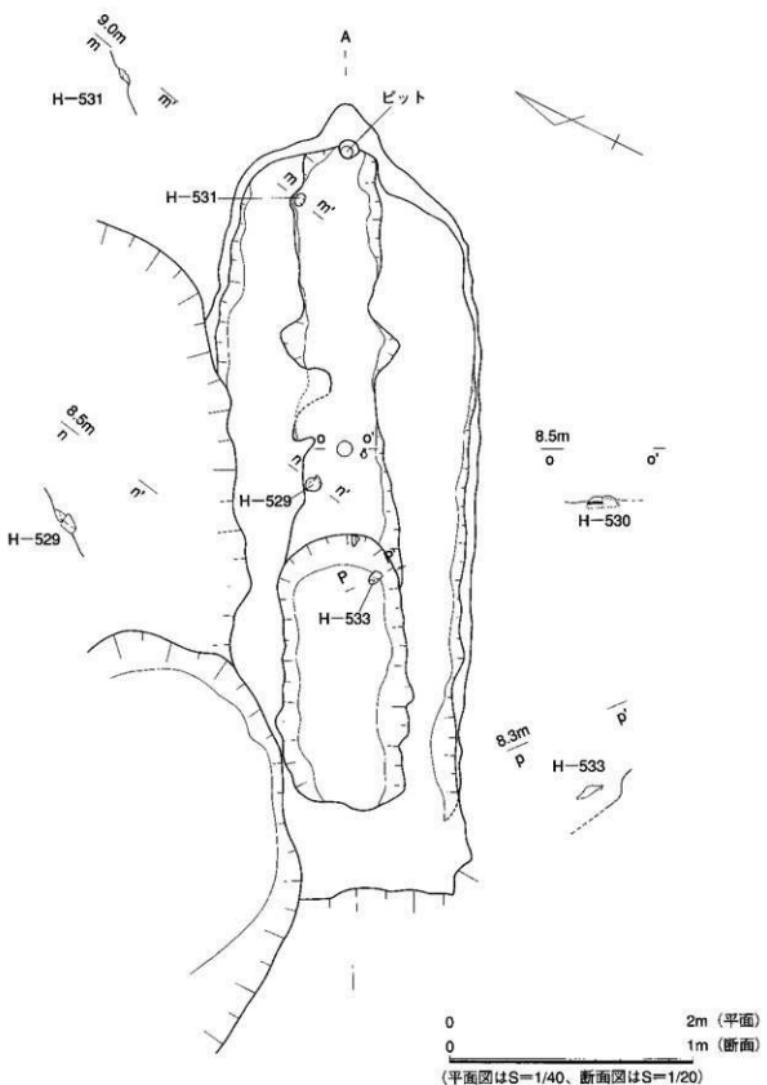
第108図 H区 山津1号窓平面図（最終床面）



第109図 H区 山津1号窯（最終床面）遺物検出状況



第110図 H区 山津1号窯平面図（青色砂層・舟底状土坑）



第111図 H区 山津1号窯・床面遺物取上後の遺物検出状況

(H-90~98) は概ね山津Ⅱ期（7世紀中・後半）の単純時期の遺物で占められており、1号窯灰絶後に（1号窯の北東部を一部切る）掘削された上坑SH113に該当する。灰原層の重なりなので、明確な全形は不明であるが、H区の北西には同時期（山津Ⅱ期）の山津2号窯が立会調査で検出されており、また、H区の北東に位置するH-2区の出土時期もⅡ期の遺物ではば占められているので（H-1839~1912）、これらとの関連性が伺われる。

7世紀中ごろ（山津Ⅱ期）の山津2号窯に隣接して、8世紀後半（山津Ⅲ期）の山津3号窯も検出されており、H区周辺は長期間に渡って須恵器窯が作り続けられた密集地であったことが分かる（第287図）。事実、本調査のセクション内の確実な堆積状況を見ても、6世紀後半~9世紀までの資料が入り乱れている灰原の堆積状況である。H区では、上述の新しい灰原層は、平面的な分層発掘は不可能であった。そのため、これらの灰原層は括して灰原上・中層として報告する（H-1412~1795）。但し、上・中とは調査現場における相対的な上下関係であり、時期とは関係ないことを断わっておく。

② 山津1号窯と、これに伴う灰原（灰原下層）の遺構と遺物

H区の土層堆積状況と遺構の配置状況は上の通りである。以下では各遺構の出土遺物、灰原出土遺物、その他の順で報告する。

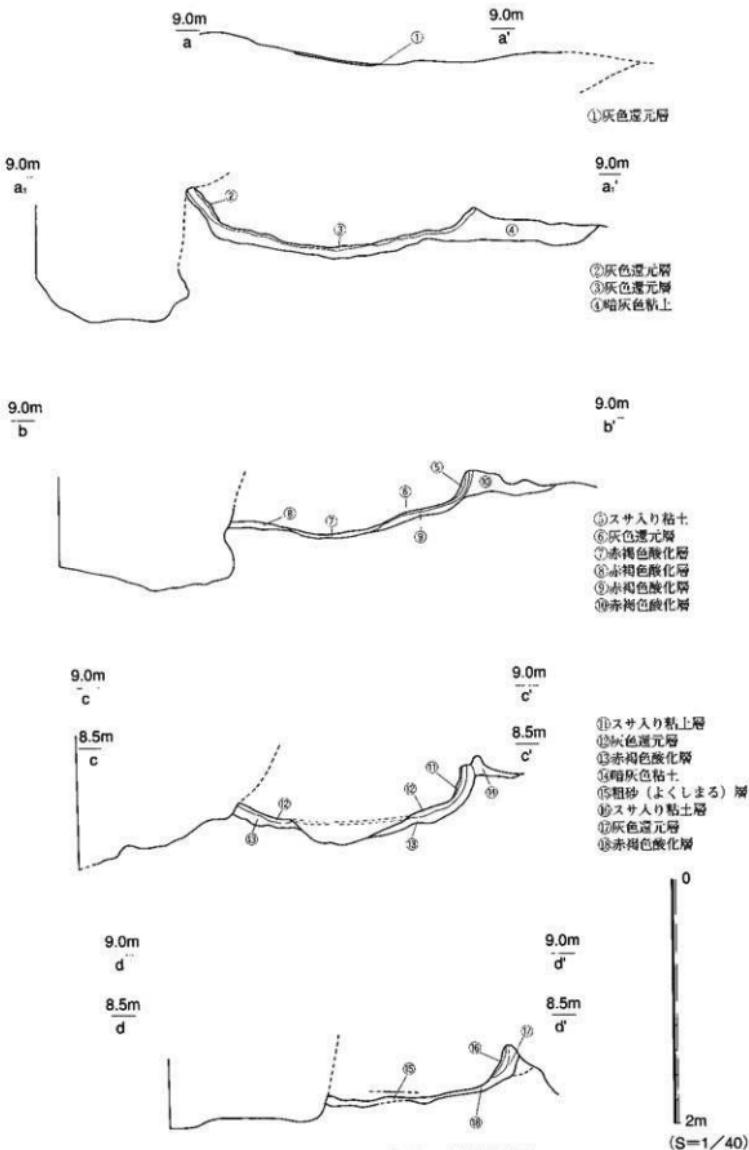
山津1号窯はH区北西端で検出した須恵器窯である。中海に面する標高8~9mの位置に築かれている。残存長6.2m、幅2.3mを測り、主軸を磁北からN-65°Eに振る。床面までの残存深度は最大でも40cm前後で埋土は焼けたような赤褐色土と窯壁片が混じっている。また、残存する窯壁の立ち上がり部分には補修痕が残っていた（図版17・中）。周辺の地山との関連から半地下式、又は地下式の窖窯であったと考えられる。

表上直下から検出したことから判るように、窯の大部分は後世の削平を受けており、かつ、窯の北端は1号窯灰絶後の7世紀代（山津Ⅱ期）に既に一部が破壊されている（SH113）。窯の残り具合は決して良好とは言えず、窯の上部は削平されていたため、窯背部の構造は不明である。しかし残存部分の床面（最終床面）直上からはセット関係にある坏類がまとまって検出することが出来た（第108・109図・図版13~15）。

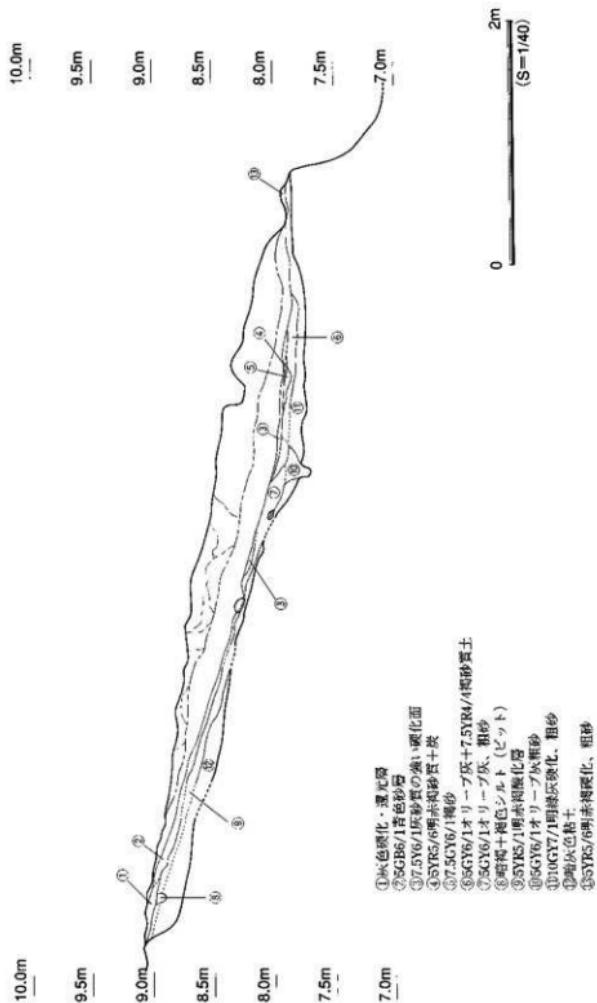
大部分は坏Hの蓋と身で何れも身を上に、蓋を下にして検出されている（図版13・14）。例外はH-491・492とH-495・496で、特にH-495・496は蓋形の須恵器が塊状に2つ重なって検出されていた（図版15・下）。

坏H以外には甕片も多く、特に窯の中央・西部からは甕片が大量に出土し、大甕が二個体接合（H-545・546）したが、甕の大部分は床面から15cmほど浮いて検出されたものである。

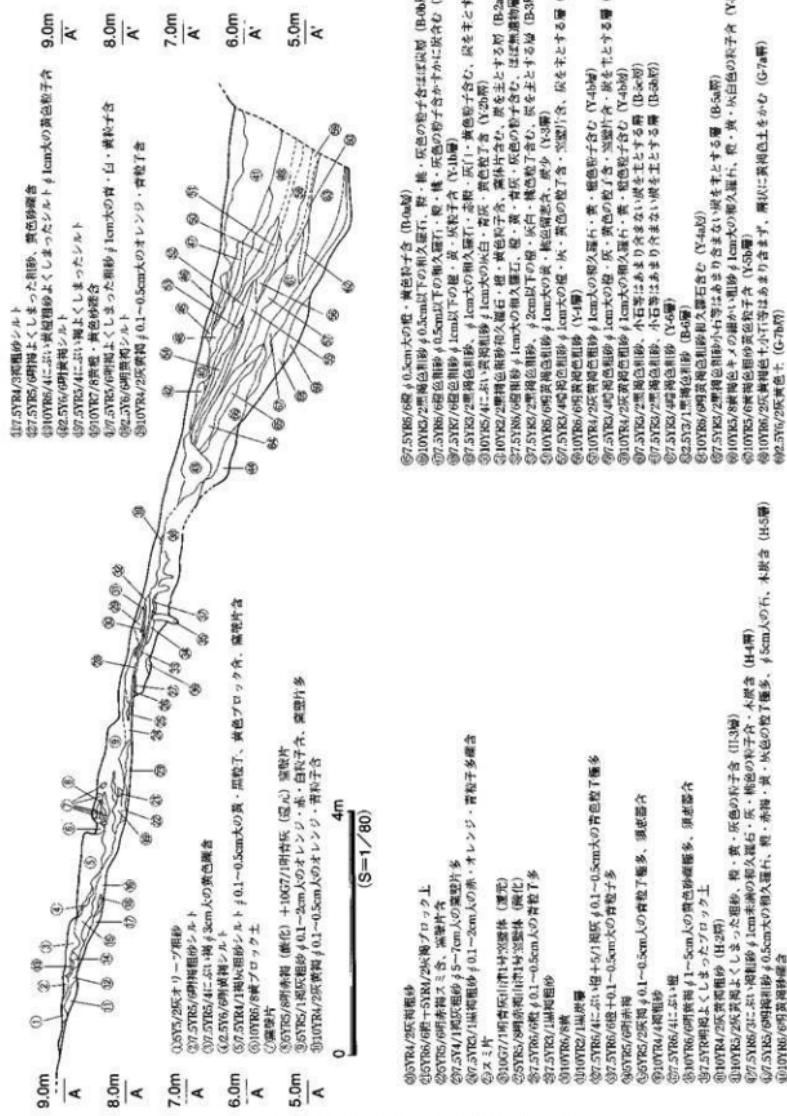
H-473~527を検出した最終床面は青灰色に還元されたやや砂っぽい硬化面であるが、窯の立ち削り状況ではその直下には赤橙色の酸化層・灰色粘土層が続き、確認出来た床面は1枚のみであった。但し、床面の遺物収上後の精査では床面の中央部に、窯主軸方向（北東~南西）方向に沿った長さ3m、幅0.5~1mの青色砂層が浅く（10cm）堆積しており、H-528~535の遺物を検出した（第110・111図・図版16・上）。



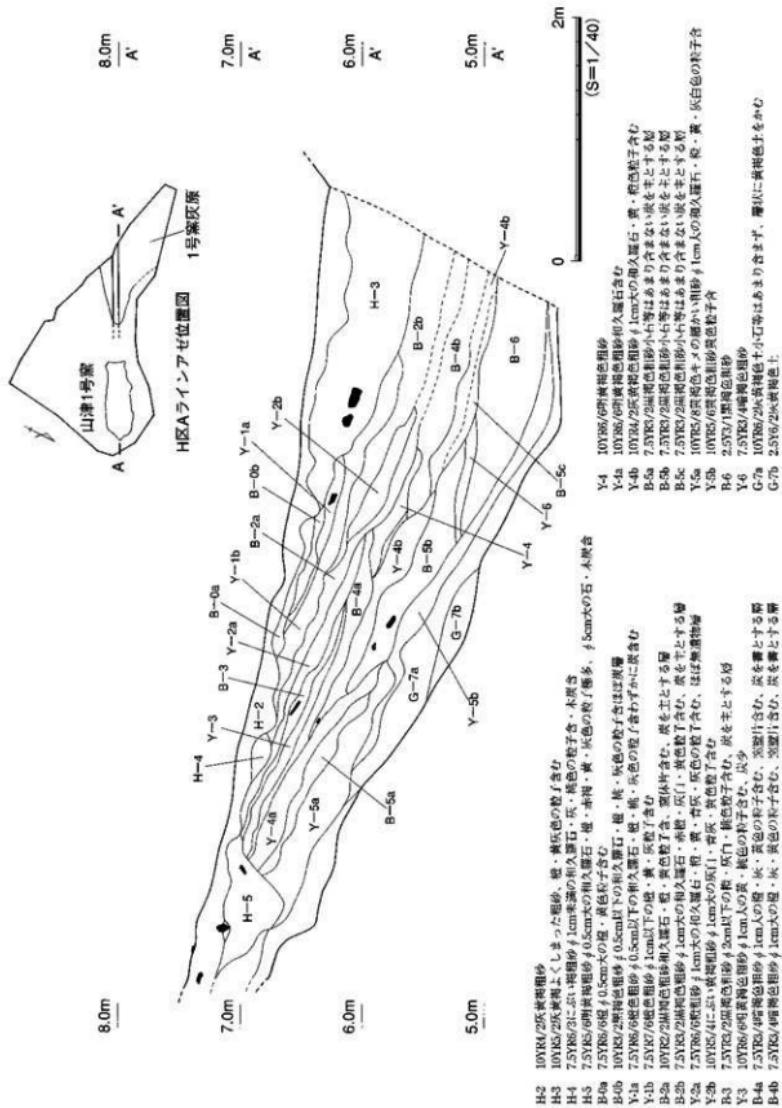
第112図 H区 山津1号窯断面図



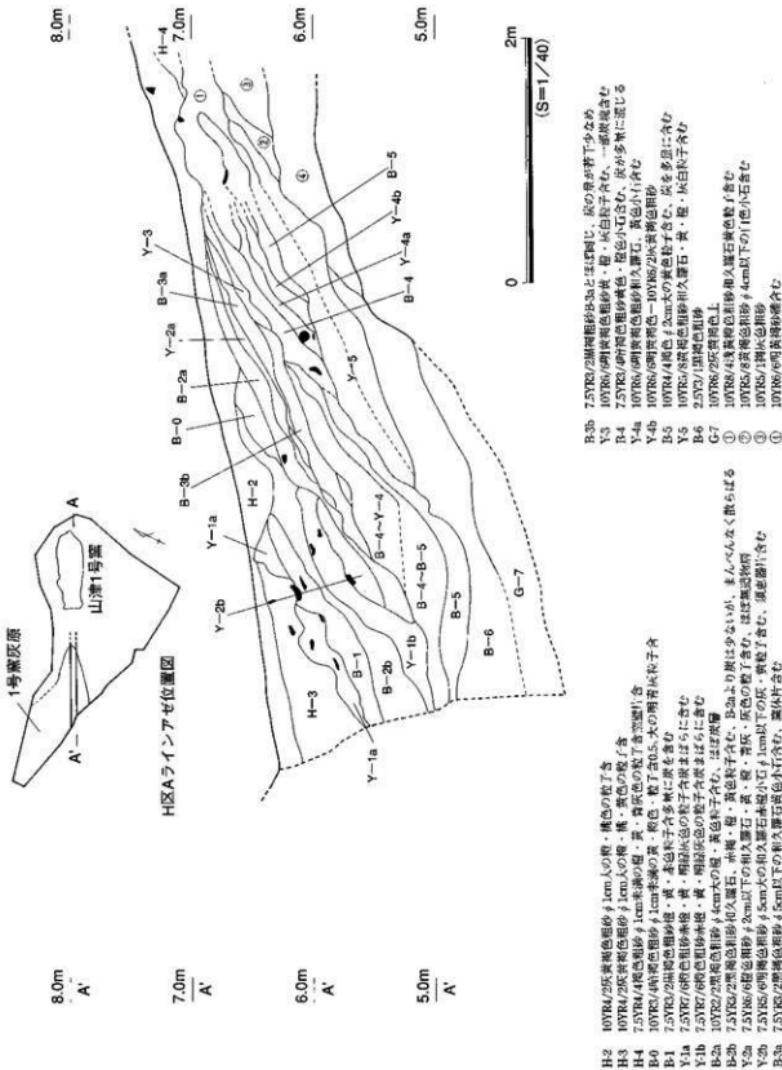
第113図 H区 山津1号窯体断面図（側壁は見通し）



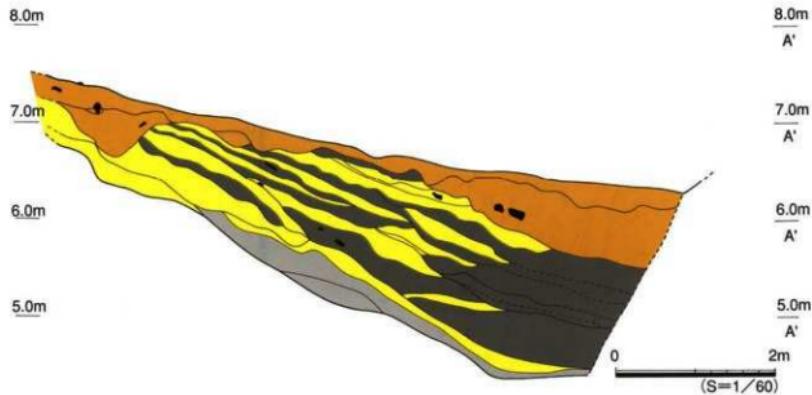
第114図 H区 A ラインアゼ土層断面図



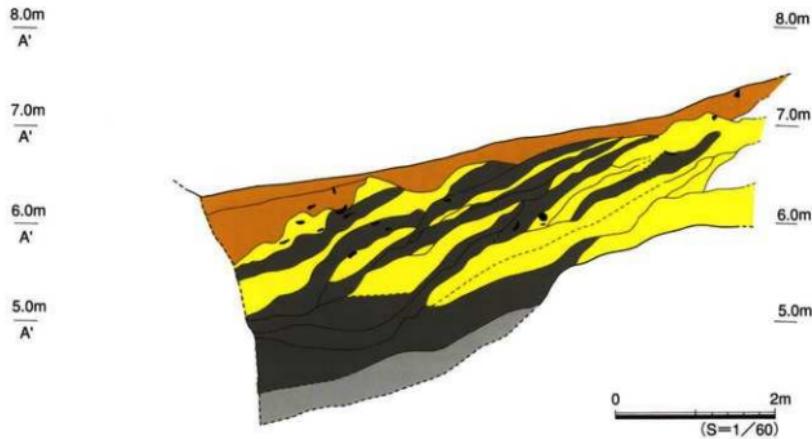
第115図 山津1号窓灰原（H区灰原下層）土層断面図（Aラインアセ）



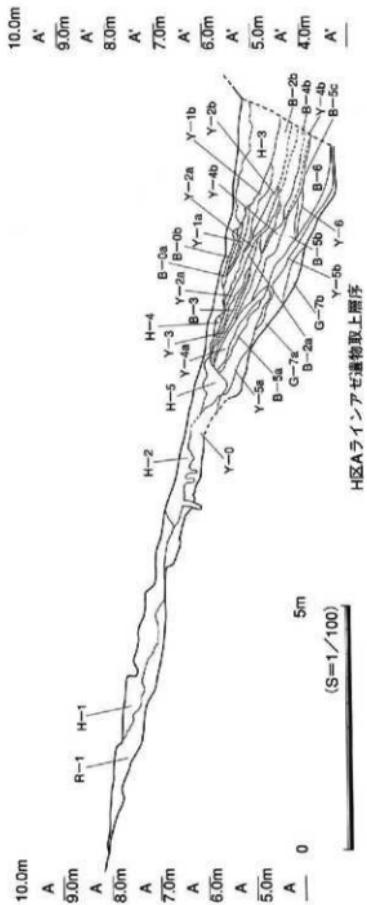
第116図 山津1号窯灰原（H区灰原下層）土層断面図（Aラインアゼ）



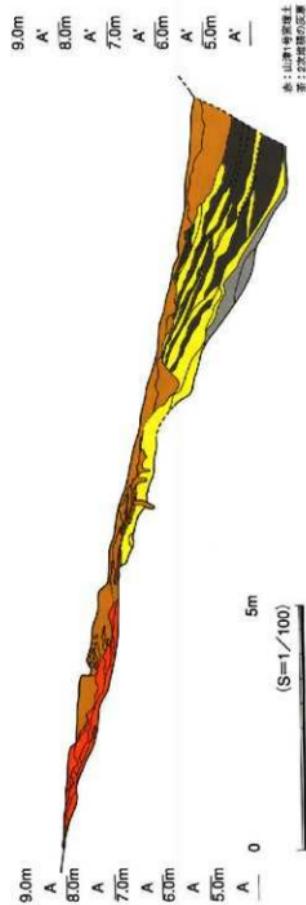
1号窯灰原土層堆積状況図



第117図 H区 山津1号窯灰原土層堆積状況図



H区Aラインアゼ土層概要図



赤：山野寺層
黄：山野寺層の上部（灰岩上・中層）
青：山野寺層の下部（シルト層、堅地）

第118図 H区 Aラインアゼ土層概要図

また、窓の南西には長さ2.2m、幅1.0m、深さ18cmの船底状の土坑を検出した（第110・111図・図版17・上）。この船底状の土坑は埋土が炭混じりのきたない赤茶褐色土でH-536~544の遺物を検出した。この他には床面の最北東端で幅10cm程度の小さなピットを検出している（第110図・図版17・下）。窓体長（縦軸）は上半が削平されて不明であるが、ピットは床面の横軸のほぼ中央にある。このピットに関しては窓の構築部材等の痕跡と考えている。

山津1号窓と、その灰原（H区灰原下層）との有機的な関係を検討するため、1号窓の正軸方向（北東→南西方向）に16mのセクション（A-A'ライン・以下、Aライン）を設定して（第75・114図）土層の観察を行った。また、各層位からは確実な層位の遺物を検出するため、畦掘削時を中心に詳細な遺物の分層取上げを行った。

A-A'ライン（以下Aライン）の土層堆積状況は第114・118図であり、先にa～jラインで詳細に見た通り、調査区内では1号窓の廃絶後に複数の灰原が堆積している状況である。この中で、Aラインの畦では特に1号窓灰原で興味深い上層の堆積状況が観察出来た。

H区の調査区は基本的に北東に高く、南西に低い。そのため、1号窓灰原も1号窓から廃棄されたと思われる膨大な須恵器が北東から南西に落ち込むような状況で上層が堆積している。土層は漆黒の灰原層のみではなく、黒色上層の間に炭の少ない黄色のシルト層が挟まれており、黒・黄色・黒・黄色……という互層の堆積が肉眼でもはっきりと確認できた（図版18・第117図）。

黒色土層は1号窓の窓から排出した灰原層のそれと直ぐ分かるが、黄色土の方は地山に近いサラサラした炭の少ない層で、遺物の量も黒色土に比すると少なめな実感を受けた。調査時の所見ではY-5層の黄色シルト層において、甕片が水平に張り付いて、意図的に敷き並べていたような状態で検出されており、これらの遺物（H-921~924）は傷みが多かったり、黄色に変色したりしていた。

これらの黄色土が堆積した解釈の一案としては、窓の焼入れ後、窓周囲が廃棄品だらけになるため、作業しやすいように地山等の黄色土を利用して簡単な整地を行って作業スペースを確保したものと考えられる。こういった黒と黄色の互層は確認出来る限り5回以上は繰り返されていることがAラインの断面から確認できた。

調査では灰原の良好な分層資料が得られるものと期待された。しかし、平面的にはこれらの細かい層位毎に掘削することは不可能であったため、少なくとも畦（Aライン）やトレンチからの出土遺物に関しては可能な限り確実な各層の遺物検出することを期し、図化・写真撮影後、少しづつ畦を取り外し、注意深く遺物の検出に努めた（図版19・下）。

これらの各分層は第115・116図の通りであり、略号のBは黒色の灰原層、Yは黄色のシルト（整地？）層、Hは1号窓廃絶後の上・中層の灰原を意味し、上より下に向かってH-1層、B-2層、Y-1層、B-2層、Y-2……と数が大きくなっている。最下層のG-7層は暗灰色にグライ化した灰原の一部で、性格的にはB-7層に該当するものである。

これらの1号窓の灰原は膨大な出土遺物が想定されたので、分層取上げで時期差を区別し得ると期待して調査を実施した。各遺物の詳細は以下に記し、分層調査の結果は第五章第五節に簡単な所見を記している。

以下、山津1号窯関連の遺物の報告に入る。H-473-527が山津1号窯最終床面から出土した遺物で、H-528-535が1号窯青色砂層出土遺物、H-536-544が1号窯舟底状上坑出土遺物、H-545-546が1号窯の埋土（浮き）から出土した大甕である。

H-547-931が1号窯の主軸（Aライン）畦から検出した確実な層位出土遺物で、第118図の取上げ順序に対応している。先述したようにBは灰原の、Yは黄色土、Hは新しい灰原層の略号で、またRは1号窯埋土の赤く焼けた茶褐色土の略号である。

H-932-1169は山津1号窯の灰原（H区灰原下層）から出土した遺物で、平面的には細かな分層発掘が不可能であったものの、ある程度、断面の各層位と比較しながら掘削して取り上げた遺物である。出土層位の確実性に関してはAラインの畦内から出土した遺物の方（H-613-929）が確実な層位資料といえる。また、H-1170-1209は1号窯灰原の層位不明な（トレンチ他の）出土遺物である。

H-473-527が山津1号窯最終床面から出土した遺物で、全体的に焼成がやや甘い黄灰色の個体が多い。出土状況としてはH-473と474、475と476、477と478、479と480、481と482、483と484、485と486、487と488、489と490、493と494とが蓋と身のセット関係であり、かつ、身が上、蓋が下で検出された。H-491と492もセット関係であったが、これは蓋が上、身が下で出土した。また、H-495と496は蓋を塊状に重ねて検出されている（第109図・図版15・下）。

H-473-506は坏口である。H-473は70%残、口径は12.4cm、器高4.3cmを測り、色調は灰色を呈する、天井の調整はほぼ全面回転ヘラケズリであるが、天井頂部にはケズリが及んでいない、外面の口縁端部は回転ナデが及んでおらず、ナデ痕が残る。H-474はH-473とセット関係にある身で、ほぼ完形、口径は11.1cm、器高3.8cmを測り、色調は青灰色を呈する、やや歪みとひび割れがある、底部の調整は周辺ヘラケズリで、底部中央には工具痕による条痕がある。

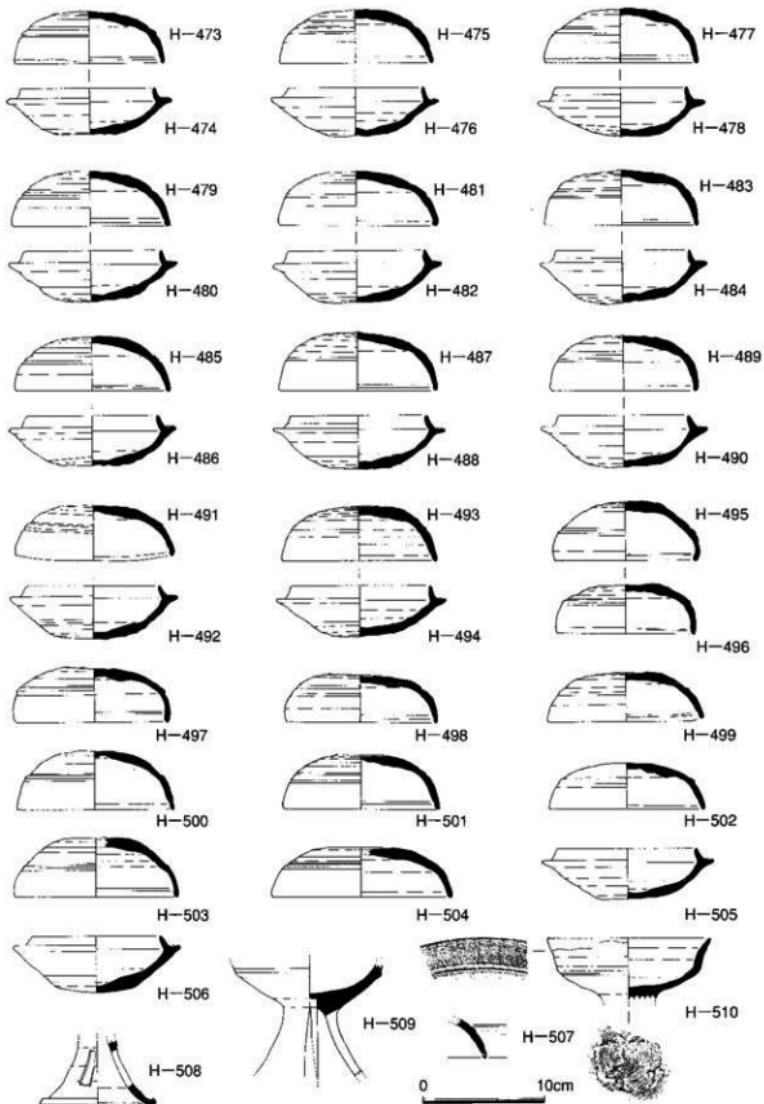
H-475の蓋は完形、やや軟質で色調は外面が淡灰色、内面が茶褐色を呈している、口径12.7cm、器高4.5cmを測り、天井の調整はヘラケズリを施す。H-476はH-475とセットの身である、焼成はやや甘く外面が灰色、内面が茶褐色を呈している、完形で口径11.1cm、器高4.3cmを測る、底部は回転ヘラケズリで底部中央にはヘラ起こし痕と思われる太い凹みがある、受部の端部は比較的シャープで、受部の立ち上がりも0.8cmと他の床面資料と比べて若干低い。

H-477の蓋は完形、口径12.9cm、器高4.5cmを測り、焼成は約半分が灰色でやや良好であるが、残りの半分は暗茶褐色で還元しきれていない、外面の口縁端部は回転ナデが及んでおらず、ナデ痕が残る。

H-478はH-477とセットの身で完形である、口径11.1cm、器高4.2cmを測り、還元されて灰色を呈しているが、一部はやや軟質部分もある、底部は平坦で回転ヘラケズリが明瞭に残る。

H-479は蓋の完形、焼成はやや甘く、完全に還元されていない、外面は白灰色、内面は赤褐色を呈している、口径13.0cm、器高4.5cmを測る、天井は回転ヘラケズリであるが、天井頂部までは及んでいないようである。

H-480はH-479とセット関係の身で完形、焼成はやや甘く全体的に外面が淡い暗茶褐色、内面は赤褐色を呈している、口径11.4cm、器高4.5cmを測り、底部のケズリは比較的しっかり施されている。



1号窯最終床面出土遺物①

第119図 H区 山津1号窯出土遺物①

H-481は蓋の完形、口径13.2cm、器高4.5cmを測り、焼成は甘く非還元である、色調は外面が白灰色で、外面頂部と内面とは非還元炎焼成で赤褐色を呈している、天井は回転ヘラケズリであるが、風化が著しく詳細観察は不能、頂部はナデか、H-482はH-481とセット関係にある身で、調査時に生じた新しい欠損がある。H-481と同じく外面が白灰色、内面が赤褐色を呈している、口径は11.5cm、器高4.5cmを測り、底部調整は回転ヘラケズリで、底部中央には工具痕と思われる条痕がごく微かに認められる。

H-483は口径12.8cm、器高4.6cmを測る完形で、焼成は不良、非還元炎焼成で内外面共に土師質と類似した明橙色を呈している。調整は風化で判りづらいが、天井部は径9cm幅の回転ヘラケズリを施している。H-484はH-483とセット関係にある身でH-483と同じく焼成不良で内外面共に淡灰～明橙色を呈している、特に外面の底部頂部のみ部分的に還元されており灰色を呈している、完形で口径11.3cm、器高4.6cmを測る、底部は回転ヘラケズリ調整である。

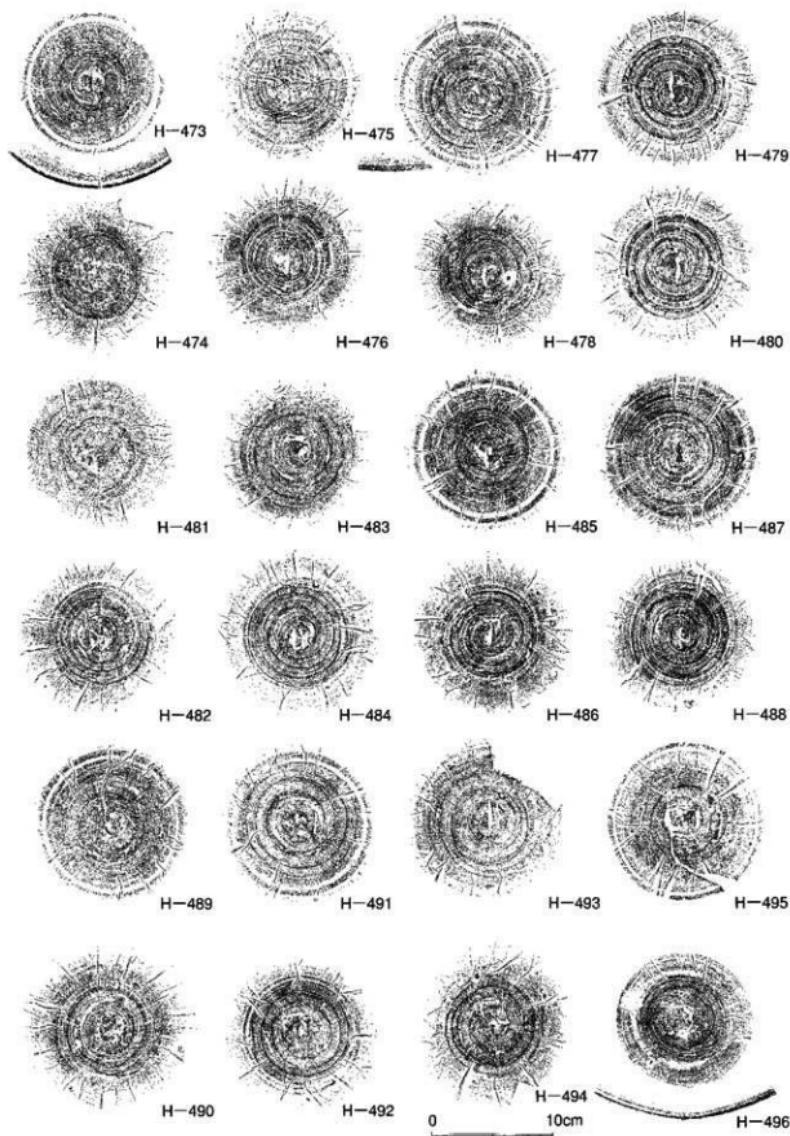
H-485は焼成が甘く、外面が黄褐色、内面が白灰色を呈している、完形品で口径12.8cm、器高4.5cmを測り、稜と内面には比較的しっかりした段がある、天井の調整は回転ヘラケズリを施すが、焼成が甘いためやや不明瞭である。H-486はH-485とセット関係にある身で口径10.8cm、器高4.1cmを測る完形品である、焼成は灰色を呈しているが、若干還元が及ばず黄褐色の部分が見られる、底部調整は径8cm範囲に施された回転ヘラケズリ調整である。

H-487は完形の蓋で、口径13.2cm、器高4.8cmを測る、焼成は不良で外面は黄灰色、内面は明橙色を呈している、天井部の回転ヘラケズリ調整の残り具合は比較的浅いものの、ケズリを施している範囲は径10cmと広い、内面にはややしっかりした段が見られる。H-488はH-487とセット関係にある身で口径11.4cm、器高4.4cmを測る完形である、焼成は外面が淡灰色を呈しているものの、内面は非還元の明橙色である、外面調整は底部全面に及ぶしっかりとした回転ヘラケズリである。

H-489は完形の蓋で、口径12.3cm、器高4.5cmを測る、焼成は甘く外面が白灰色、内面は暗橙色を呈している。稜の段ははっきりとしているが、天井の調整は浅いヘラケズリで、風化のためかやや不明瞭である。H-490はH-489とセット関係にある完形の身で、口径10.9cm、器高4.5cmを測る、焼成はやや甘く、外面は灰色、内面は暗橙色を呈している、底部は回転ヘラケズリ調整で、底部中央には工具痕による条痕が残る。

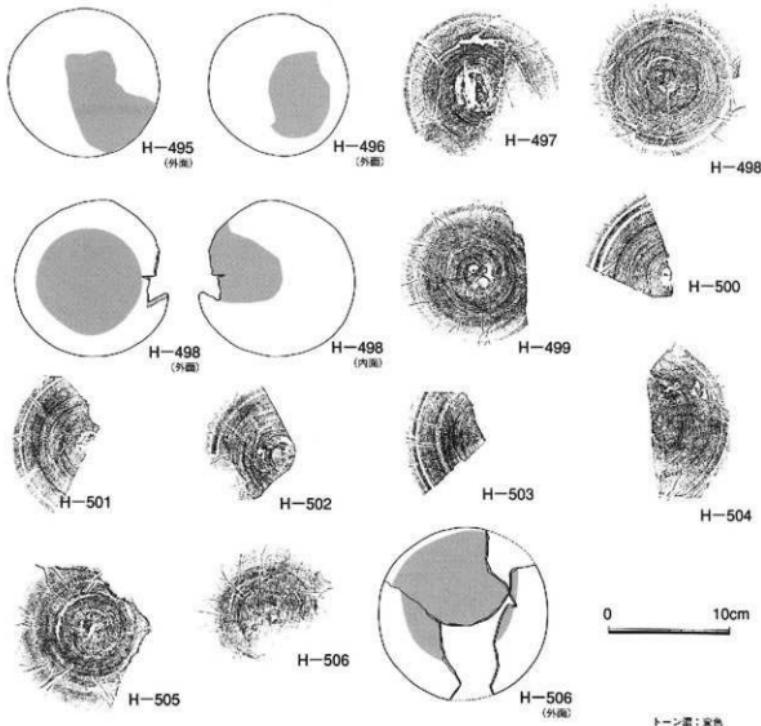
H-491は焼成が若干甘いが、一応内外面共に還元されて灰色である、口径13.1cm、器高4.5cmの完形であるがやや歪みがある、稜の段はややしっかりしており、天井調整は回転ヘラケズリで頂部に工具痕？と思われる条痕が微かに見える。H-492はH-491とセット関係にある身で部分的に橙色を呈する箇所もあるが、基本的に内外面共に灰色の焼き上がりである、口径11.0cm、器高4.4cmでやや歪みあり、受部周辺に白灰が被灰している、底部調整は径8cm範囲の回転ヘラケズリを施し、底部中央に工具によると思われる条痕が残る、また、外面の回転ナデによる調整では、凹線と表現できる細かな凹みが生じている。H-491・492は歪みがあり、セット関係としてうまい具合に重ならないが、検出段階からこの今まで、被灰状況を見てもわかるように床面資料の中では蓋が上に、身が下になっていた。

H-493は約70%残、内外面とも灰色を呈しているが焼成はやや悪い、口径12.9cm、器高4.5cmを測



1号窯最終床面出土遺物②(拓影)

第120図 H区 山津1号窯出土遺物②

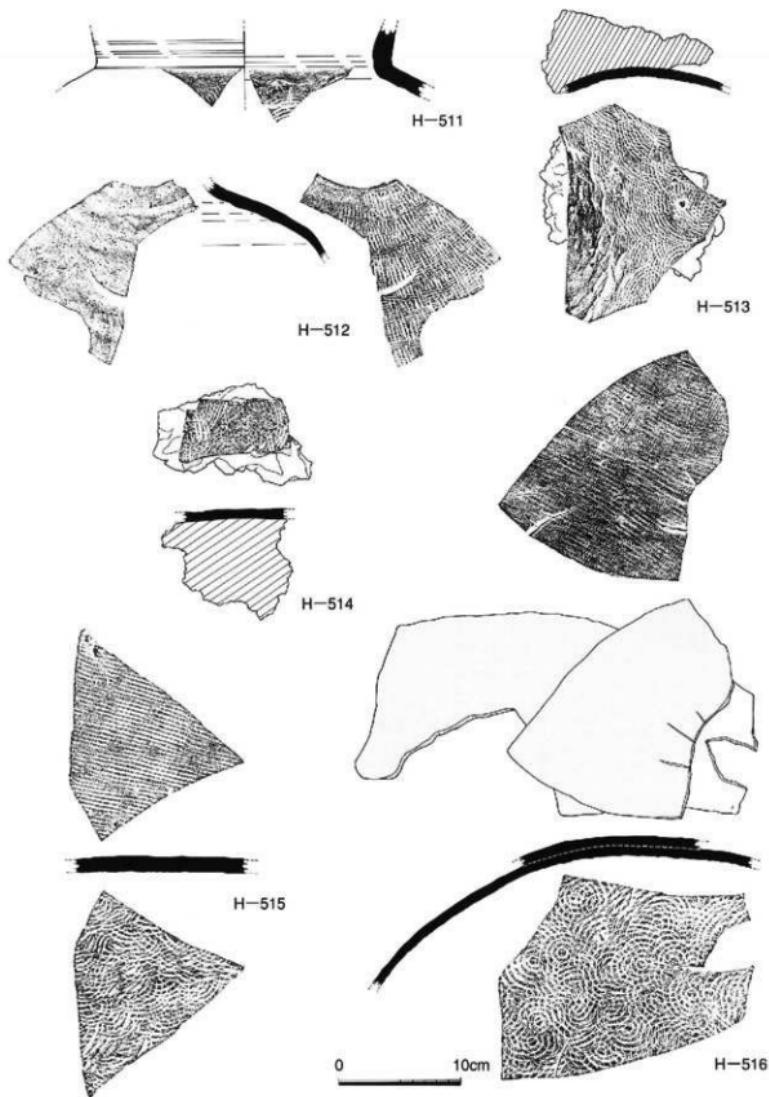


1号窯最終床面出土遺物③(拓影ほか)

第121図 H区 山津1号窯出土遺物③

る、天井の調整は回転ヘラケズリで、頂部にはヘラ起こし痕と思われる太い凹みが見られる、稜の部分はほんの僅かな段になっている、H-494はH-493とセット関係にある身で90%残、口径11.6cm、器高4.2cmを測る、焼成はやや不良で、基本的には内外面共に還元した灰色を呈するが、部分的に黄褐色を呈している、底部調整はやや施文幅が狭いヘラケズリで、底部全面に施されている。

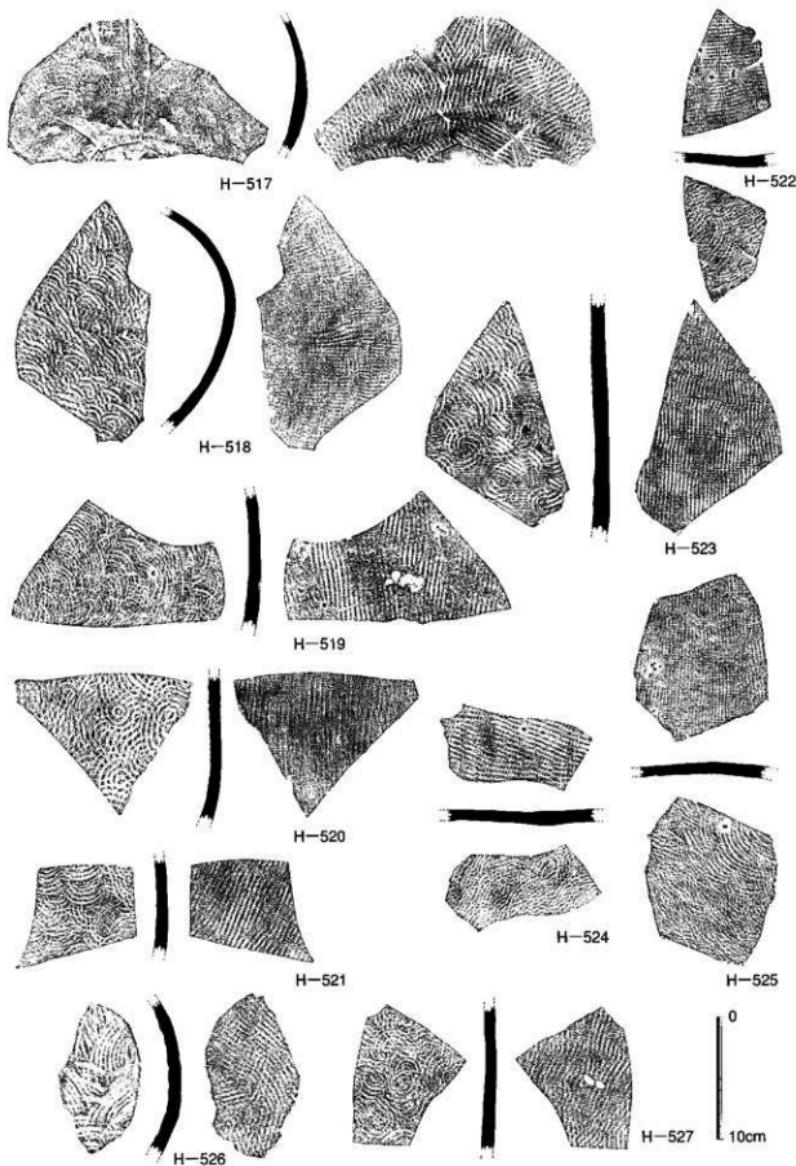
H-495・496は完形の蓋(形の須恵器)であるが、検出時に塊状に重ねられた状況で出土している、具体的にはH-495がH-496の下になっていた(図版15・下)、焼成具合も全体的に灰色を呈するものの、元来、床面に接していたと思われるH-495の天井部分は非還元で黄灰色を、また下向きに重ねられていたH-496の天井付近も黄灰色を呈しており焼成が甘い、何れもほぼ完形で稜の部分は段を作っており、一応蓋の器形であるが、H-495が口径11.7cm、器高4.9cm、H-496が口径11.3cm、器高4.1cmと、他の床面出土の蓋と比べて一回り小柄で、特にH-495の天井部が極めて丸みを帯びている。従来の史学としては、蓋(厳密には「蓋形土器」)とすべきであろうが、出土状況や、セット関係にある



1号窯最終床面出土遺物④

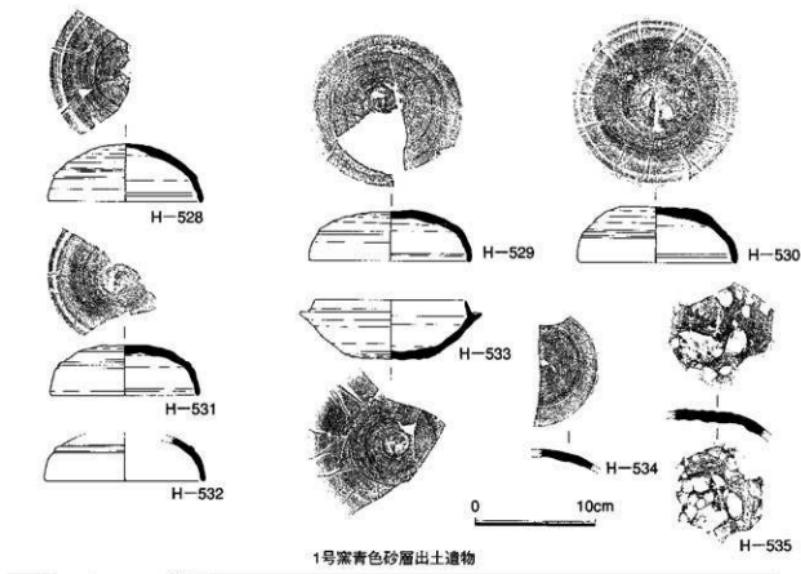
トーン淡：黒灰

第122図 H区 山津1号窯出土遺物④

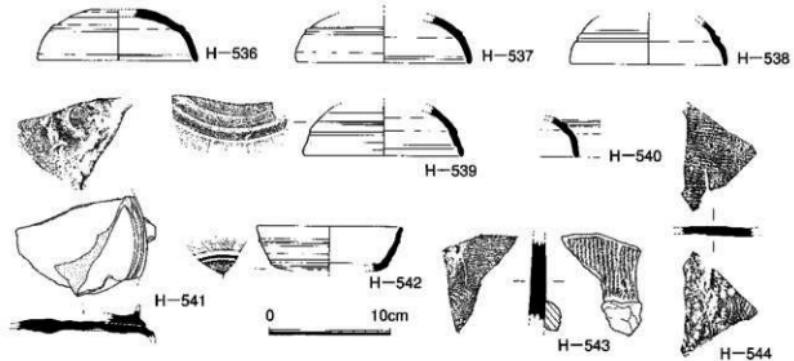


1号窯最終床面出土遺物⑤

第123図 H区 山津1号窯出土遺物⑤



1号窑青色砂层出土遗物



1号窑舟底状土坑出土遗物

第124図 H区 山津1号窑出土遺物⑥

身の不在、やや小型で丸い器形からして、蓋というより身（塊）としての意識で製作された可能性もある。

H-497～II-504・507は坏Hの蓋でH-497が60%残である。H-498は口径12.4cm、器高3.9cmを測る80%残の蓋で、稜は微かに残る、天井部は白灰色でそれ以外の内外面は灰色を呈している。II-499は70%残、H-500～504は20～30%残の細片、H-507は微細片である。

H-505・506は坏Hの身で、H-505は60%残、焼成は普通で灰色を呈する、底部はケズリ→ナデカ、工具による条痕も残る。H-506は80%残、焼成は不良で外面中央は黄赤褐色（非還元）で、その周囲の外面は還元された灰色を呈する、内面も内側は赤褐色で、その周囲は灰色である。

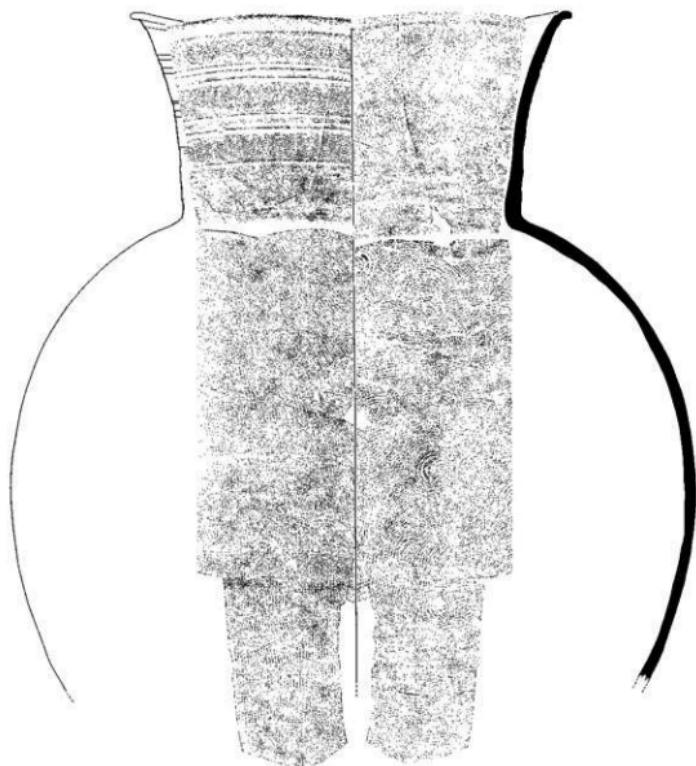
H-508～510が高坏片である、H-508は脚片で、三方に（長方形の）透かし痕が見られる、内外面に黄色の灰を被っている。H-509は坏～脚にかけての小片で歪みがある、基本的には灰色を呈するが、やや黄褐色の非還元部分が僅かに見られる、二方向の三角透かしを施している。H-510は高坏の坏部で、坏部分は完形、但し歪みが認められる、焼成はやや甘く赤褐色～暗灰色を呈している、脚部との接合部分に沈線が見られるが、接合沈線であろうか。

H-511～527は最終床面出土の甕片である、H-511・512は頸部片、H-513・514は体部片と窯壁片とが溶着しているもので、H-513は被灰があり二次焼成か。H-515は内外タタキの甕片、H-516は大型の甕片同士が溶着した破片で被灰している、外側のものは長軸20.0cm、短軸15.5cmを測り、内側のものは長軸31.6cm、短軸15.8cmを測る。H-517～527はタタキ調整の甕片である。以上の甕片は最終床面から出土しており、同一個体の可能性も含むが、現状では接合できない。また窯壁と溶着した甕片や、甕片同士が溶着した資料などは置台として転用していると考えている。

H-528～535は1号窯中央に見られた青色砂層出土遺物である。これは床面の中央部に窯の主軸方向（北東～南西）に沿って長さ3m、幅0.5～1m、層厚10cmの堆積内から出土したもので、層位的には最終床面より古い堆積（下層）である（第111図・図版14・下）。

II-528～532は坏Hの蓋、H-533が身で、H-534・535は小片（坏Hか）である。H-528は25%残の小片、天井部は丸みを帯び、ケズリは明瞭で端正である、焼成は普通で灰色を呈する、稜には沈線を二条入れるが、上側では沈線の重なりがある。H-529は70%残で口径13.2cm、器高4.1cmを測る、焼成はやや甘く赤褐色～淡灰色を呈している、天井部のケズリ幅は約9.4cmと広い範囲に及んでいる。H-530は完形であるがやや歪み、ひび割れが見られる、口径13.0cm、器高4.6cmを測り、焼成はやや不良で、内外面共に暗青灰色を呈している、外面に黄灰が被灰しており、天井部分にはヘラ起こしと思われる凹みが見られ、天井調整は回転ヘラケズリを施す。H-531は35%残、焼成は甘く白灰～黄褐色を呈する、天井は頂部にケズリが及ばず凹凸が激しい。H-532は細片で、灰黒色を呈している。H-533の身は70%残、（復）口径は12.4cm、器高4.8cm、受け部高1.2cmを測り、器高と受け部高がやや高い、焼成は普通で灰色を呈し、底部のケズリ幅は6.7cmを測る。H-534は坏Hの蓋か、粘土紐痕が剥離し擬口縁状になっており、きれいに半円形の形を呈している。II-535は須恵器片、二次焼成か否かは不明であるが、傷みがひどく内外面共に凹凸が著しい。

H-536～544は1号窯床面の船底状土坑からの出土遺物である。これは1号窯の南西に検出された、

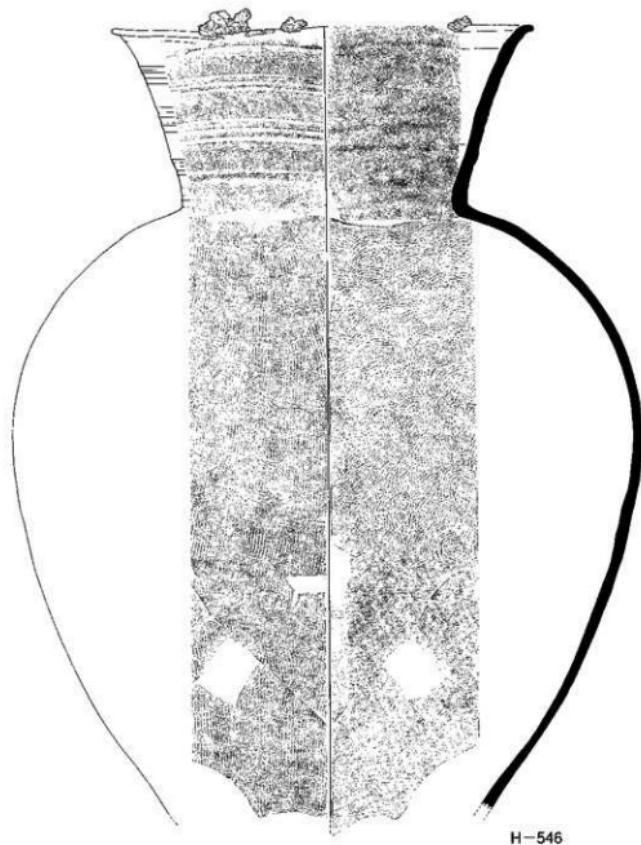


H-545

0 25cm
(1/5)

1号窯埋土（浮き）出土遺物①

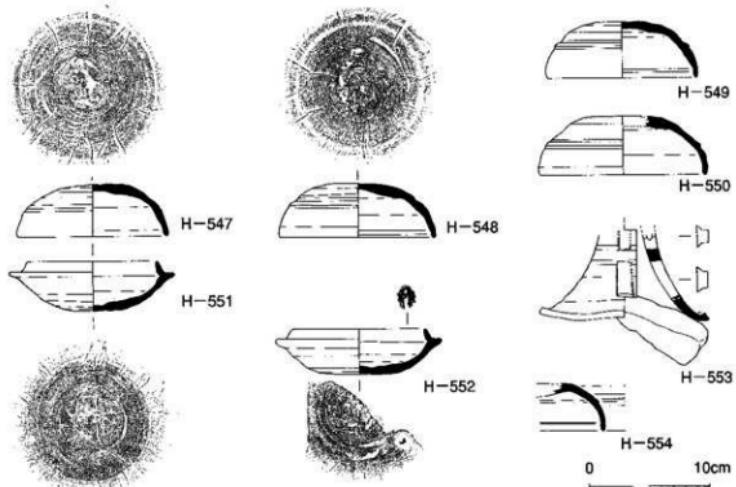
第125図 H区 山津1号窯出土遺物⑦



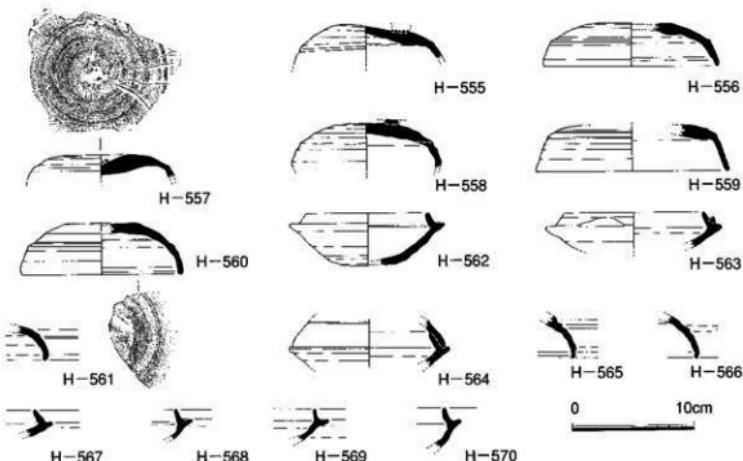
0 25cm (1/5)

1号窯埋土（浮き）出土遺物②

第126図 H区 山津1号窯出土遺物⑧



Aライン R-1層（山津1号窯 窯体内埋土）出土遺物



Aライン Y-0層（山津1号窯 前庭部 黄色砂礫層）出土遺物

第127図 H区 Aラインアゼ出土遺物①

長さ2.2m、幅1.0m、深さ18cmの船底状の土坑であり、埋土は灰混じりのいたない赤茶褐色土で、若干の須恵器細片が検出された。出土遺物のH-536～544は何れも細片で、H-540が環Hの蓋、H-541が環Hの溶着資料、H-542が高环の環部、H-543・544が甕片である。

H-536は微細片で、H-537は比較的口縁部が残った破片、(復)口径14.2cmを測り、外面に白灰が被っている、焼成は普通で青灰色を呈する。H-538～540も微細片で、H-538は黒灰色を、H-539は内面が黄褐色で外側が淡灰色を、H-540は灰色を呈している。H-541は環Hの蓋と身とが溶着した資料で、内外面に傷みが認められる。H-542は高环の環部片の微細片で、底部外側に刺突痕を施している。H-543・544は甕片である。

H-545・546は1号窯埋土(浮き)から出土した大甕である、調査時の所見では、1号窯の床面西部(第109図のH-491・492西側の甕片集中地点)から大部分が出土しており、窯密には1号窯埋土か、1号窯の北西にあるSH113関連のものか不明瞭な地点からの出土である。

山津1号窯の堆積状況を確認するために、1号窯の主軸方向に応じてA-A'ライン(以下、Aライン)のセクションを設定したことは先述した通りである(第74図)。以下、このAラインの堆積状況と、各層出土の確実な遺物を報告し、1号窯灰原(H区灰原下層)の堆積状況と出土遺物を述べる。

第114図がAラインの土層断面図であり、これらの層位を模式的に色分けしたものと、その畦内を中心取上げた確実な層位出土遺物の層序を第118図に示している。

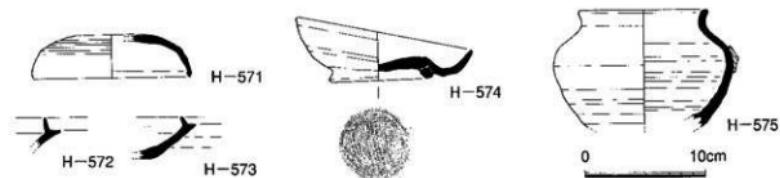
層の堆積はAラインに直交したa～jラインの各層の堆積状況と基本的には同一である。a～jラインの各層出土遺物は先述した通りであり、Aラインでは畦の北東側(図でのAラインでは左側)には赤く焼けた山津1号窯の埋土が堆積しており(R-1層)、この層よりは1号窯と同時期のみの出土遺物が検出されている(H-547～554)。

H-555～570はAラインのY-0層出土遺物で、平面図の第75図ではeラインからfラインの間で検出された、比較的平坦な黄色砂礫シルト層に該当する。これは、位置的に見て1号窯の前庭部分に当たると思われるものの、出土遺物(H-555～570)としては1号窯と同時期一やや新しい遺物を含んでいるので、1号窯廃絶後にも何らかの手が加わった可能性も考えられる。また、Aライン畦のH-1～5層から取り上げた遺物(H-571～612)は6世紀末～7・8世紀代の遺物も混じっており、1号窯が廃絶後に堆積した、その他の灰原層(H区灰原中・上層)に当たる。

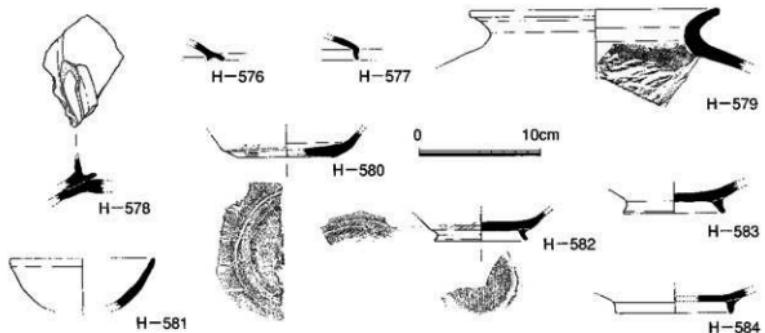
第118図のAラインの右側には黒色と黄色との互層による灰原層が最大深さ2mにも及び堆積している。これは何度も述べているように、H区の灰原下層、すなわち1号窯に伴う灰原と判断出来る。Aラインでも特に1号窯灰原の各層位出土遺物を検出するため、セクションの表と裏からの土層図を実測し(第115・116図)、畦内の確実な層位出土遺物を検出した(H-613～931)。

以下、Aラインから出土した各層からの確実な層位出土遺物を概観する。H-547～554がAラインR-1層出土遺物、H-555～570がY-0層出土遺物、H-571～575がH-1層出土遺物、H-576～584がH-2層出土遺物、H-585～596がH-3層出土遺物、H-597～598がH-4層出土遺物、H-599～612がH-5層出土遺物である。

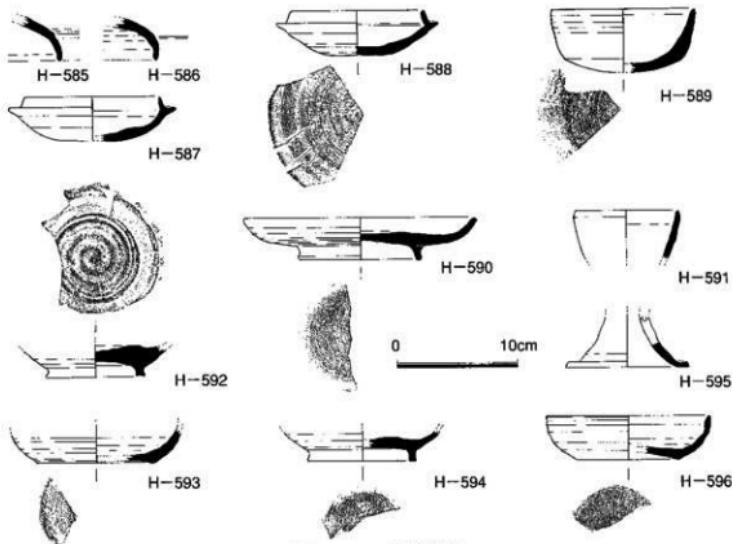
H-547～550・554は環Hの蓋、H-552が身で、H-553は高环である。H-547・551はAライン



Aライン H-1層出土遺物

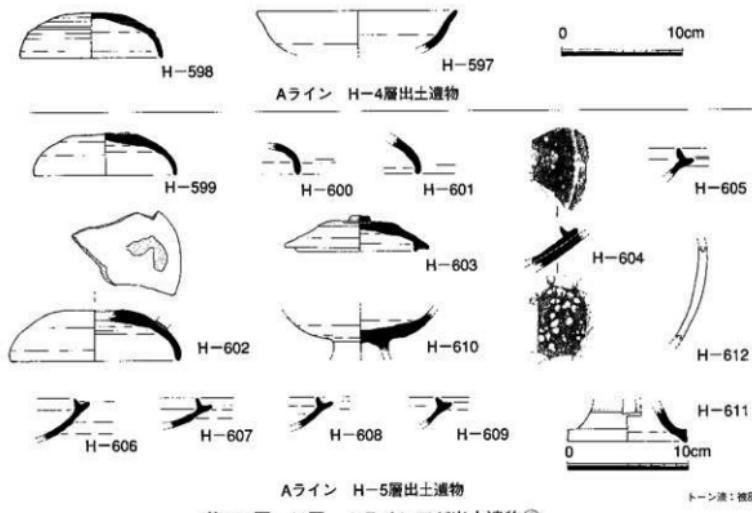


Aライン H-2層出土遺物



Aライン H-3層出土遺物

第128図 H区 Aラインアゼ出土遺物②



第129図 H区 Aラインアゼ出土遺物③

トーン法：被灰

の最北東付近で検出された完形のセット関係にある遺物で、他の1号窯床面出土遺物と同性質のものであるが、調査当初のトレチ掘削時に検出されたものである。H-547は口径12.6cm、器高4.3cmを測る、天井部の調整は回転ヘラケズリであるが、頂部付近はほとんどケズリが及ばないほど浅く、ケズリ幅も6.5cm幅程度である。焼成は良好で還元された灰色を呈している。H-551はH-547とセット関係で検出された身で、H-547と同じく焼成は良好、灰色を呈している、完形で口径10.7cm、器高4.2cmを測る、底部はケズリを施すが、頂部は極めて浅いか、ほとんどケズリが及んでいない。

H-548は完形の環日の蓋で焼成はやや軟質、黄褐色～黄灰色を呈している、口径13.0cm、器高4.4cmを測り、天井部は回転ヘラケズリを施す。H-549は40%残、歪みがあり復元の信頼度は低い、稜の段は明瞭で、天井のケズリは9cm程度の幅に施されている。H-550は20%程度残、やや軟質で黄褐色を呈する部分もある。H-552は坏IIの身で30%残、外面が被灰しており調整は不明瞭、内面の一部で表面が薄く剥離しており、胎土の観察が出来る。H-553は高坏と石との溶着資料で、石は比熱を受けて赤みを帯びている、高坏部分は脚部のみ40%残で、二段三方の方形透かし、この透かしは直で切り込んだ後、斜めからえぐっている珍しい透かしである。

H-555～570はAラインY-0層出土遺物で、何れも坏日である。H-555は天井部を中心とした歪みのある破片で、内外に黄灰を被っており、二次焼成とも思われる。H-556は25%の細片、淡灰色を呈している。II-557も天井部のみだが、ヘラ記号が見られる。H-558は40%ほど残、傷みが激しく二次焼成していると思われる、内外に黄灰を被り、また外面には別の須恵器片が付着する。II-559は細片で、稜から急激に屈曲する、坏日の身か壺類の蓋であろうか。H-560も小片で天井部は平坦だが凹凸がある、また、内面に沈線状の痕跡が見られる、色調は稜より下は黒灰色を呈し、稜より

上は淡灰～白灰を呈している。H-562は30%残の坏Hの身で（復）口径は10.0とやや小さい。H-563・564は坏Hの蓋と身とが溶着しており、H-565～570は復径が不可能な坏Hの微細片である。

H-571～575はAラインH-1層出土遺物で、H-571は歪みのある坏Hの蓋、外面部分に変色がある。H-572・573は復径が不可能な坏H身の微細片で、H-574は70%残（歪み激しい）の坏Fの身で底部に切り離しは静止糸切りである。H-575は壺片で外面に厚く被灰しており、窓壁片も付着している。

H-576～584はAラインH-2層出土遺物で、H-576・577は蓋（坏Fか）の微細片、H-578は坏Hの蓋と身とが溶着した細片、H-579は壺の細片、H-580は底部片、H-581は壺？の細片、II-582は高台の細片で底部の切り離しは静止糸切りである。H-583も高台片だが、外側面に灰を被っている、二次焼成か。H-584の底部はナデである。

H-585～596はAラインH-3層出土遺物で、H-585・586は坏H蓋の微細片。H-587・588は身でこれも細片、H-587は外側面に被灰しており、II-588は底部中央にケズりが及んでいない。H-589は坏（壺）か、微小片で詳細は不明である。H-590は50%残の皿？、底部の切り離しは糸切りで（復）口径19.2cm、器高3.5cmを測る。H-591は壺の口縁片、H-592は壺の底部片で内側にロクロ目が顯著、H-593は糸切り痕を残す底部片で、H-594は高台片、底部調整は静止糸切り→ナデ調整である。H-595も微細片、高環の脚か。H-596は糸切り痕を残す壺Aの細片である。

H-597・598はAラインH-4層出土遺物で、II-597は軟質（白灰色）の高环片、H-598は30%残の坏H蓋で、（復）口径11.8cm、器高3.7cmを測る。

H-599～611はAラインH-5層出土遺物である。H-599は30%残で稜の無い坏日の身、（復）口径11.7cm、器高3.4cmを測り、外側面に被灰する。H-600・601は坏H蓋の微細片。H-602は30%残の坏Hの蓋、無段で肩部に別の須恵器片と灰を被る。H-603は80%残で口径9.7cm、器高2.9cmを測る、小型の坏G蓋と思われる、天井はケズっており、扁平でボタン状のつまみを貼り付けている。H-604は細片の溶着資料で、傷みが顯著な上凹凸部分が多い。H-605～609は微細片で復径は不能、何れも立ち上がりが極めて低い坏日の身である。H-611は高环の微細片、H-612は上師器の細片である。

H-613～931は山津1号窯灰原（H区灰原下層）の出土層位が確実な遺物である。繰り返しになるが、概要を記しておく。1号窯の灰原（H区灰原下層）はH区西部に位置し、Aラインでも畦西部で観察可能である（第118図）。H区の調査区は基本的に北東に高く、南西に低い。そのため、1号窯灰原も1号窯から廃棄されたと思われる膨大な須恵器が北東から南西に落ち込むような状況で土層が堆積している。土層は漆黒の灰原層のみではなく、黒色土層の間に炭の少ない黄色のシルト層が挟まれており、黒・黄色・黒・黄色……という互層の堆積が肉眼でもはっきりと確認できた（図版18、第117図）。黒色土層は1号窯の窯から排出した灰原層のそれと直ぐ分かれるが、黄色土の方は地山に近いサラサラした炭の少ない層で、遺物も黒色土に比すると少なめな実感を受けた。調査時の所見ではY-5層の黄色シルト層において、甕片が水面上に張り付いて、意図的に敷き並べていたような状態で検出された。これらの遺物（H-921～924）は傷みが多かったり、黄色に変色したりしているので、何らかの整地的な性格を有しており、土器片を用いて乱雑な灰原を整えたものと想定している。

1号窯の灰原は最大深度2mにも及び、膨大な遺物が出土しているが、これらの黄色土が堆積した解釈の一案としては、窯の焼入れ後、窯周囲が廃棄品だらけになるため、作業しやすいように地山等による簡単な整地を行って作業スペースを確保したものと考えられる。こういった黒と黄色の瓦層は5回以上は繰り返されていることが、Aラインの断面から確認できた。

調査では灰原の良好な分層資料が得られるものと期待された。しかし、平面的にはこれらの細かい層位毎に掘削することは不可能であったため、少なくとも畦（Aライン）やトレンチからの出土遺物に関しては可能な限り確実な各層の遺物検出するため、図化・写真撮影後、少しづつ畦を取り外し、注意深く遺物の検出に努めた（図版19・ド）。

それらの各分層は第115・116図の通りであり、略号のBは黒色の灰原層、Yは黄色のシルト（整地？）層、Hは1号窯灰絶後の上・中層の灰原を意味し、上より下に向かってH-1層、B-1層、Y-1層、B-2層、Y-2……と数が大きくなっている。最下層のG-7層は暗灰色にグライ化した灰原の一部で、B-7層と同じ性格を有している。

H-613～911の出土遺物は、上記の畦内からの出土遺物で、各層位の蓋然性がかなり高い資料である。1号窯の灰原全体の遺物に関しては、これらの結果を基に、概ね断面図で対応すると考えられる層位を平面的にある程度まとめて取り上げた（H-932～1169）ので、畦の出土資料よりは、層位の確実性がやや劣る資料といえる。

H-613～625はAラインの第115図のB-1層出土遺物である。H-613～617・643・644は坏Hの蓋で、何れも網片である。H-618～624は坏H身で、網片が多い、ある程度復元可能なH-618は50%残、（復）口径10.8cm、器高4.1cmを測り、H-621は80%残で口径10.2cmを測る、但し、H-621は（重ね焼きの重みのためか）歪みが生じている。H-625は坏Hの蓋と身との溶着資料である。

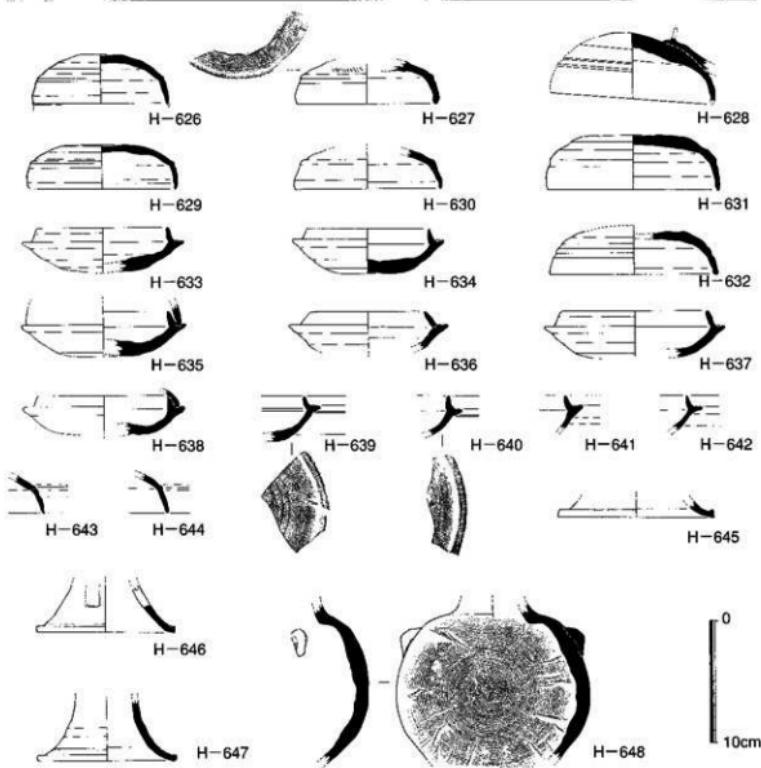
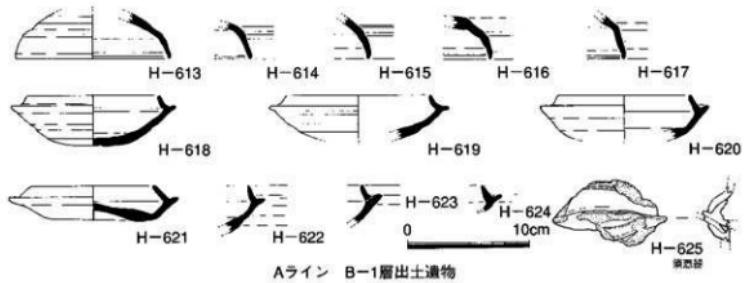
H-626～648はB-1（～Y-1）層出土遺物である。H-626～632は坏Hの蓋、H-626は網片で外面の肩より下に激しく被灰している。H-627は肩部に刻印を施している。H-628は30%残、肩部に別の坏H身が溶着し、口縁端部は直線で擬円錐状になっている。II-629は40%残、天井はケズっているが、ケズリの範囲は天井周辺のみ残る。H-630・631は焼成が甘く白灰色を呈し、H-632の天井部は歪みか。II-643・644は復径が不可能な微細片である。

II-633～642は坏Hの身で、II-634は40%残、外面に被釉しており、H-635は蓋と身とが溶着し、身外面に被灰する。H-636・637・639も外面に被灰しており、II-638は二次焼成を受けて外面に被灰と歪みが認められる。また、H-639と640は受部外面の下付近に凹みが認められる。

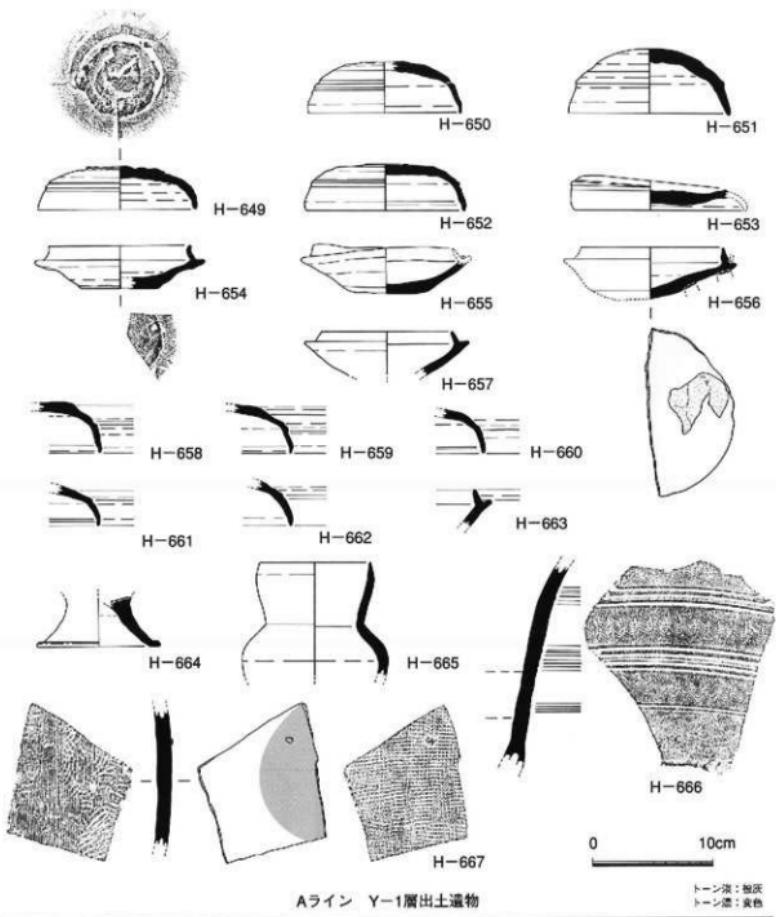
H-645～647は高坏の脚片で、H-648は提瓶片である。

H-649～667・658～662はAラインY-1層出土遺物である。H-649～653は坏Hの蓋、H-649はほぼ完形で90%残、口径13.0cm、器高3.6cmを測る、天井部が特徴的でヘラ切り未調整の凹凸の残るまま（範囲径6.2cm）焼成している。H-650は30%残、稜の段の部分できれいな擬円錐状の剥離痕が生じている。H-651は50%残、歪み・火彫れあり。H-653は70%残であるが、歪みが大きい。H-658～662は復径が不可能な微細片である。

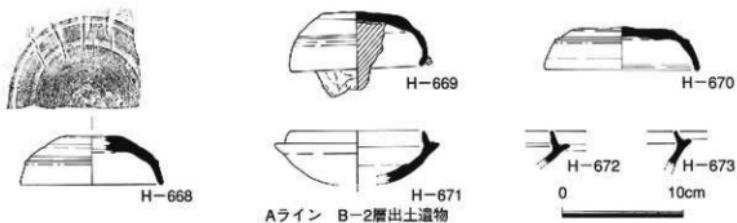
II-654～657・663は坏Hの身である。H-654は小片で歪みが生じているが、底面にヘラ切り痕の



Aライン B-1 (~Y-1) 層出土遺物
 第130図 H区 Aラインアゼ出土遺物④

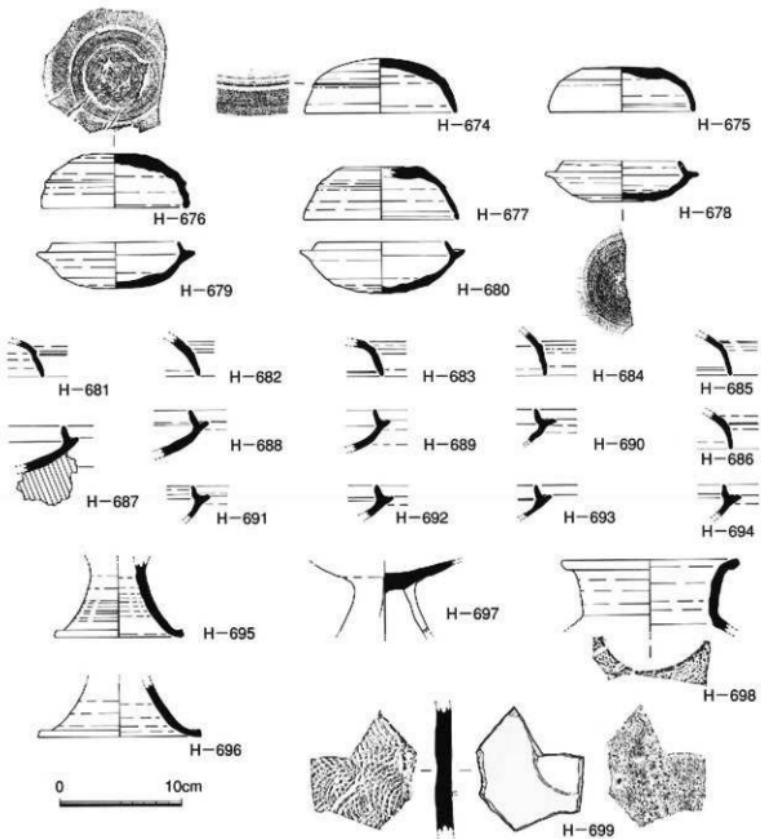


Aライン Y-1層出土遺物



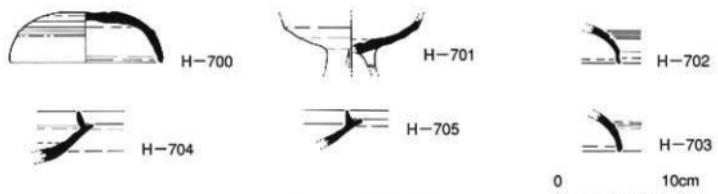
Aライン B-2層出土遺物

第131図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑤



Aライン B-2~Y-3層出土遺物

トーン添：鉛灰



Aライン B-3層出土遺物

第132図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑥

残る平坦面があり、(復)径では6.2cm程度の回転台の上で製作していたものと思われる。H-655は70%残で歪みあり、外面に被灰し痛みが激しい、二次焼成を受けている。H-656は50%残、体部に被灰と歪みがあり、別の須恵器片が付着している、これらの痕跡は重ね焼きの結果生じたものと考えられる。II-657は小片、受部外面に黄灰を被っている。

H-664は脚部片、脚高が3.9cmと低く、低脚の塊・坏類と考えられる、脚と坏部との接着力が残る。H-665は直口壺(壺C)で口縁が5.0cmと高い、口縁内面と肩部に被灰している。H-666は壺A片、H-667は壺片転用の置台で円形の変色が見られる。

H-668~673はAラインB-2層出土遺物である。H-668~670は坏Hの蓋で、H-668は棟より下の受部外面に黄灰を被っている。H-669はほぼ完形で口径10.8cm、器高4.6cmとやや小ぶり、外面に被灰を受け、内面に大きな窯壁片が付着している。H-671~673は坏Hの身で何れも小片である。

H-674~699はAラインB-2-Y-3層出土遺物である。H-674~677、681~686が坏Hの蓋で、稜の部分をナデで間ませたり、先尖工具で沈線を入れたりしている。また、口縁外面にナデによるつまみ痕跡が明瞭に残る。H-676は天井のケズリ調整が明瞭に残っている。H-681~686は復径が不可能な細片。

H-678~680、687~694は坏IIの身である。H-678の底部調整はヘラケズリを施す。H-679は30%、H-680が50%残の破片で、H-687~694は微細片である。

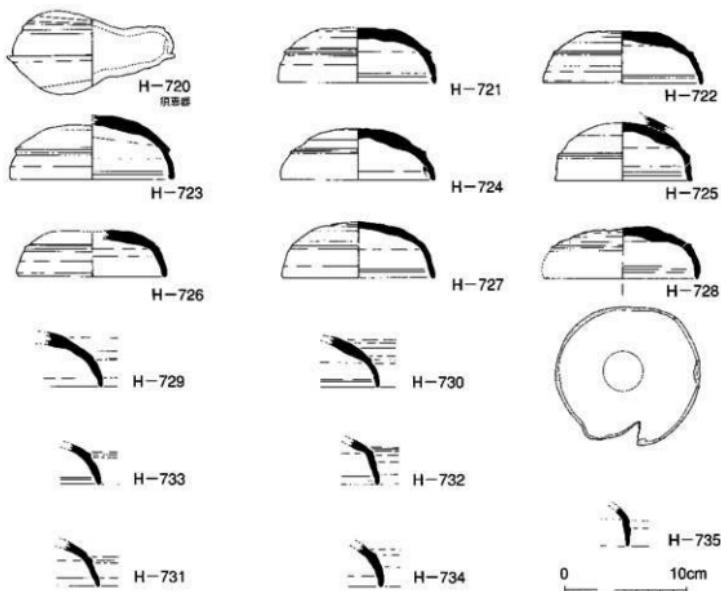
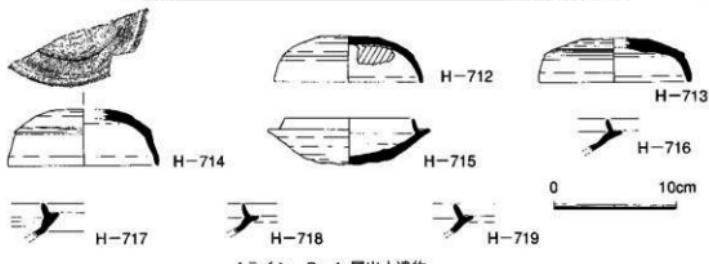
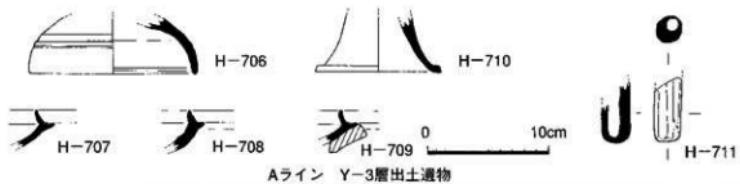
H-695~697は高坏の細片で、H-698は壺Bの口縁部、H-699は壺片転用の置台で円形の剥離痕が残る。

H-700~705はAラインB-3層出土遺物である。H-700は30%残、(復)口径12.2cm、器高4.1cmを測る、軟質で色調は白灰色を呈している。H-701は高坏片、軟質で白灰色を呈している。H-702~705は坏Hの微細片である。

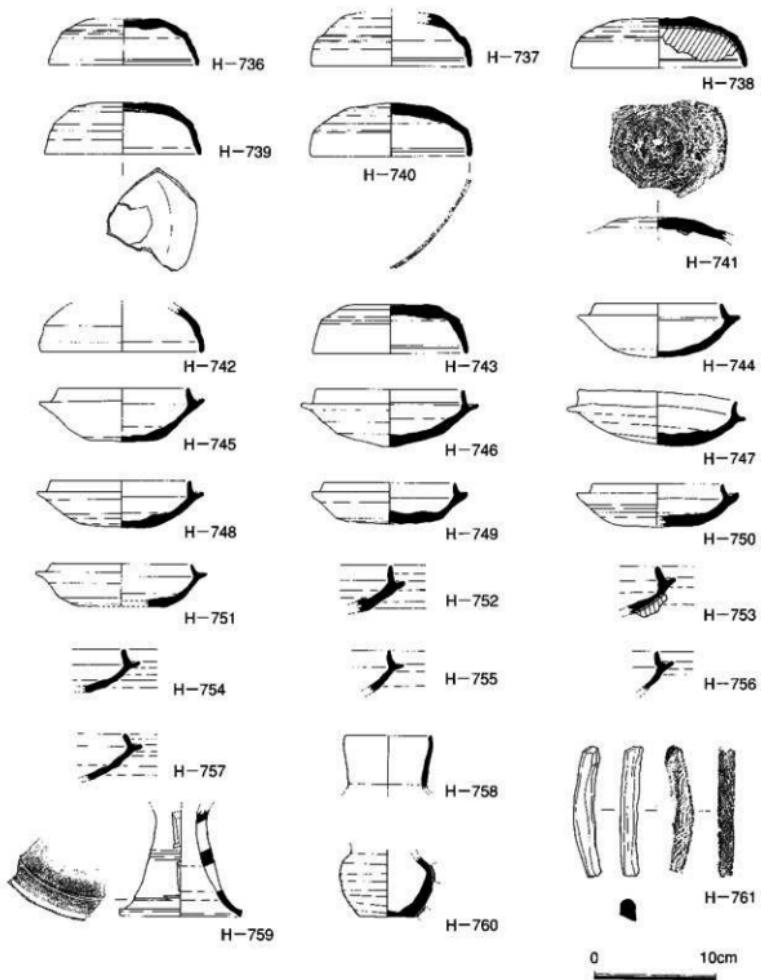
H-706~711はAラインY-3層出土遺物である。H-706~709は坏Hの小片で何れの外面にも灰が被っている。H-710は脚の小片である。H-711は須恵質の脚状の破片である、外面は縦方向のナデで面が出来ており、中空で径1cmの孔が穿かれているが、この孔は貫通していない。

H-712~719はAラインB-4a層出土遺物の坏Hである。H-712は25%残、内面に窯壁が付着している。H-713は30%残、H-714は25%残で稜の沈線が施文時にズレている。H-715は40%残で器壁が薄い、H-716~719は坏IIの身で復径が不可能な微細片である。

H-720~761はAラインB-4b層出土遺物である。H-720は坏Hの蓋と身とが溶着した資料の完形品で、焼成時に生じたと思われる変形が認められる。II-721~743は坏Hの蓋で、H-723は30%残であるが歪みが著しい、扁化では右半分に現形を、左半分に復元器形を記した。H-724は50%残、歪んでいる。H-725は30%残で若干歪んでいる。H-727は焼成が甘く軟質、H-728は稜の部分が剥離し、擬口縁状の割れが生じている。H-729~738は復径が不可能な微細片である。H-737は内面に変色があり、H-738は外面に被灰、内面に窯壁片が付着している。H-739は天井内面に粘土を貼り付けたような痕跡が見られる。H-740は口縁端部に凹凸が認められるが、これは身との重ね焼き時に生じたものであろう。II-741は坏Hの大井片、二次焼成か痛みが激しい、外面に別の須恵器片が

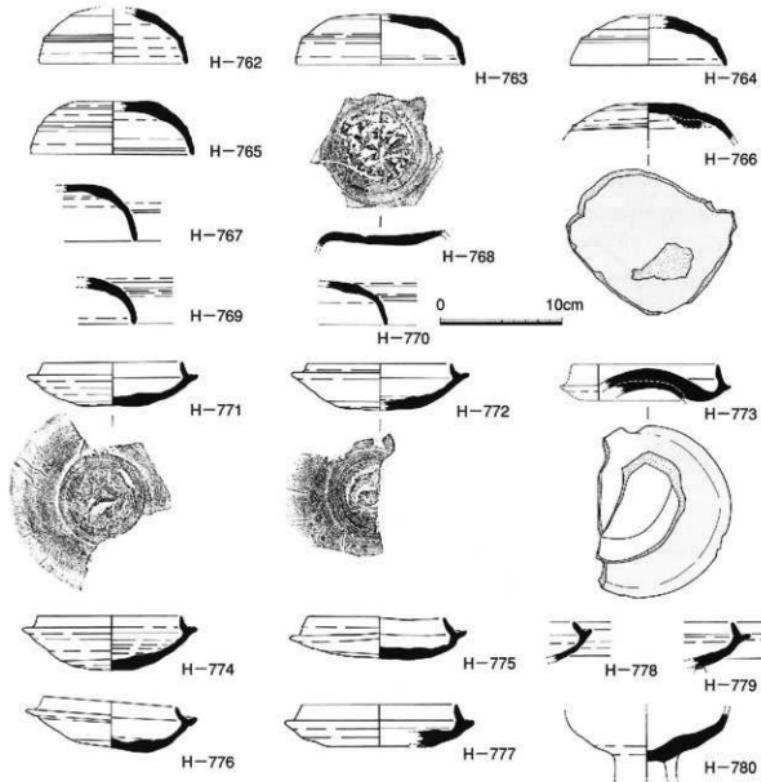


第133図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑦



Aライン B-4b層出土遺物②

第134図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑧



Aライン Y-4層出土遺物

第135図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑨

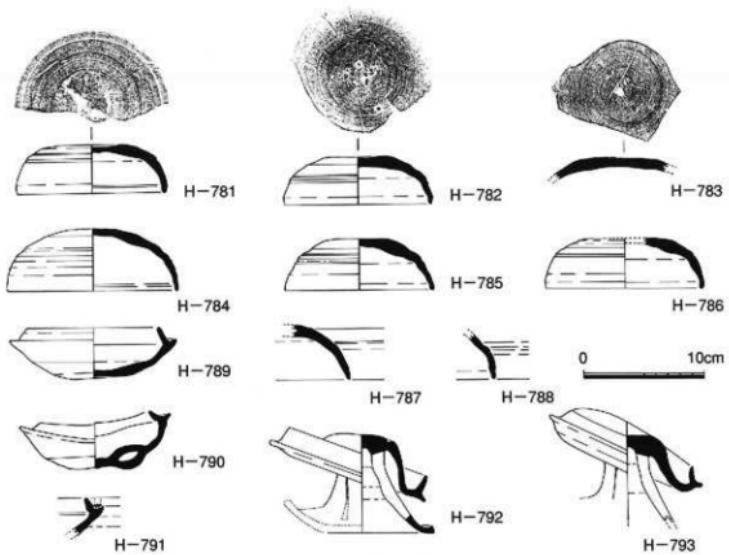
トーン演：植灰

付着しており、格子状の痕跡（タタキ）も見られる。

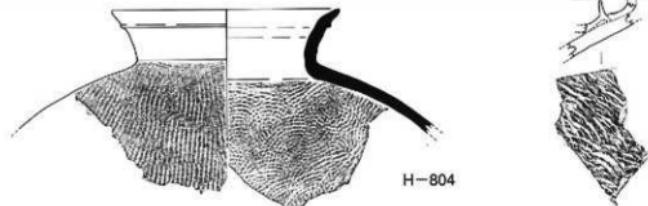
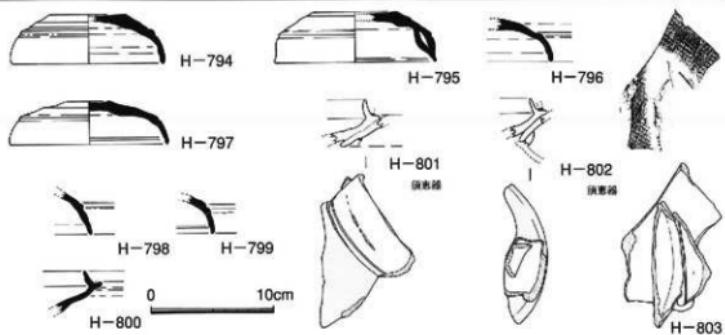
H-744～757は壺Hの身である。H-744は細片であるが、非還元で灰白色を呈して調整は不明瞭となっている。H-745・746・748・753・755は外面に被灰している。H-747は80%残であるが歪みが著しく、H-751は焼成がやや不良、内面に灰を被る。

H-758は壺の口縁片、内面に被灰する。H-759は高环の脚片、やや歪みがある、透かしは二段透かしで四条の沈線を施しているが、沈線がズレて交差している箇所がある。H-760は小壺の体部片である。H-761は壺の切り削転用の窓道具で、長さ10.4cm、幅1.5cmを測る、図の右側はシャープな面で砂粒の移動が見られることから切り落とされた状態であることが判る。

H-762～780はAラインY-4層出土遺物である。H-762～770は壺Hの蓋で、全て破片である。

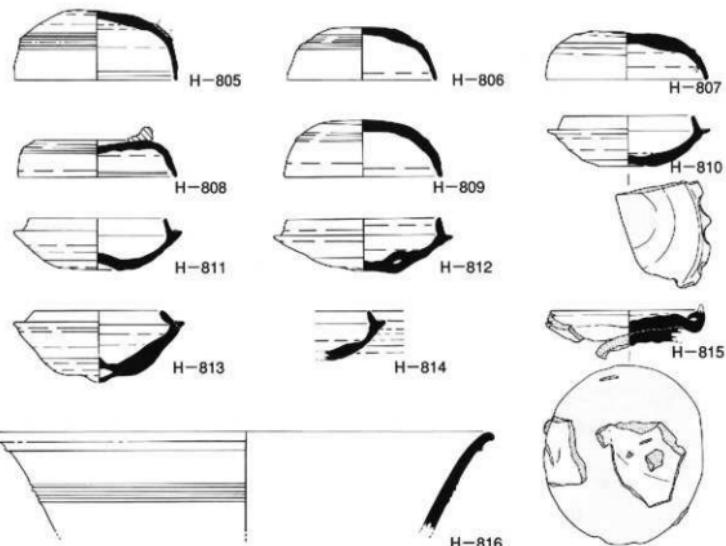


Aライン Y-4 (~B-5最上) 層出土遺物

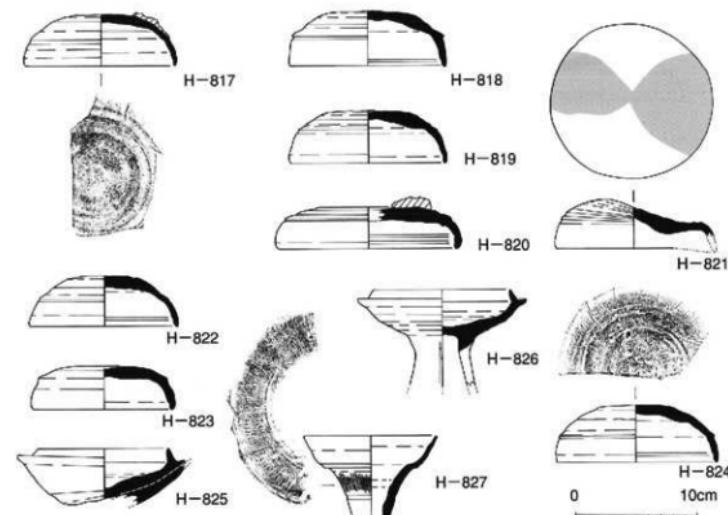


Aライン B-5a層出土遺物

第136図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑩



Aライン Y-5a・b層出土遺物



Aライン B-5c~Y-6(最上)層出土遺物
第137図 H区 Aラインアゼ出土遺物①

トーン淡: 植灰
トーン濃: 变色

H-766は天井部で内面全体に被灰しており、かつ別の須恵器片が付着している、割れ面にも部分的に被灰しているので置台に転用していると思われる。H-768も天井片で天井部がヘラ切り未調整のままで、周辺部分にはケズリ痕がある。

H-771～779は坏Hの身である。H-771・772の底部調整は周辺ヘラケズリを施す。H-773は灰を被り、別の須恵器片と溶着し歪んでいる。H-775は80%残だが重みが大きい。H-776は80%残、口径10.8cm、器高3.9cmを測り、底部に灰を被っている。H-777も外面に灰を被っている。

H-780は高坏の坏部・脚部の破片で軟質なため黄灰色を呈している、残存部では二方向から透かしを施すが詳細は不明。

H-781～793はY-4（～B-5）層出土遺物である。H-781～788は坏Hの蓋である。H-781は天井部をヘラ起こしたと思われ、僅かに凹んでいる、そのため天井部のケズリは周辺部のみに及んでいる。H-782・783は天井にヘラ記号を施す。H-784は非還元炎焼成で、ほぼ土師質と言ってよいほどの軟質須恵器で黄灰色を呈す、そのため調整は不明瞭である。H-785～788は何れも細片である。

H-789～791は坏Hの身である。H-789は80%残、口径11.0cm、器高4.2cmを測り、外面に釉を被る。H-790はほぼ丸形であるが重みが大きく、火彫れがあり、外面に被灰している。

H-792・793は高坏である。いずれも無蓋の高坏（高坏A）の身であるが重みが極めて大きい、二方より透かし（切込み）が入っている。

H-794～804はAラインB-5 a層出土遺物である。H-794～799は坏Hの蓋で、H-800は身である。H-795は重み、火彫れが著しい。その他の坏Hは何れも細片。

H-801～803は坏Hの蓋と身とが溶着した資料で重ね焼きの痕跡を示していると思われる。

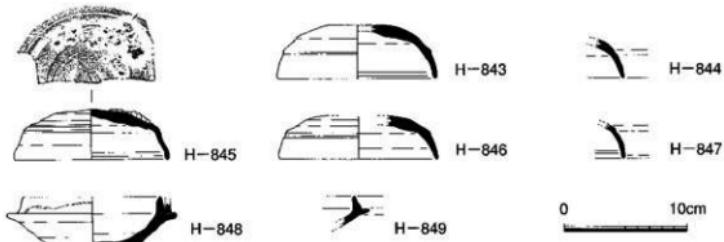
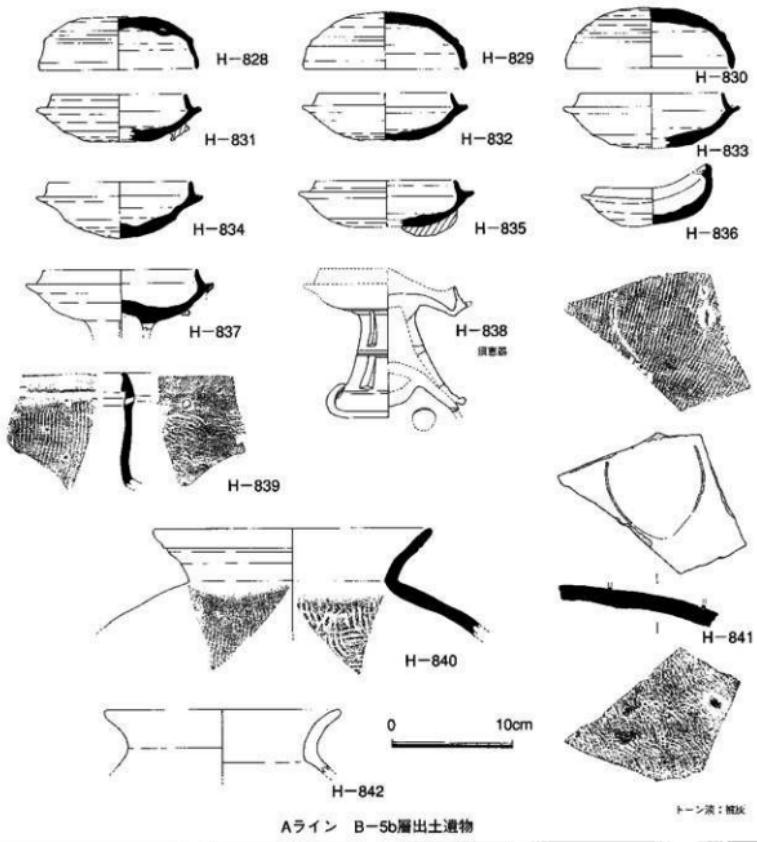
H-804は甕Bでの口縁片で（復）口径が18.8cmを測る。

H-805～816はAラインY-5 a・b層出土遺物である。H-805～809は坏Hの蓋でH-805は40%ほど残、（復）口径13.2cm、器高5.8cmを測る、肩部に別の須恵器片が付着し、外面に被灰している。H-807は80%残、口径13.0cm、器高4.9cmを測る。H-808は80%残、口径13.0cm、器高3.1cmを測る、外面に被灰し、白重の重みのためか扁平な形になっている。H-809は70%残、口径13.0cm、器高4.7cmを測る、軟質な非還元焼成で黄灰色を呈している。

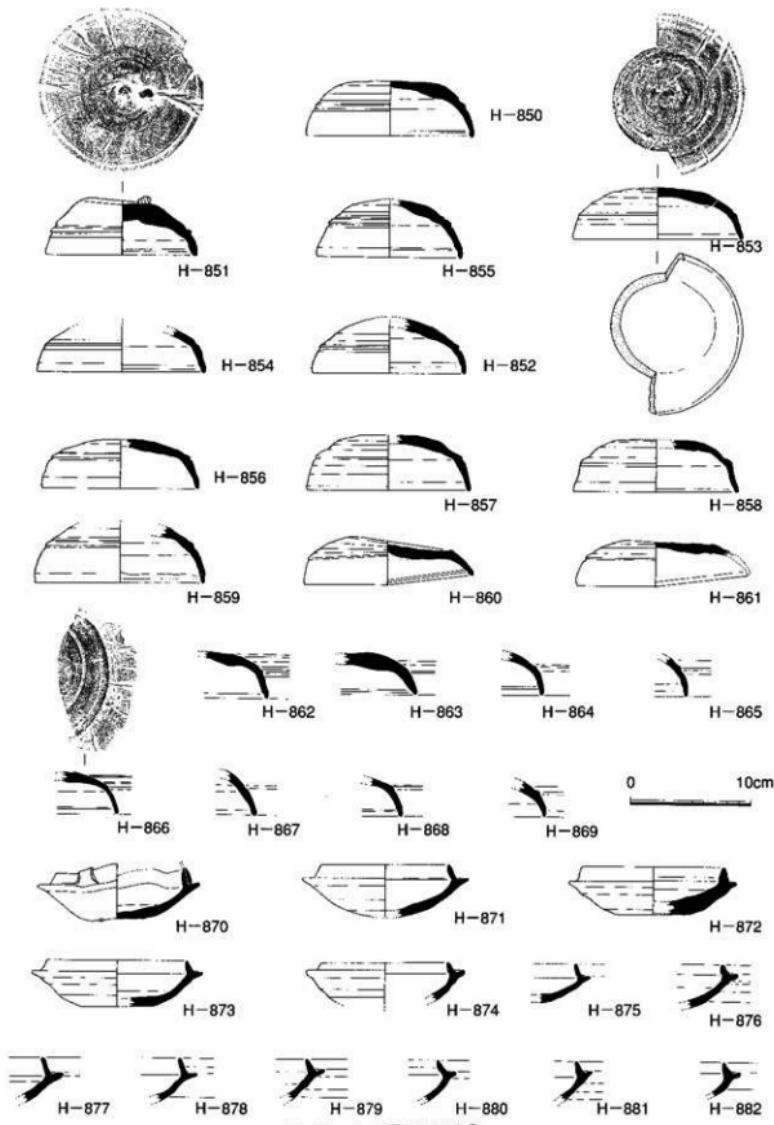
H-810～815は坏Hの身である。H-810は30%ほど残、外面に若干被灰し、周辺を意図的に欠損しているような欠部分が見られる。H-811・814は外面全面に被灰しており、H-813は全体的に火彫れが激しい。H-815は別の須恵器痕が溶着した傷みの激しい二次焼成の資料である、受部を欠損しており、意図的に逆位で平らに設置できるようにしていると思われる。

H-816は甕Aの口縁片で（復）口径は41cmを測る大型品である。

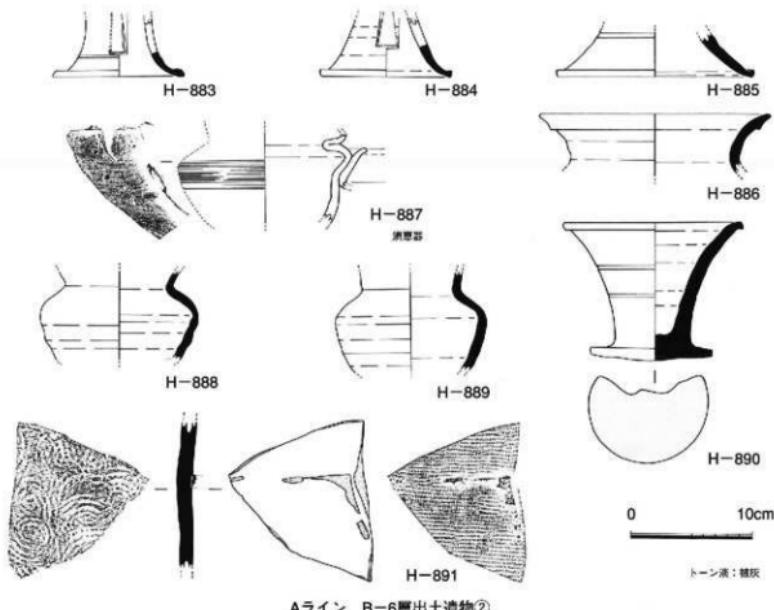
H-817～827はAラインB-5 c～Y-6（最上）層出土遺物である。H-817～824は坏Hの蓋である。H-817は肩部に窓突片が付着し、天井内面に沈線状の凹みが観察できる。H-820は50%残でやや歪むか、内面に白灰を被り二次焼成と思われる、また、口縁内面には二条の沈線を施す。H-821は80%残で天井部に変色部分が見られる、この変色に応じて凹みが生じ変形しているので、重ね焼き



Aライン Y-6層出土遺物
第138図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑫



Aライン B-6層出土遺物①
第139図 H区 Aラインアゼ出土遺物③



Aライン B-6層出土遺物②
第140図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑭

の痕跡と考えられる。H-824の天井はナデ調整を施しており、その周辺に若干の砂粒の移動が認められるため、天井の調整はヘラ切り→ナデか、若しくは周辺ケズリ→ナデかであろう。

H-825は环Hの身で70%残であるが歪みがある、外面に黄灰を被っており、また別の須恵器片が溶着している、歪みはこの重ね焼きの重みで生じたものと考えられる。

H-826は無蓋高環（高環A）である、環部の形態は环Hの身とほとんど同一であるが、受け部の立ち上がり高が0.7cmと环Hと比べてやや低い。H-827は通で頸部が7cmとやや長く、口縁部は大きく拡がる、外面に約十条の櫛描波状文が全周している。

H-828~842はAラインB-5 b層出土遺物である。H-828~830は环Hの蓋である、H-828は60%残、稜部分より下、受け部の外面に被灰している。H-829は60%残で（復）口径13.2cm器高4.7cmを測る、H-830は50%残で軟質なため白褐色を呈している。

H-831~836は环Hの身である。H-831は外面に黄灰を被り、窓壁片と別の須恵器片が溶着しており、H-833も外面に被灰している。H-834は60%残、歪みがあるが、受け部の下部外面を極めて強くナデしている、底部調整は回転ヘラケズリである。H-835は外面に被灰と窓壁片が付着する。H-836はほぼ完形であるが歪みが大きい、外面に灰を被る。

H-837は無蓋高環（高環A）の環部で三方からの透かし痕が残る、外面に被灰している。H-838

は無蓋高坏（高坏A）と龜との溶着資料である。高坏は90%ほど残で歪みが大きい、二段の三方方形透かしで、坏部の底面付近に被灰している、高坏の底部に丸みを帯びた別の須恵器片が溶着しているが、径1.5cm程度の小さな円孔の痕跡が見られるので溶着している須恵器片は龜だと考えられる、この龜は火彫れが激しく、内面に灰が被っている。

H-839は鉢類の口縁部分か、紐孔と見られる小さな孔が穿かれている。H-840は甕C片で内外面に被灰する。H-841は甕片転用と思われる置台で円形の剥離痕が見られる。H-842は土師器の甕片で口縁部分だけの小片である。

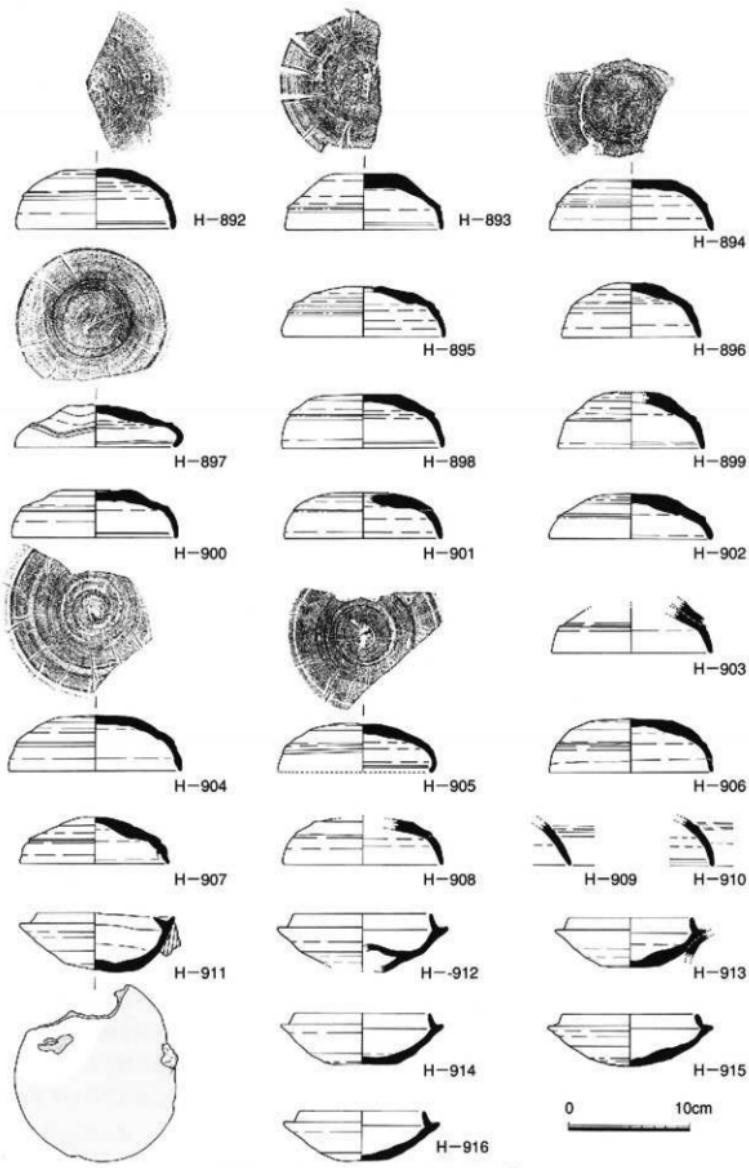
H-843～849はAラインY-6層出土遺物である。全て坏Hで、H-843の蓋は軟質で非還元炎焼成、色調は黄灰色を呈する。H-845の蓋は天井部分に窯壁片が付着している。H-848の身は60%残、蓋とセット関係にあった痕跡があり、外面に緑色の釉を被っている。その他は坏Hの細片である。

H-850～891はAラインB-6層出土遺物である。H-850～869は坏Hの蓋で、H-851はほぼ完形、口径12.4cm、器高4.7cmを測り、歪み、火彫れが生じていると思われる、天井部には回転ヘラケズリを施すが天井頂部にケズリは及んでいない。H-853は50%残、粘土板の痕跡が明瞭で擬口縁状になっている、天井部はケズリ→ナデか、ケズリ痕はほとんど残っていない。H-857はやや軟質で淡灰色を呈する。H-861は60%残であるが歪みが著しい、部分的に稜の部分で擬口縁状の剥離が見られる。H-866は20%残、外面に灰を被る。

H-870～882は坏Hの身である、H-870は70%残、セットとなっていた蓋片が溶着し、歪みが著しく外面に緑色の釉を被る。H-871は30%残、外面に被灰している。H-872は40%残、火彫れが激しい。H-875～882は復縫が不可能な微細片である。

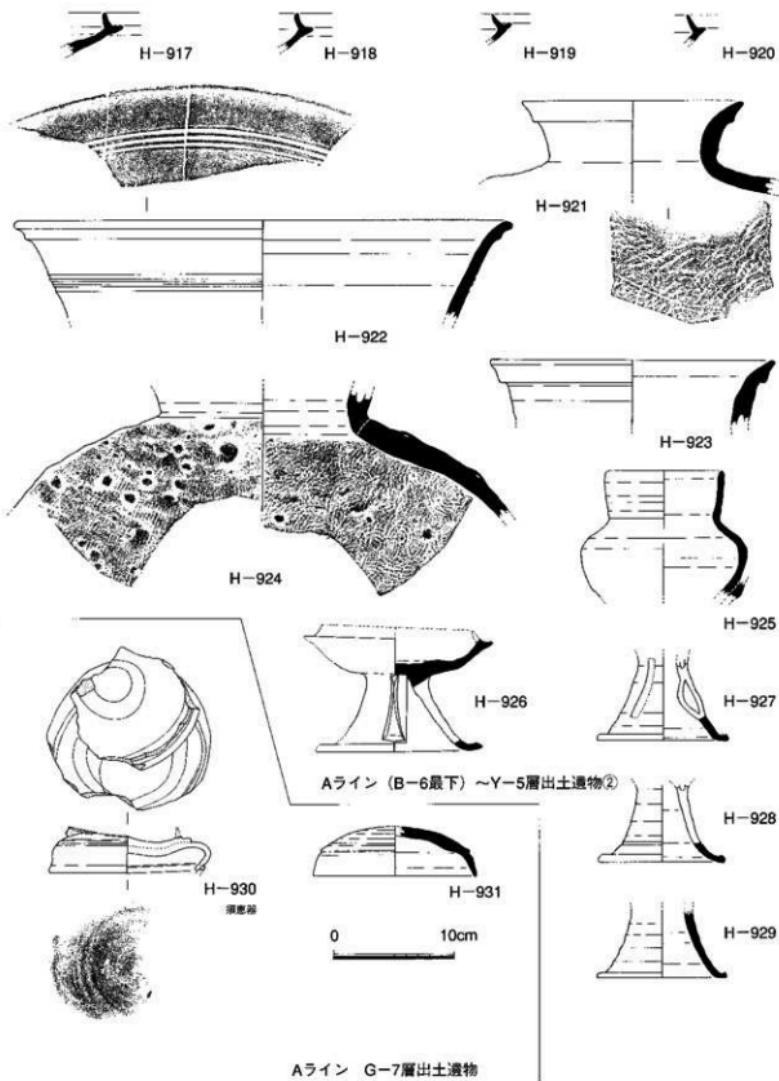
H-883～885は高坏の脚片である。H-886は甕片（甕B）で内外面に若干の灰を被る。H-887は壺の体部に別の須恵器が溶着し歪みの著しいものである。壺は直口壺（壺C）と思われ、肩部にカキ目を施している。H-888は口縁の立ち上がりが傾く壺、H-889は直口壺（壺C）である。H-890は捏鉢（鉢下）で70%残、器高11.3cm、口径14.4cm、底径9.9cmを測る、体部に二条の凹線を施し、底面と脚外側に被灰している。H-891は甕片を転用した置台であろう、ほぼ直角に屈曲する剥離痕が見られる。

H-892～929はAライン（B-6最下～）Y-5層出土遺物である。H-892～910は坏Hの蓋で、H-892は30%残、天井部は回転ヘラケズリを施し、頂部には工具による条痕が残る。H-893は40%残、外面はケズリ痕が僅かに確認できるものの不明瞭、天井部調整はケズリ→ナデか。H-894は40%残、灰黄色を呈する焼成不良品で、天井の調整はケズリ→ナデである。H-895・896はやや軟質、H-897は70%残であるが歪みが大きく（重ね焼きの歪みのためか）、天井にヘラ記号を施している。H-898～902は細片である、H-903も細片であるが、別の須恵器片が溶着しており被灰の範囲は稜より下、口縁外側の位置である。H-904は60%ほど残、天井は渦巻き状の痕跡が残り、ヘラケズリ調整は頂部には及んでいない、また頂部には工具によると思われる条痕が見られる。H-905は歪みあり、天井部にヘラ記号を施している。H-906は粘土紐の接合痕が観察できる。H-907は30%残であるが歪みが著しい。H-908～910は細片である。

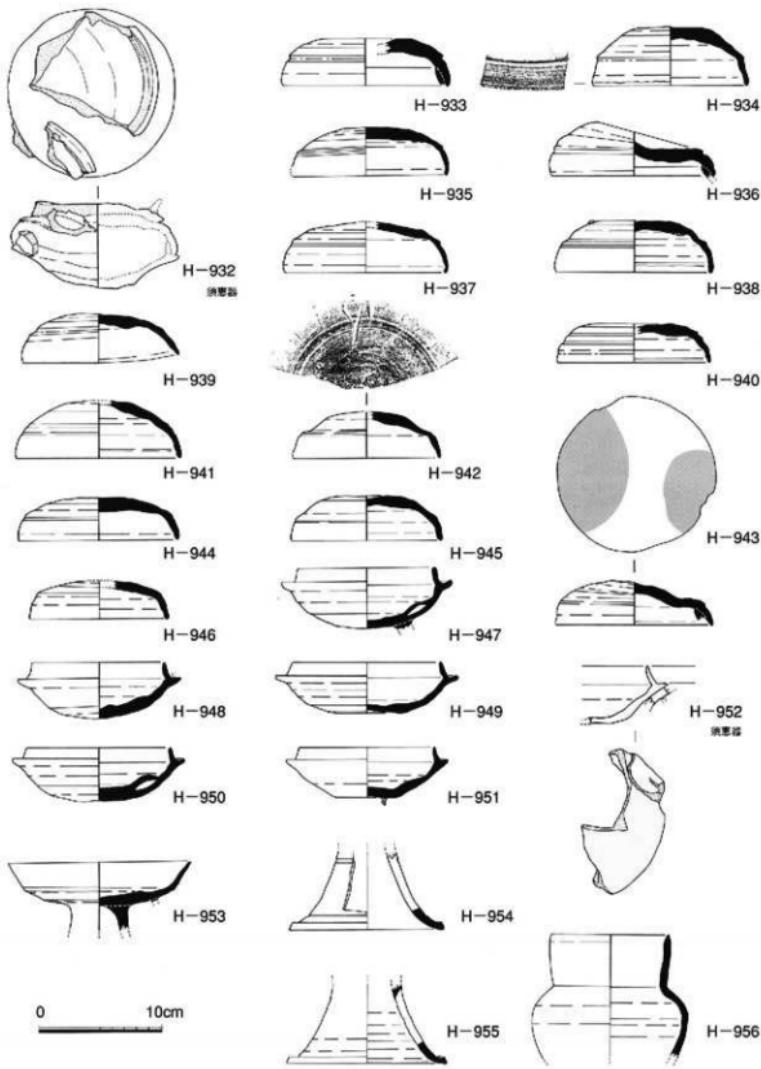


トーン塗：被覆

Aライン (B-6最下) ~Y-5層出土遺物①
第141図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑯



第142図 H区 Aラインアゼ出土遺物⑯



灰原下層 B-2対応層出土遺物①

トーン淡：植灰
トーン濃：変色

第143図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物①

H-911～916は壺IIの身である。H-911は85%残、現口径9.5cm、(復)器高4.4cmを測る、歪みがあり、外面に被灰している。H-912は40%残、火膨れが激しく、外面に灰を被る。H-913も外面に被灰し、別の須恵器片が溶着している。H-917～920は復作が不可能な微細片である。

H-921～924は甕の口縁片である、発掘調査時の所見では、これらの甕片はY-5層の黄色シルト層に水平に張り付いて、意図的に敷き並べていたような状態で検出された、遺物も傷みが多く、黄色に変色したりしている。

H-925は直口甕(蓋C)で口縁～腰部までの破片である、内外面に部分的に被灰があり、頸部部分はナデの痕跡が非常に明瞭に残っている。H-926は有蓋高壺(高壺A)で一段三方三角透かし、また内外面に緑色の釉を被っている。H-927は高壺の脚片で三方よりの透かし痕(方形か)が見られる、火膨れがあり、灰を被っている。H-928・929も高壺の脚で、何れも25～30%ほどの細片である、図上では透かしがないが、実際の遺物には透かしと思われる箇所が認められる。

H-930・931はAラインG-7層出土遺物である。H-930は壺IIの蓋と身とが溶着した資料であり、H-931は壺II蓋の破片(30%残)で(復)口径13.4cm、器高4.1cmを測る。

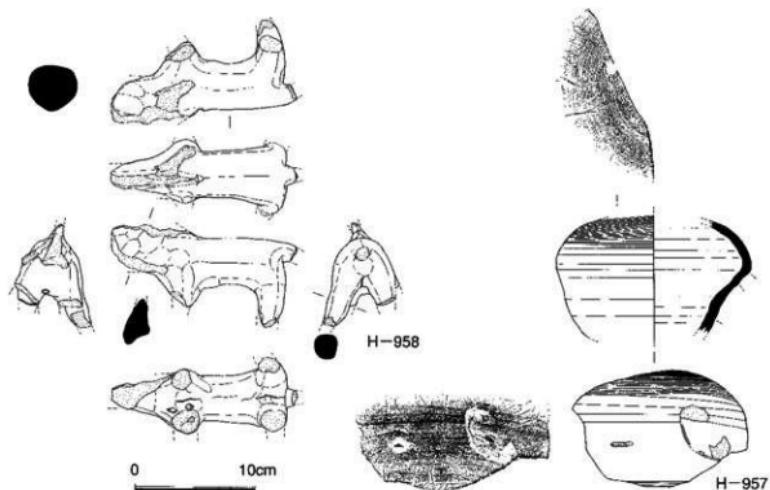
H-932～1189は山津1号窯の灰原(H区灰原下層)から出土した遺物である。H-613～931は先に見たように畦の掘削時に検出したもので、灰原の各層から出た確実な出土遺物である。上でみた詳細な断面での各層は、それぞれ平面的に検出することが不可能であった。そのため1号窯の灰原を全面的に掘り下げる時は、セクションでの観察結果を基礎として、概ね各層に対応する深度毎に大量の遺物を取り上げた。H-932～1189はこの結果検出された1号窯灰原の出土遺物であり、明確な分層資料としては畦内資料(H-613～931)よりは確実性が劣る。

H-932～957は1号窯灰原(H区灰原下層)のB-2対応層出土遺物である。H-932は壺IIの蓋と身とが溶着した資料ほぼ完形、身の外面に黄灰を被っている。また、身の天井に別の壺IIの身が溶着し、歪みが生じている。

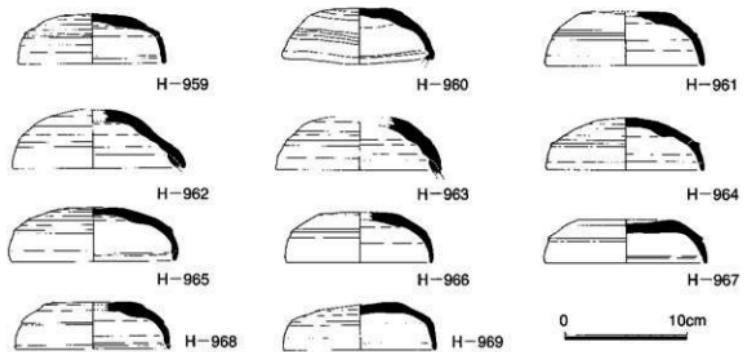
H-933～946は壺IIの蓋である。H-934は30%ほど残、口縁端部外面には回転ナデが施されていない凹凸部分がある。H-935は70%残であるが歪みが見られる、稜より下、口縁外面を中心として白灰を被っている。H-936は80%残、(復)口径13.4cm、器高4.7cmを測り、重ね焼き時に生じたと思われる歪みがある。H-939も80%残であるが歪みあり、内外面に薄く被灰している。H-941は細片、外面に厚く灰を被っており二次焼成と思われる。H-942の天井部はナデされている、周辺ヘラケズリか。H-943は90%残、口径12.7cm、器高3.5cmを測る、天井部に半円形の変色があり、重ね焼きの歪みのために生じたと思われる凹みが見られる。

H-947～952は壺IIの身である。H-947は15%残、火膨れが著しく、外面に灰を被り、別の須恵器片が付着している。H-948・950・951も外面に被灰している。H-949はやや軟質で色調が灰白を呈している。H-952も外面に被灰するが、別の須恵器片も付着している。

H-953は無蓋高壺(高壺B)で壺底面に別の須恵器片が付着している、板付したか。H-954・955は高壺の脚部で、H-954は外面に灰を被る。H-955は剖面から透かしが確認できるが、位置は不明である。

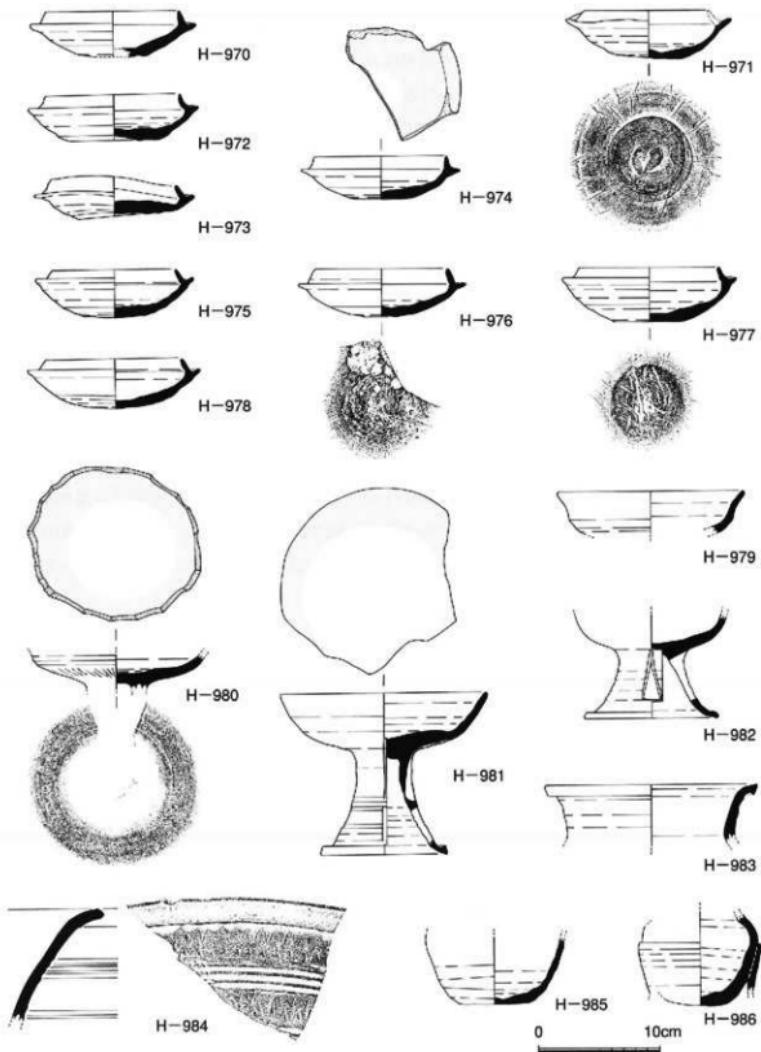


灰原下層 B-2対応層出土遺物②



灰原下層 B-2～Y-4対応層（前後）出土遺物①

第144図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物②



灰原下層 B-2~Y-4対応層（前後）出土遺物②

トーン淡：被灰

第145図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物③

H-956・957は直口壺（壺C）で、H-957は肩部にカキ目を施す、また、H-957の腰部分は凹み、別の須恵器片が剥離した痕跡が認められる。

H-958は須恵質の上馬で残存長は15.2cm、高さ8.4cmを測る、脚の大部分と頭部、尻尾を欠損している、形態的にはやや大型の裸馬で、頸を前方真っ直ぐ伸ばしているのが特徴的である。軸が背中にかかり、腹部には及んでいない、たてがみ付近には別の須恵器片が溶着している。

H-959～968は1号窯灰原（H区灰原下層）のB-2～Y-4（前後）対応層の出土遺物である。H-959～969は坏Hの蓋である。H-959は70%残、口径12.2cm、器高4.1cmを測り、稜の部分が剥離しており、擬口縁状になっている。H-960はほぼ完形、現状では口径12.5cm、器高4.6cmを測るが歪み・火膨れが著しい。H-961は40%残、やや軟質で、天井部分をナデによって平坦にしている。H-963は身の受け部片と溶着しており、外面に灰を被っている。H-966は30%残、稜から上、天井部にかけては非還元で明褐色土を呈しており、稜より下、口縁外面は良く焼成され還元の灰色を呈している。H-968は30%残の小片、口縁端部で粘土紐を貼り付けたような痕跡がある。H-969はほぼ完形、口径12.6cm、器高3.9cmを測る。

H-970～978は坏Hの身である。H-970は内外面に被灰し傷みが著しい、二次焼成であろう。H-971は70%残、歪みが大きい、受部は擬口縁状に剥離しており、底部には回転ヘラケズリの痕跡が非常に明瞭に残る。H-972は50%残、外面に薄く被灰する。H-973はほぼ完形品、現状の口径は10.2cm、器高3.5cmを測り外面に灰を被る、歪みが著しい。H-974は30%ほど残、内面と受部外面に灰を被っている。H-976は外面に灰を被っており調整は不明瞭であるが工具によると思われる条痕が観察できる。H-977は焼成が甘く暗茶色を呈する、底部には工具によって生じたと思われるキズが多く見られる。

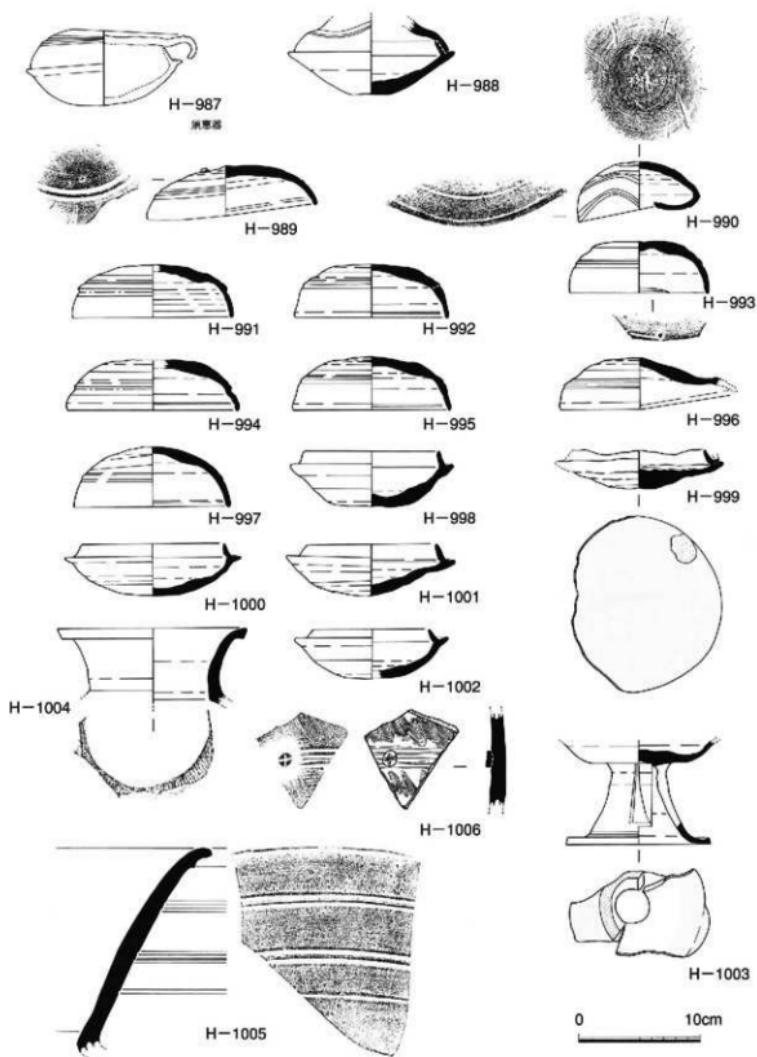
H-979～982は高坏である。H-979は坏部の細片である。H-980は頸部付近の破片であり、列点文を施している、坏の内面（見込）部分に灰が被っているが、この部分には径7.5cmほど灰を被っていない円形の痕跡がみられる、坏部の周縁を意図的に円形に欠損したような状況にあり、この割れ面にも被灰がみられるので、置台として転用しているものであろう。H-981は無蓋高坏（高坏B）で70%ほど残、（復）口径17.1cm、器高10.4cm、底径10.4cmを測る、坏内面（見込）部分に灰を被っており、径12cm程の円形の重ね焼きと思われる変色部分がある、透かしは二段二方向透かしで、上段は切込み、下段は方形か。H-982は焼成が甘く土師質に類似した明褐色を呈する軟質な須恵器である、透かしは一段二方向の三角透かしである。

H-983・984は甕片で、H-983は甕B、H-984は甕Aである。

H-985・986は壺で、H-985は底部片である。H-986は口縁と底部とが溶着した資料で、直口壺（壺C）同士か、又は直口壺と甕との重ね焼き痕であろう。

H-987～H-1010は1号窯灰原（H区灰原下層）のB-4対応層出土遺物である。H-987・988は坏Hの蓋と身との溶着資料で、H-987はほぼ完形、身の外面に灰を被っている。H-988は身が60%、蓋が10%ほど残存する資料で、同じく身外面に灰を被っている、蓋は自重のためか凹んでいる。

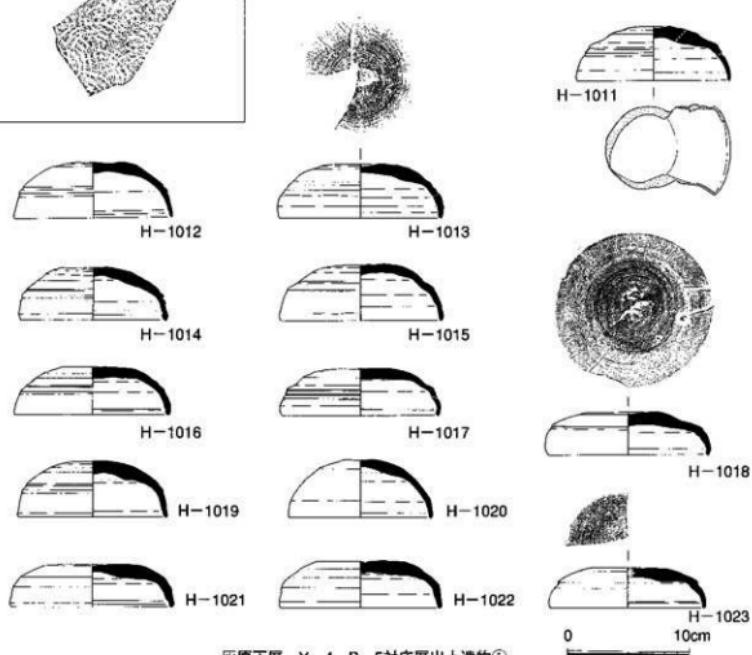
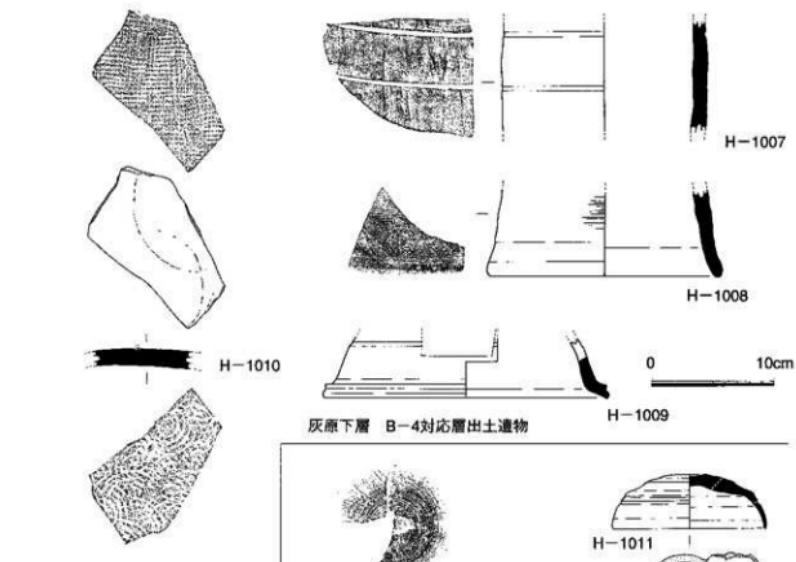
H-989～997は坏Hの蓋である。H-990は90%残、歪みが大きいが、口縁端部外面に凹線を施し



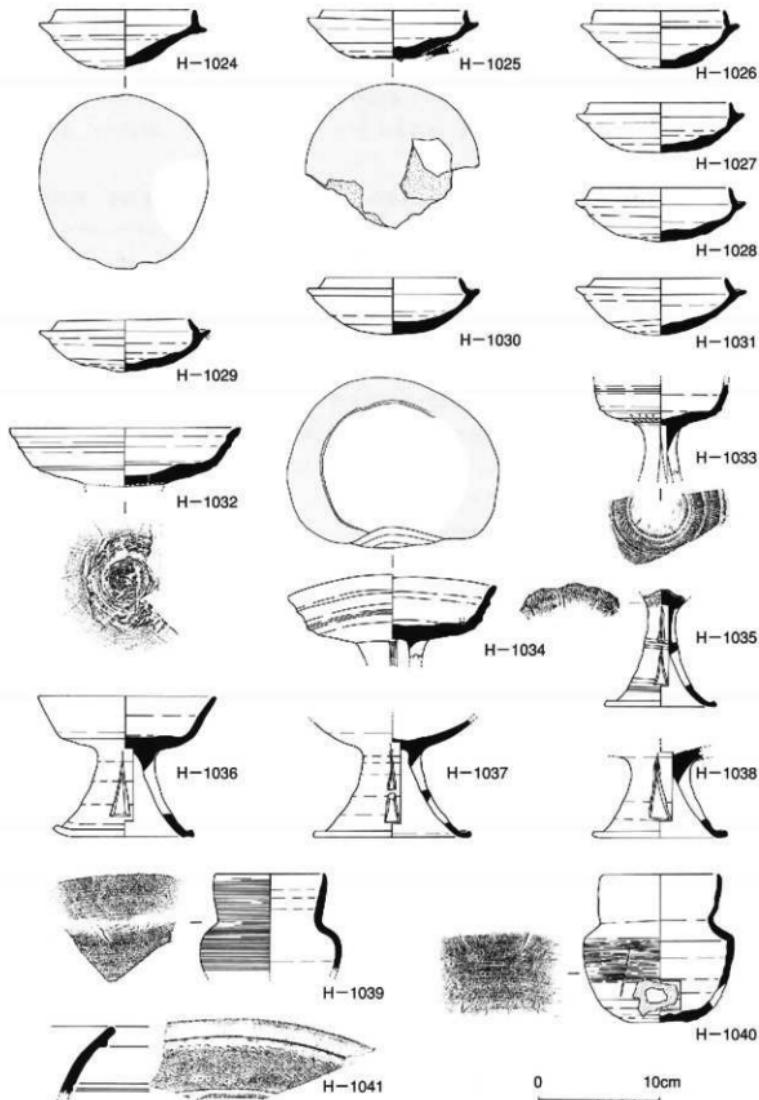
灰原下層 B-4対応層出土遺物①

トーン添：塗装

第146図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物④



第147図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物⑤



第148図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物⑥

トーン法：被底

ており、天井部にヘラ記号を記している。H-992は焼成不良、色調はやや白っぽい淡灰色を呈している、天井部はケズるがケズリは斜め方向に施されており、その後、水平方向に強い回転ナデを施す、この時、ナデがケズリを切っている箇所があるのでケズリ→ナデの順が理解できる。H-993は網片、口縁内面の沈線？（断面は丸みを帯びたV字）が途中で途切れている。H-994は焼成が悪くチョコレート色を呈している。H-996は80%残、歪みが大きい。H-997は70%残、口径12.7cm、器高5.0cmを測る。

H-998～1002は壺Hの身である。H-998は80%残、口径11.0cm、器高4.5cmを測る、底部付近のみに釉を被っている、釉のため底部調整は不明瞭であるが、工具による条痕が施されていたか。H-999は二次焼成が苦しい身で、外面に被灰し、かつ内外面共に傷みが激しい。H-1000は破片であるが外面全面に灰を被る。H-1001は完形、口径10.6cm、器高4.2cmを測る、重ね焼き時に生じたのか、体部が歪み凹んでいる。H-1002も外面に被灰している。

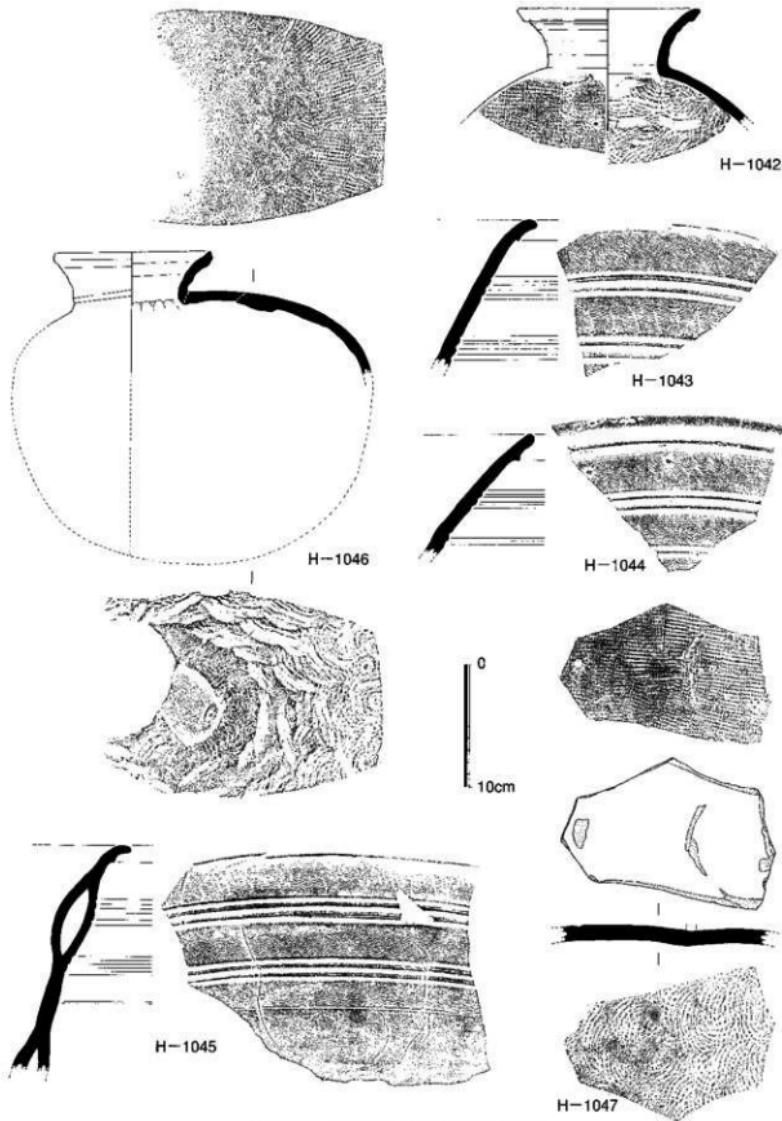
H-1003は高壺で脚内面と壺部の底に被灰する。H-1004は壺Bで（復）口径は15.5cmを測る。H-1005は大型の壺A片である。H-1006も壺の小片であろうが、やや厚い円形浮文に十字の印刻を施している。H-1007は焼成が甘く黄褐色を呈している、縱方向にケズリを施し、二～三條の沈線が確認できる、子持壺の脚部分と思われる。H-1008・1009は子持壺（もしくは器台）の脚片で、H-1008は外面にカキ日を施す、H-1009は大型の透かし痕が残り、外面に被灰している。H-1010は壺片転用の置台で複数回使用されたような剥離痕が微かに残る。

H-1011～1047は1号窯灰原（II区灰原下層）のY-4～B-5対応層出土遺物である。H-1011～1023は壺Hの蓋で、H-1011は30%残、天井部が擬口縁状に丸く割れており、断面の接合痕が明瞭に観察できる。

H-1012は70%残、（復）口径13.0cm、器高4.5cmを測る、天井部はケズっているが幅が狭く、特に頂部はケズりが及んでいない。H-1013は70%残だがやや歪む、天井部のケズリはヘラケズリが極めて密である。H-1014は80%残で口径12.0cm、器高4.3cmを測る。H-1015は軟質で白灰色を呈しており、H-1016は90%残、口径12.6cm、器高3.9cmを測る。H-1017は稜に二条の沈線に入る。H-1018が天井部調整はケズリであるが、天井頂部はケズリが及ばずナデ。H-1019は稜の下、口縁外側のみに白灰を被灰している。H-1020は15%残、（復）口径11.8cmのやや小型で稜が無い、壺・壺類の蓋であろうか。H-1021は70%残であるが歪み有り。H-1023は小片であるが天井にヘラ記号を記す。

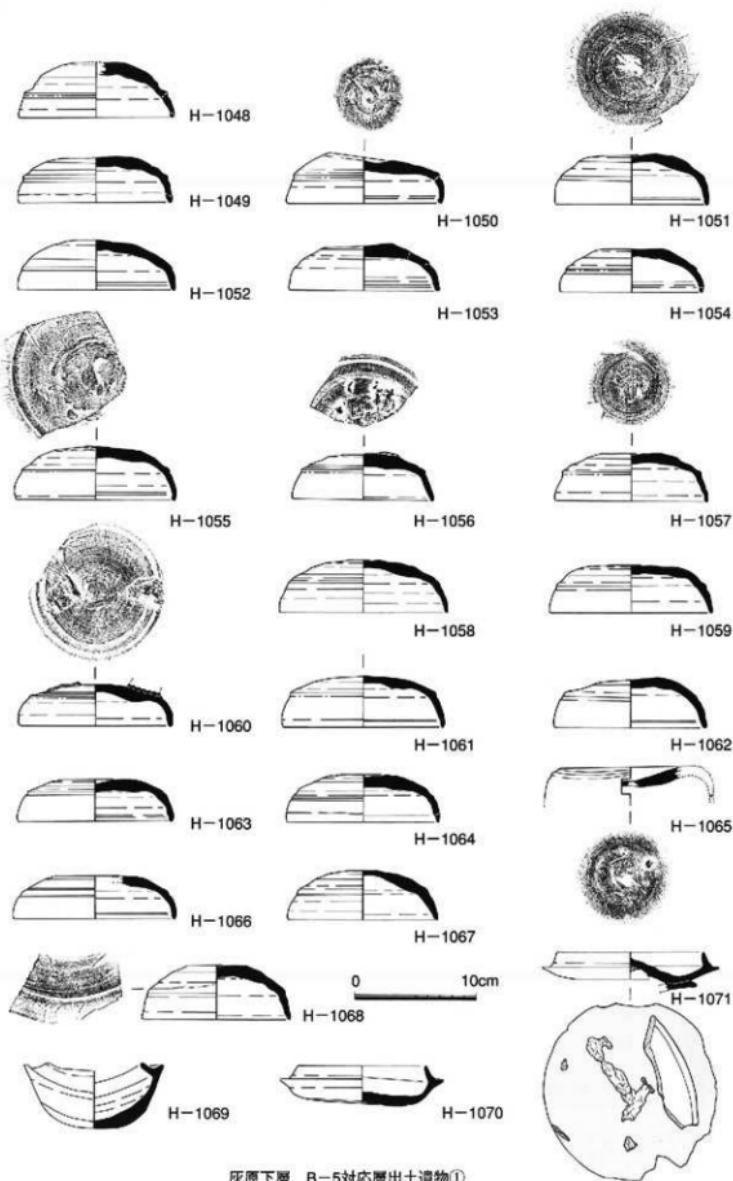
H-1024～1031は壺Hの身である。H-1024はほぼ完形の身で外面全面に被灰しているが、歪み回んだ部分のみ半円形の被灰を受けていない部分が見られる。H-1025は60%残、外面に被灰し、別の須恵器が溶着し重む。H-1026も外面に被灰しているが受部外面にも灰を被っている。その他、II-1027・1029・1030も外面に被灰する。H-1028は90%残、口径11.4cm、器高4.35cmを測る。

H-1032～1038は高壺である。H-1032は無蓋高壺（高壺B）の壺部で内面に若干の灰を被る、また接合部分で剥離している。H-1033は高壺Cの壺～脚部片、列点文を施し、一方よりの切り込みが確認できる。H-1034は壺部のみ完形であるが、歪みが認められる、内面（見込み）に円形を呈した剥離痕と変色（被灰）が認められる。H-1035は高壺Cの脚片、長脚二段で三方向に三角透かしを施



灰原下層 Y-4~B-5対応層出土遺物③

第149図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物⑦



灰原下層 B-5対応層出土遺物①
第150図 H区 灰原下層（山津1号窯灰原）出土遺物②

トーン淡：柱灰

す、上部に何らかの工具痕？のような痕跡が認められる。H-1036は無蓋高坏（高坏B）、70%残で焼成がやや甘く白っぽい、（復）口径14.5cm、器高11.5cmを測り、二方向一段三角透かしを施す。H-1037は二段三方透かしで上段は三角、下段は方形である、坏部外面と脚内面に被灰・被釉する。H-1038は脚部のみの破片でやや軟質である、透かしは一段二方三角透かし。

H-1039・1040は直口壺（壺C）である。H-1039は25%残、口縁～体部全体にカキ目を施す、焼き上がりはやや軟質で白灰色を呈している。H-1040は60%ほど残、（復）口径10.0cm、器高12.0cmを測る、外部にカキ目とヘラ記号があり、外面に被灰している、また、底部付近に欠損部分があるが、意図的に欠損したというよりは、焼成時に他の須恵器片と接していたので溶着し剥離したものと思われる。

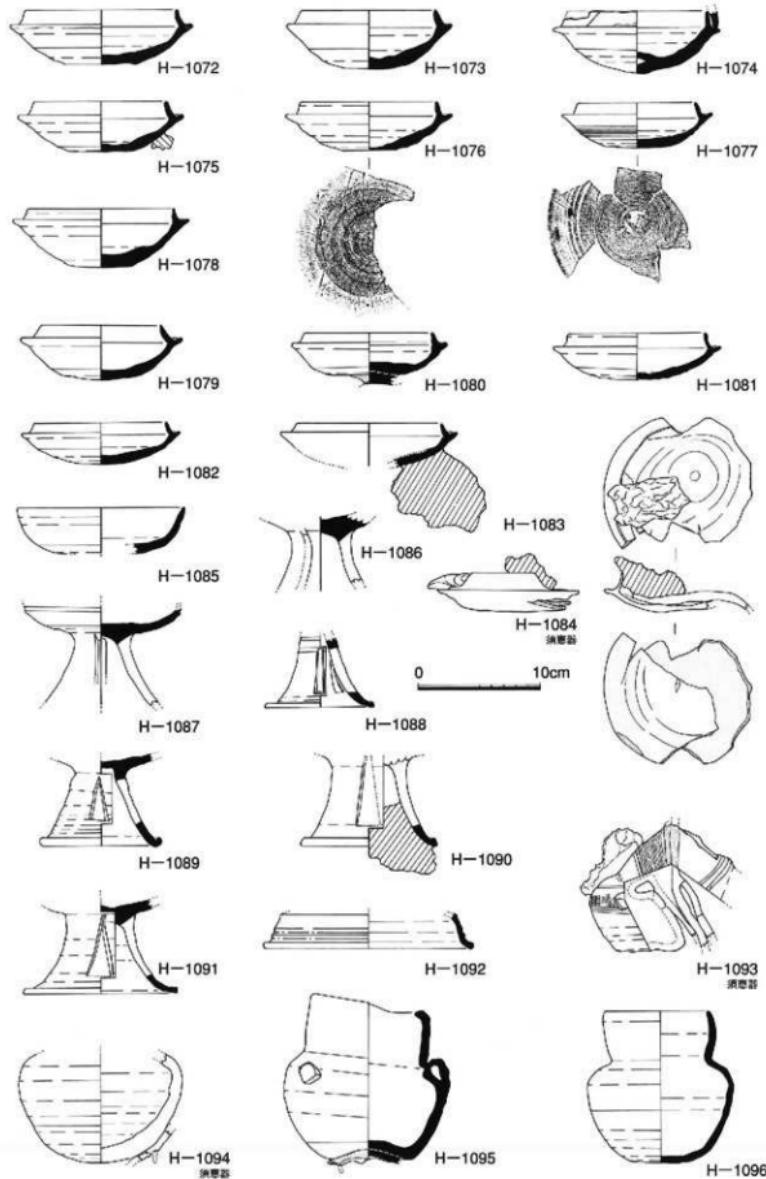
H-1041～1045は壺片でいずれも破片である。H-1041・1043～1045は壺Aで、H-1042は壺Bである。H-1046は大型の平瓶で閉塞痕が確認できる。H-1047は壺片を転用した調台で別の須恵器片の剥離痕が残る。

H-1048～1103は1号窯灰原（H区灰原下層）のB-5対応層出土遺物である。H-1048～1068は坏Hである。H-1049は80%残、口径12.4cm、器高3.7cmを測る、口縁部分に粘土紐の痕跡が認められる。H-1050は80%残、やや歪み天井にヘラ記号を記す。H-1051は天井部に工具痕と思われる条痕が僅かに見られる。H-1052は焼成が甘く白灰色を呈する。H-1055は天井部の調整がヘラ起こし？→ナデである。H-1056は天井部に窯壁片が付着しており、H-1057は大井部に工具による条痕が残る。H-1060は80%残、口径12.4cm、器高3.4cmを測る、肩～天井にかけて別の須恵器片が付着しているが、重ね焼きの痕跡であろう。H-1061は焼成が甘く白茶色を呈している。H-1065は天井部分のみの破片である。天井内面に穿孔とキズが見られる、焼台に転用したものであろうか。H-1066は残存部分の外側全面に被灰している。H-1068は稜の部分に先尖の工具で沈線を施したと思われる痕跡が見られるが、一周していない。

H-1069～1084は坏Hの身である。H-1069はほぼ完形であるが歪みが著しい、外面に灰を被る。H-1070・1071は歪みが大きく扁平になっている、特にH-1071には外面に被灰し、別の須恵器片や窯壁片が溶着している、焼成時における重ね焼き等の歪みのためであろう。H-1072・1079は非還元炎焼成で白灰色を呈している。H-1073～1075・1078・1080・1082は外面に灰を被る。H-1077は腰部外面に凹線のような条痕が四条ほどこされており、底部のケズリも極めて密で、一見カキ日のごとく回転ヘラケズリを施している。H-1083は細片であるが、外面に被灰し、かつ大きな窯壁片を付着させている。H-1084は須恵器片が溶着（蓋と身か）しており、底面に被灰する。

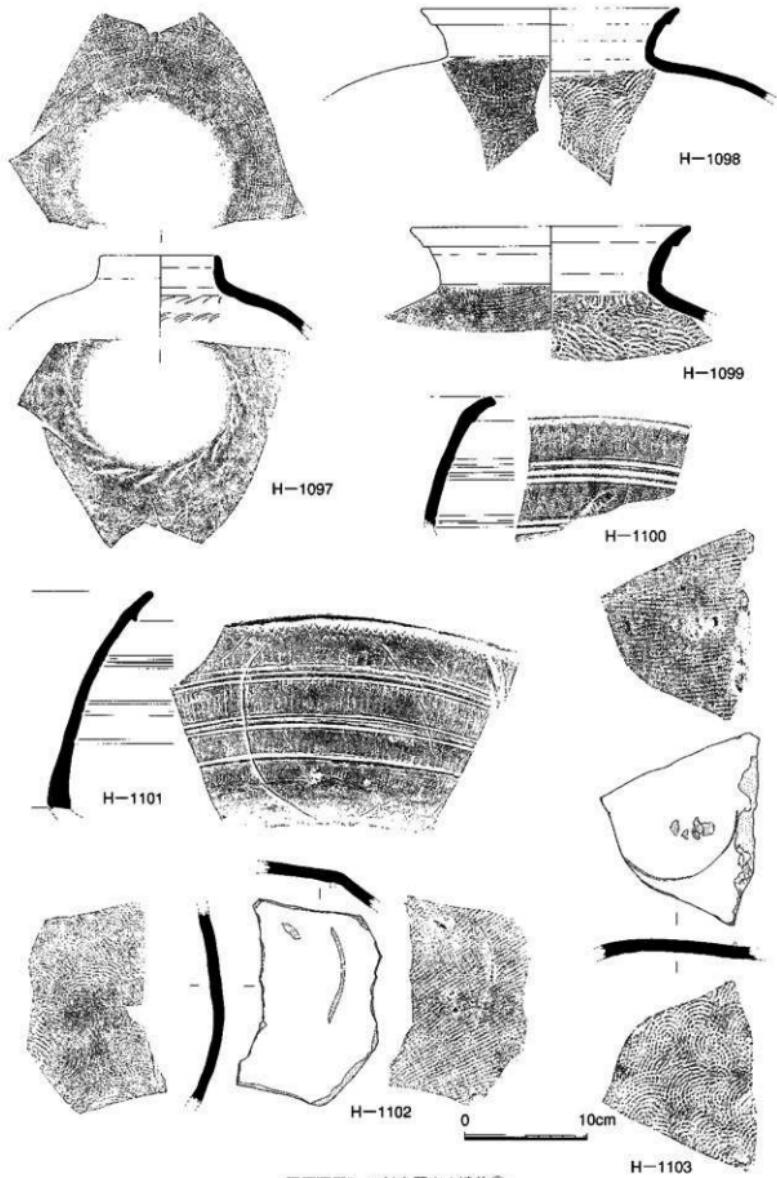
H-1085は坏、又は高坏の坏部で底部調整はケズリである。H-1086～1091は高坏でいずれも、脚部を中心とした破片である。H-1086は一方に透かし痕があり外面に被灰する。H-1087は焼成が甘くやや軟質である。H-1089は一段二方向三角透かし、焼成が良好でナデ幅が良く観察できる。H-1090は脚内面に被釉し、窯壁片が付着している。H-1091は一段二方向一角透かしで焼成はやや軟質である。

H-1092は小片、脚であろうか、（復）底径は16.8cmを測る。H-1093は壺と高坏との溶着資料



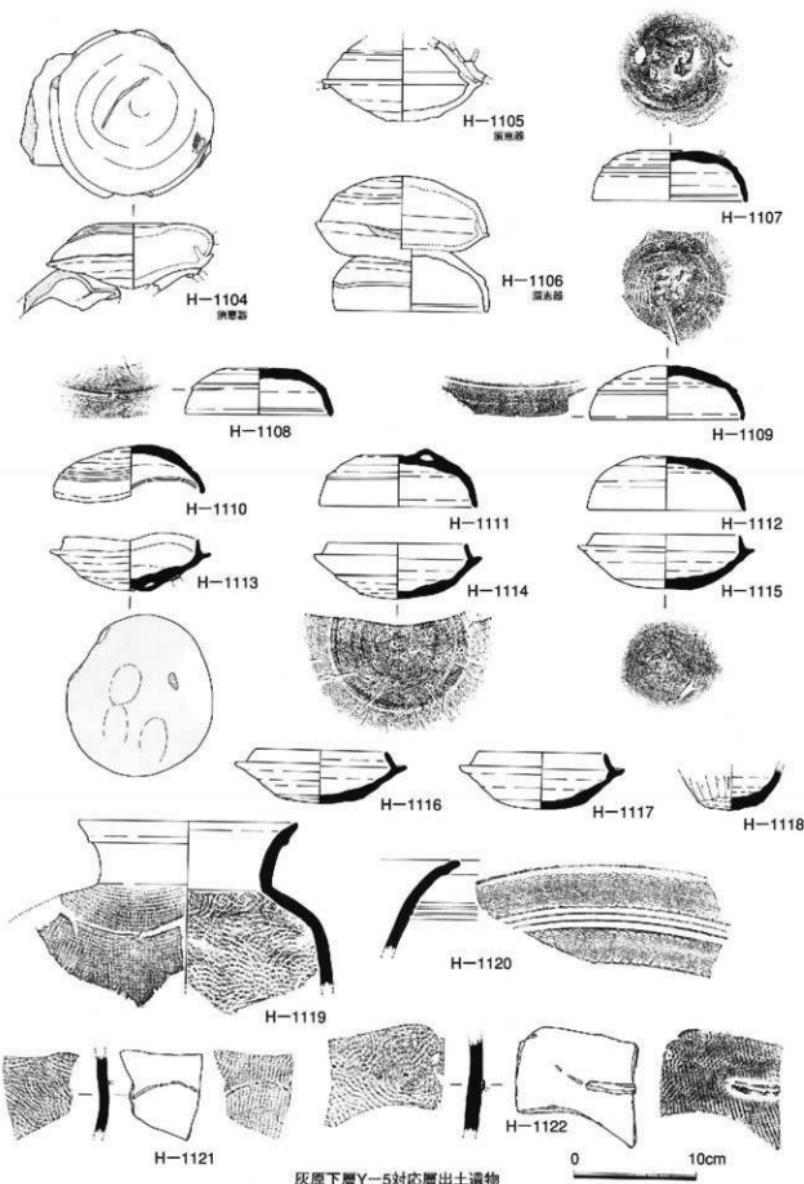
第151図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑨

トーン波：被灰



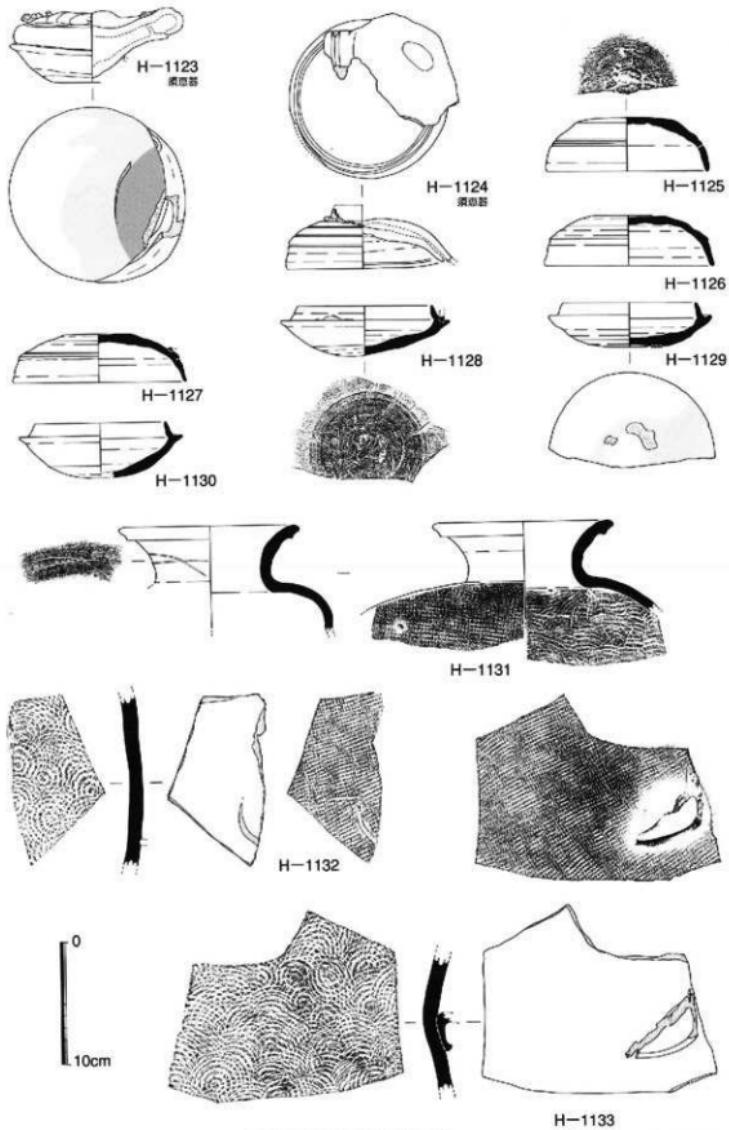
灰原下層B-5対応層出土遺物③

第152図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑩



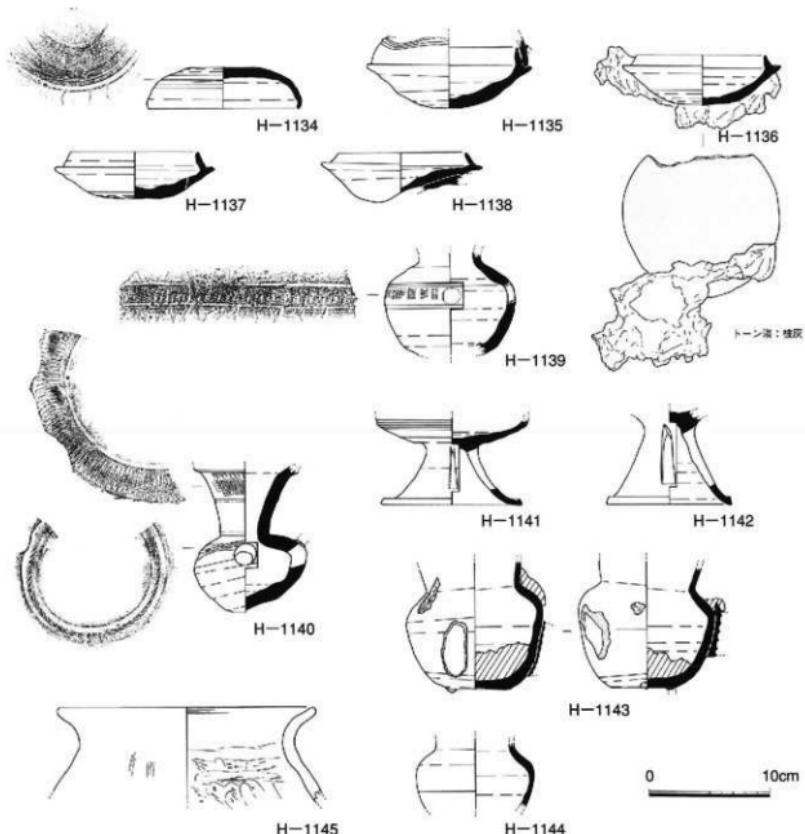
灰原下層Y-5対応層出土遺物

第153図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物①



第154図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑫

トーン淡：灰色
トーン濃：黑色



灰原下層B-6対応層出土遺物
第155図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑬

で、埴の上に高坏を重ね焼きしたが、焼成時に重みで形が崩れたものと思われる、重ねている須恵器は脚の透かしの痕跡から高坏と判断したものである。

H-1094～1096は壺で、H-1094は腰～底部にかけて坏Hの細片が溶着している。H-1095は直口壺（壺C）で、H-1094と同じく坏Hの身が底部に溶着している、また肩部の一部に被灰しており、歪み・火彫れが激しい。H-1096は90%残の直口壺（壺C）で口径9.6cm、器高12.4cmを測る、やや歪みと凹みが見られる、外外面に部分的な被灰がある。

H-1097は短頸壺（壺A）の破片で外表面の肩部に被灰する。また頸部外表面には灰が被っておらず変

色しているので、焼成時には蓋を被せていたものと考えられる、体部内外面の調整はタタキで、頭部の下に列点文のような痕跡が見られる。

H-1098・1099は甕B、II-1100・1101は甕Aの口縁を中心とした破片、H-1102・1103は甕片を転用したと思われる置台である。

H-1104～1122は1号窯灰原（H区灰原下層）のY-5対応層出土遺物である。H-1104～1106は坏Hのセット関係を示す資料である。H-1104は完形、蓋と身とが溶着しており、身の外側に被灰し、かつ坏Hの破片が溶着している、蓋部分の外面にも何らかの別の須恵器片が接していたと思われる痕跡がある。H-1105は身と蓋片とが溶着しており、同じく身の外面に被灰する、蓋の外面にも別の坏Hの蓋・身が溶着している。H-1106はほぼ完形である、蓋と身とが溶着しており、身側に坏Hの蓋が溶着している、被灰部分は身の外面と、身の外面に接した（図では下の）蓋の内面と外面の一部である。

H-1107～1112は坏Hの蓋で、H-1107の天井調整はナデ（僅かにケズりあり）、H-1108は稜部分の沈線が一周せずに途中で止まっている。H-1109は天井部をナデしており、口縁端部外面には微かな段を作りだしている。H-1110は90%残だが歪みが大きい。H-1111は80%残、天井部～稜部分にかけて釉を被る。H-1112は軟質で赤褐色を呈し、調整は不明瞭である。

II-1113は坏Hの身で90%残、口径11.0cm、器高4.2cmを測るがやや歪む、外面全面に被灰するが（重ね焼き痕と思われる）灰を被っていない箇所がある。H-1114は外面に被釉、また腰部分で小さな段（の区切り）がある。H-1115は底部にヘラ記号がある。H-1116は軟質で焼成が悪く調整が不明瞭である。

H-1118は蓋の底部片である、焼成はやや甘く色調が赤褐色を呈している、底部外面がケズり、内面が回転ナデである。

H-1119は横瓶、又は甕である、網片で歪みが著しいため詳細は不明。H-1120は甕Aの口縁片である。H-1121・1122は甕片を転用したと思われる置台で、須恵器片の剥離痕が残る。

H-1123～1133は1号窯灰原（H区灰原下層）のY-6対応層出土遺物である。H-1123は坏Hの蓋と身とのセット関係を示す資料でほぼ完形であるが歪みが大きい、身の外面に被灰している。H-1124も溶着資料であるが、坏H蓋の天井部分に身が溶着している。その他、H-1125～1127は坏Hの身である。

H-1128～1130は坏Hの身である。H-1128の底部には工具によると思われる条痕が残り、H-1129は外面に灰を被る、H-1130は30%ほどの残である。

H-1131は横瓶で頭部にヘラ記号を施す。H-1132・1133は甕片を転用したと思われる置台で、H-1132には脚部のような破片が溶着したままになっている。

H-1134～1144は1号窯灰原（H区灰原下層）のB-6対応層出土遺物である。H-1134は坏Hの蓋で70%ほど残、口径12.4cm、器高3.4cmを測る、稜付近の沈線は交叉している。II-1135は坏Hの蓋と身とが溶着した資料で身の外面に灰を被っている。

H-1136～1138は坏Hの身である。H-1136は80%残、口径10.6cm、器高4.1cmを測り、外面に大き

な窯壁片が付着している。H-1137は外面に被灰し、腰の部分が擬口縁状になっている。H-1138は底部に別の須恵器片が付着し、その箇所が（重みの為か）凹んでいる。

H-1139・1140は底で外面部分に非還元の変色部分がある、体部に列点文を施す。H-1140は頸部～体部の残存が良好である（口縁部欠）が、若干歪む、頸部に波状文、肩部に列点文を施す。

H-1141・1142は高坏で、何れも軟質で白灰色を呈している。透かしはどうちらも一段二方向の三角透かしである。

H-1143は直口壺（壺C）である、被釉と別の須恵器片の溶着が著しい、内面に窯壁片も付着している。H-1144は小型の壺片で、H-1145は土師器の壺である。

H-1146～1169は1号窯灰原（II区灰原下層）のG-7対応層出土遺物で、H-1146～1153は坏Hの蓋である。H-1146は60%残、天井部はヘラ切りのまま未調整で窯壁片が付着している。H-1147は80%残、天井部に灰を被るが、半円形で灰を被っていない箇所がある。H-1148は口縁の端部がきれいな擬口縁状の剥離になっている。H-1149は歪みあり、天井部は粗いケズリで凹凸が激しい、また稜の凹線は1周せずに終わっている。H-1150は焼成が甘く赤茶色を呈する。H-1151～1153は小片である。

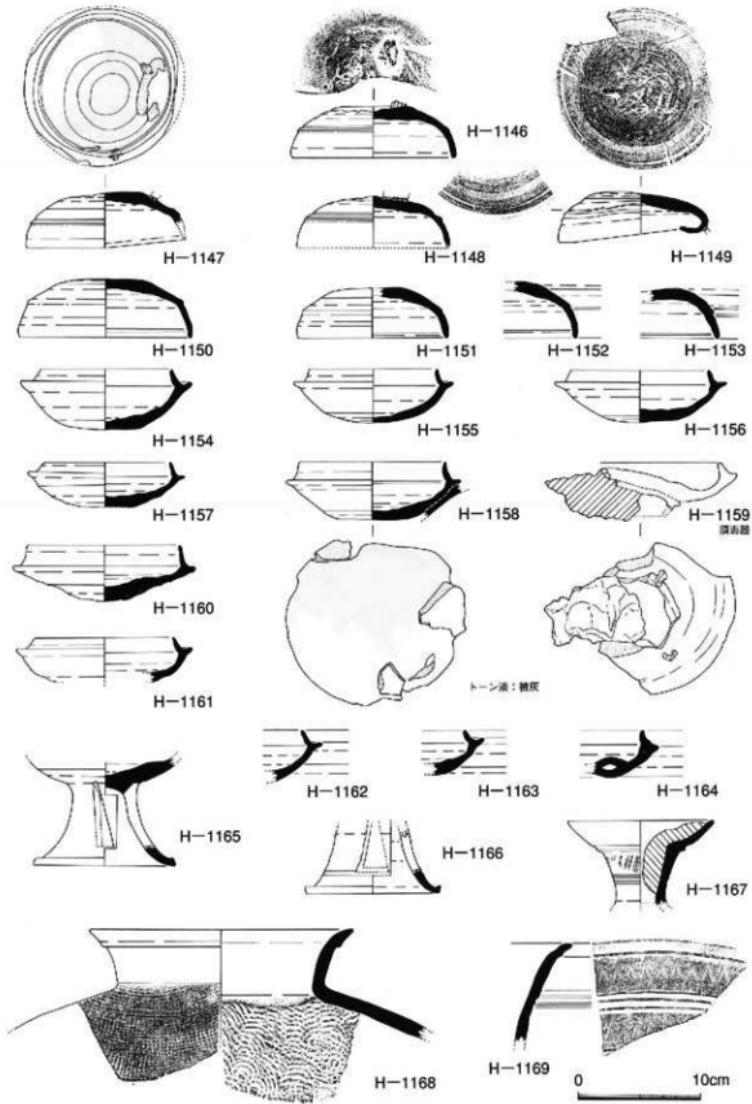
H-1154～1161は坏Hの身である。H-1154は傷みと被灰が著しく二次焼成と思われる。H-1155はやや薄手、H-1156は焼成が甘く軟質、色調は淡黒褐色～淡橙灰色を呈している。H-1157は80%残、口径10.3cm、器高3.7cmを測る、底部の回転ヘラケズリ幅が11cmと広い。H-1158は90%残、外面には緑色の釉が明瞭に残る。H-1159は坏Hの身同上が底部を接して溶着しており、かつ窯壁片が付着している。H-1160は火彫れが著、H-1161～1164は復径が不可能な微細片である。

H-1165・1166は高坏である。H-1165は外面と脚内面に被灰している。H-1166は細片である。H-1167は底の口縁片、H-1168は甕B、H-1169は甕Aの破片である。

H-1170～1189は1号窯灰原（H区灰原下層）の層位不明瞭な（トレンチ他）の出土遺物である。H-1170～1184は坏Hの蓋である。H-1170の稜部分の沈線は僅かに重なっており、H-1171は内面と外面の一部に被灰する、また口縁端部外面に刻目状の痕跡が見られる。H-1172は非還元の軟質で灰白色を呈している。H-1174は80%残であるが歪みが強い。H-1175は外面に厚い灰を被る、二次焼成か。H-1176は軟質で調整不明瞭、天井部にヘラ記号を施す。H-1177・1179～1182も細片が多いが何れにもヘラ記号を記してある。H-1178の天井部はヘラ記号というより工具によるキズであろうか。H-1183・1184は坏Hの蓋天井部であろうが円形に剥離している、この剥離が意図的なものかどうかは不明。

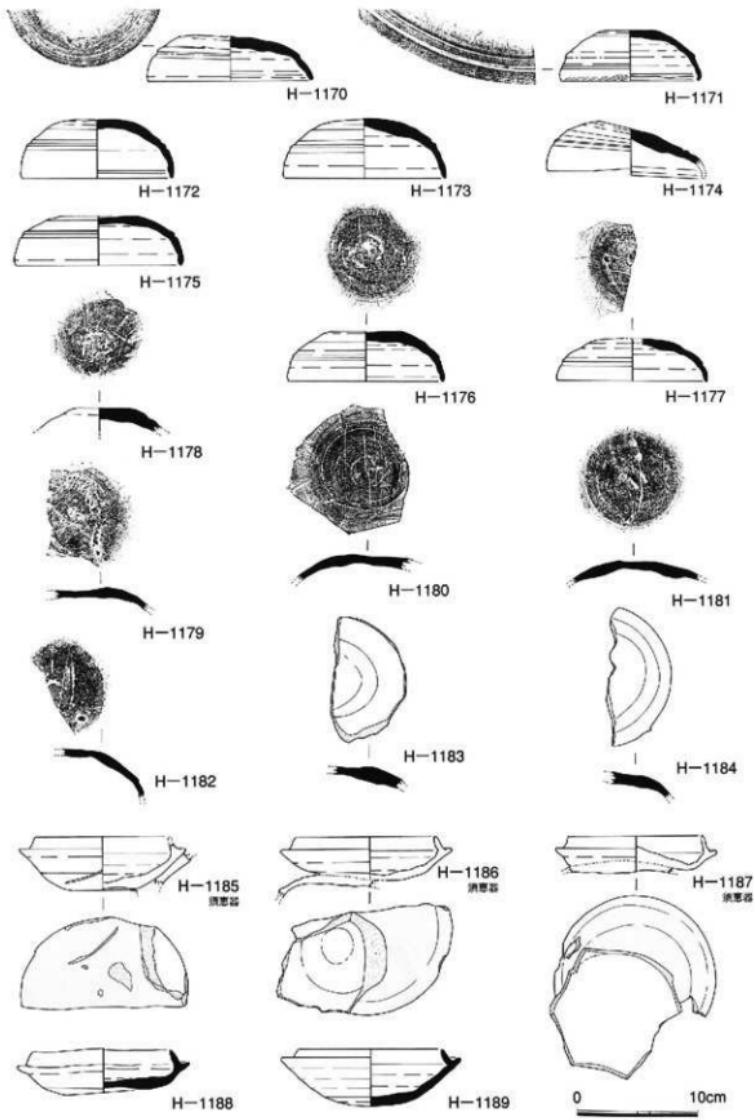
H-1185～1193は坏Hの身である、H-1185～1187は別の須恵器片が付着し、何れも外面に被灰している。II-1188は90%残、口径11.4cm、器高3.6cmを測る、外面に被灰しやや歪む。II-1189は軟質で黄灰色を呈している。II-1190～1192は何れもほぼ完形であるが、同じように歪みが大きい、H-1190は底部をケズるが底部中央部分はほとんどケズりが及んでいない。H-1193は30%残、外面の被灰は厚く窯壁片も付着している。

II-1194～1198は高坏である。H-1194・1196・1198は脚片である。H-1195は高坏Bで80%残、



灰原下層G-7対応層出土遺物

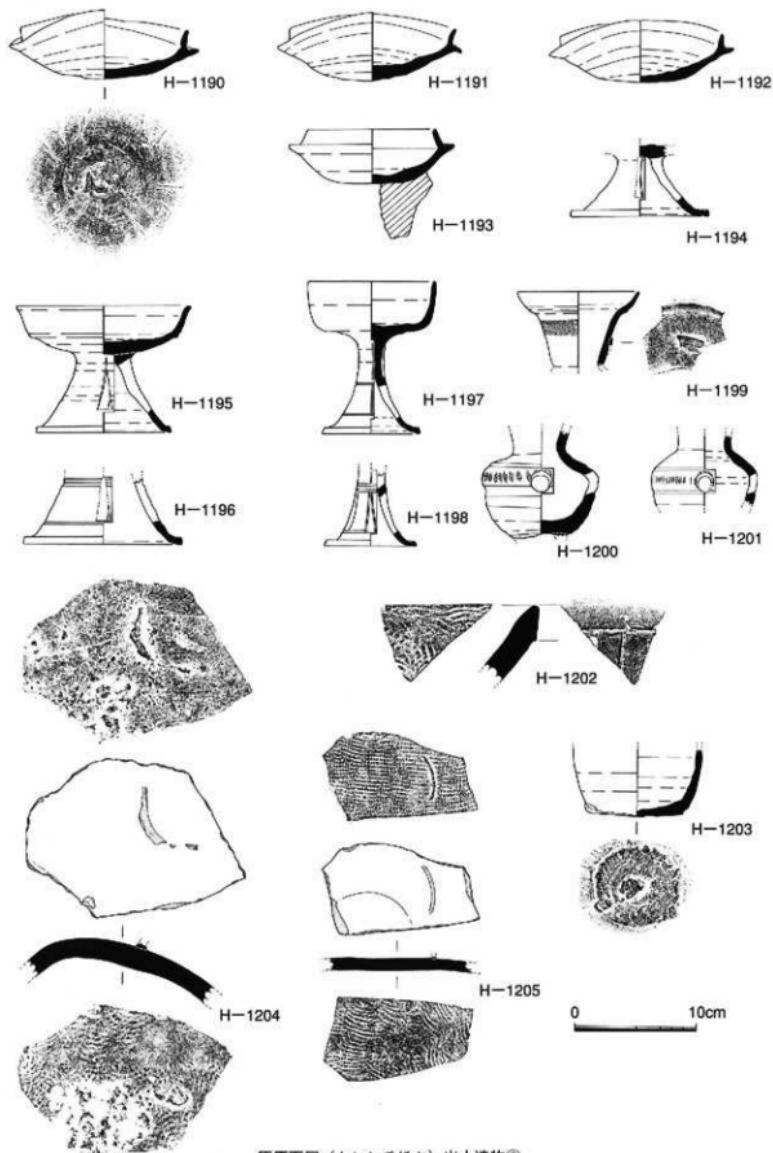
第156図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑭



灰原下層（トレンチほか）出土遺物①

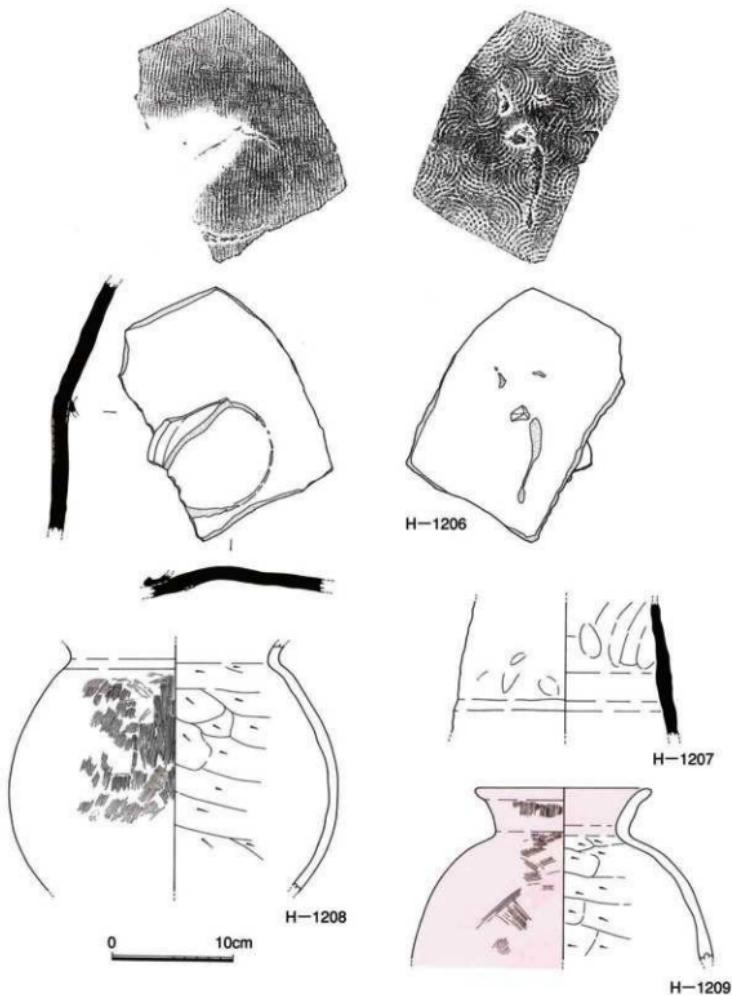
トーン淡：柱灰

第157図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑤

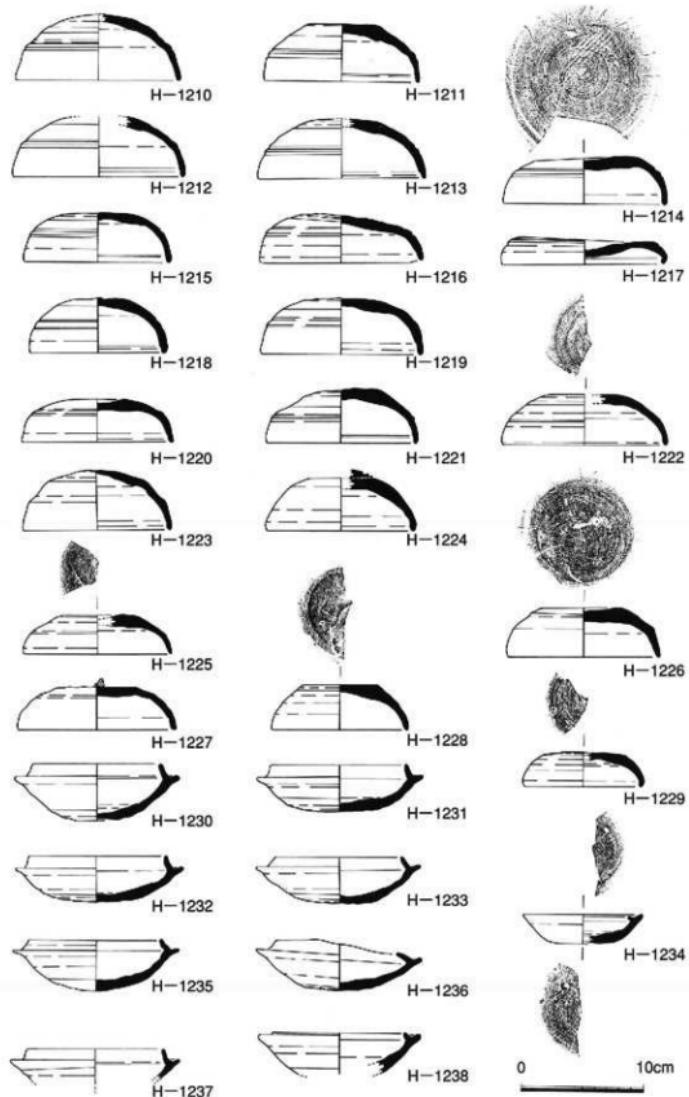


灰原下層（トレンチほか）出土遺物②

第158図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑩



灰原下層（トレンチほか）出土遺物③
第159図 H区 灰原下層（1号窯灰原）出土遺物⑦



第160図 S H101出土遺物①

(復) 口径14.3cm、器高10.4cmを測り、壺部内面に灰がたまっている。H-1197は高壺Cで70%残、
(復) □口径10.4cm、器高12.4cmを測る、焼成は普通で二段三方向透かし(切込み)を施す。

H-1199~1201は應でH-1199は口縁片、波状文を施し、別の須恵器片が付着している。H-1200は体部片で底部に別の須恵器片が溶着している。H-1201は体部の小片である。

H-1202は器種不明、鉢か、器壁が厚く端部が尖りぎみで3cm幅の広い面を有する、内面にタタキ痕を残す。H-1203は壺の底部片で底部は切り離し後本調整、条痕が見られる。

H-1204・1206は壺片転用の置台か、H-1201は傷みが激しく外面に被灰する、二次焼成か。H-1206は壺片に高壺の脚と思われる破片が溶着しているものである。

H-1207は細片のため器種不明、雜な作りでオサエとナデを主調整としており凹凸が激しい、焼成が甘く軟質で黄灰色を呈している、子持壺の脚か。

H-1208・1209は土師器の甕で、山津1号窯の灰原(H区灰原下層)から出土しているもの、H-1208の肩部にはスヌが付着し、H-1209には朱によって赤彩を施している。

③ 山津1号窯以外の遺構と遺構出土遺物

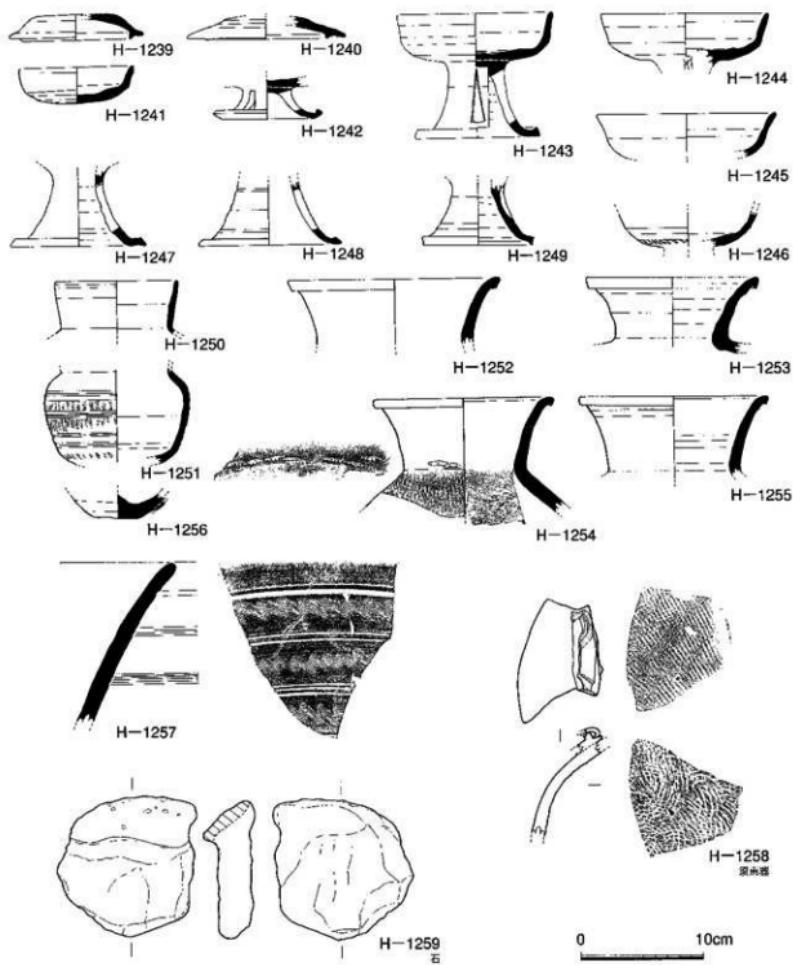
先にH区の上層堆積状況でみたように、H区では山津1号窯(と関連灰原)の他に検出された遺構はS H101・102・113、そして1号窯の廃絶後に堆積した灰原中・上層が挙げられる(第75図)。

S H101・102・113は土坑状の遺構であるが、灰原と重なった部分があった。そのため、黒色層と黒色層との重なりで明確な遺構プランを検出することは出来なかった。しかし、地山部分で検出されている部分は極めて明確な遺構の痕跡を残しており、可能な限り灰原と区別して遺物を取り上げた。H区での遺構は全て地山部分との関連付近で検出できたものであり、灰原部分にも土坑などが存在した可能性も否定できないが、平面的にこれらを検出するのは現状ではほぼ不可能と考えられる。以下、各遺構とその出土遺物について報告する。

S H101は調査区南東の隅で検出された上坑で、検出長軸4.6m、短軸2.2m~、深さ1.3mを測る。S H102はS H101の北西、山津1号窯の南で検出された土坑で、検出の長軸4.2m、短軸1.9m、深さ0.7mを測る。何れも先述したように地山部分(黄色砂礫)では遺構ラインをはっきり確認できたが、灰原と重なった部分では黒と黒との重なりで切り合ひ関係を具体的に把握出来なかった。

遺物の取上げは確実にS H101で検出できた部分、確実にS H102で検出できた部分(S H102東部)、S H102西部で灰原との重なりが不明瞭な部分、そして、S H101・102を完掘後、その下層の黄色砂礫層において出土した遺物とに分けて取り上げた。これらの各遺構の断面は、dラインセクションの項目に詳しく記載している、詳しくはdラインの項を参考されたい。

H-1210~1259はS H101(確実に検出した部分)の出土遺物である。H-1210~1229が壺口の蓋である。H-1211は焼成不良で黄褐色を呈する、天井部はやや平坦である。H-1213も生焼けで黄褐色を呈している。H-1212は40%残、外面上に白灰を被る、二次焼成か。H-1214は80%残、口径13.2cm、器高4.0cmを測るが、歪みのためかやや扁平になっている、天井外面には工具による条痕がある。H-1215は30%残、H-1216は70%残、口径13.4cm、器高4.0cmを測り、やや歪む、口縁内面は無段。



第161図 S H 101出土遺物②

H-1217は80%残、口径13.3cm、器高2.2を測るが歪みが強く非常に扁平になっている、恐らく重ね焼きによって中央部分が凹んだものと思われる。H-1218は30%残、非常に丸みを帯びた器形である。H-1219はほぼ完形、口径13.3cm、器高4.5cmを測る、軟質の非還元炎焼成ではほぼ上部質といつていい黄褐色を呈する焼き上がりである。H-1220は歪みが強く傷みが激しい、二次焼成と思われる。H-1221は完形、口径12.5cm、器高4.4cmを測る。II-1223の稜の部分はほぼナデのみで作られ、明確な沈線等は施されていない。H-1224は天井部に別の須恵器片が溶着し、H-1225は天井部にヘラ記号を施している。H-1226はほぼ完形、口径12.2cm、器高4.1cmを測る。II-1227の天井はヘラ切り未調整で稜は段が喪失している。II-1228は50%残、(復)口径11.0cm、器高3.8cmとやや小型で、天井部はヘラ切り未調整か、その後、若干のナデ調整を施す、天井にヘラ記号を記す。H-1229は小片であるが(復)口径9.5cm、器高2.8cmの小型扁、身であるかもしれない。

II-1230~1238は坏Hの身である。H-1230は30%残、(復)口径10.6cm、器高4.6cmを測り、非還元炎焼成のため黄褐色を呈している。H-1231は完形、口径11.3cm、器高3.8cmを測るがやや歪みが認められる。H-1232は80%残、口径11.3cm、器高3.8cmを測る。H-1233は90%残、口径10.5cm、器高4.1cmを測る。H-1234は小型品、(復)口径7.3cm、器高2.4cmを測る、底部内面にヘラ記号があり、底部外側には工具による条痕と思われる痕跡が僅かに認められる。II-1235は60%残、外面全面に被灰する。H-1236は90%残だが歪みが強く、かつ外面に被灰している。H-1237は小片、受け部から口縁にかけて被灰している。H-1238は小片、(復)口径10.9cm、器高3.3cmを測り外面に被灰している。

H-1239は小型の蓋であろう、坏G蓋か、つまみ部分は欠損している。H-1240も同じく小型でかえりのある蓋片である。

H-1241はほぼ完形、口径9.4cm、器高3.1cmを測る、坏Gの身と思われるが蓋か身かの区別は困難である。

H-1242は脚部の小片、残存高3.3cmと脚部分が低い低脚片である。II-1243は高坏で80%残、(復)口径12.9cm、器高10.2cmを測る、一段二方向の三角透かしを施す。H-1244は高坏の坏脚片、(復)口径13.8cmを測る。H-1245・1246は小片、高坏か。H-1247~1249は脚部の破片である、削れ面などで透かしが確認できるが透かしの形状は不明。

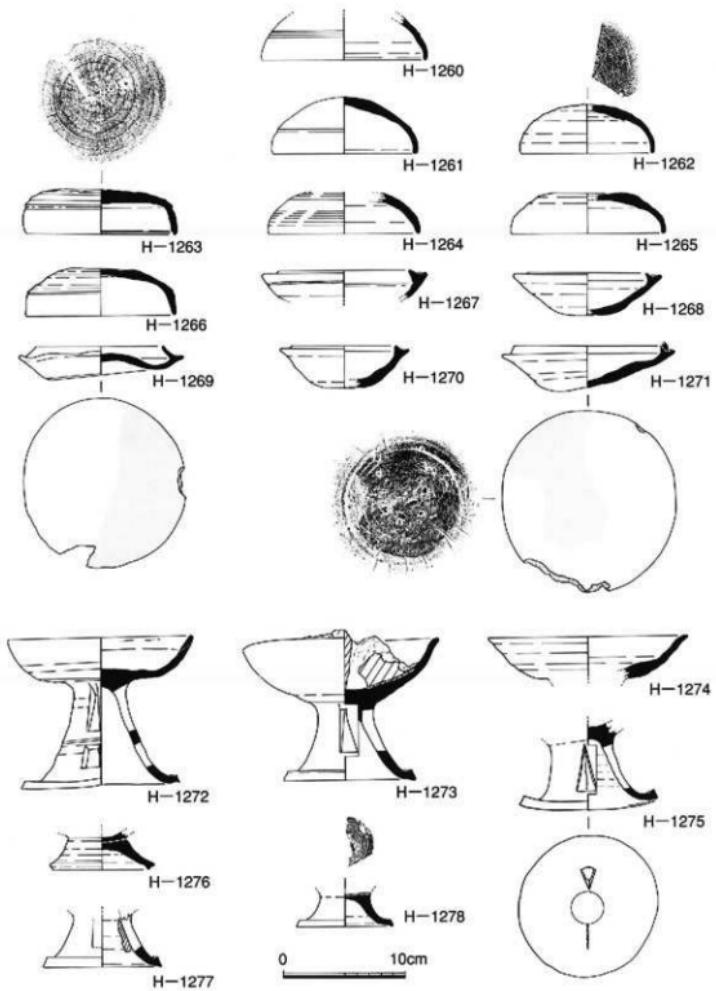
H-1250・1251・1256は壺で、H-1250は直口壺(壺C)の口縁片、H-1251は体部片、H-1256は壺の底部、平底で内面にロクロ日が顯著に残る。

II-1252~1255・1257は壺で、何れも口縁片である。H-1252~1255は壺Bで、H-1254は肩部にタタキ痕と思われる箇所がある。H-1257は壺Aの破片で波状文と沈線を施す。

H-1258は沿着資料で坏Hと壺片とが沿着している。

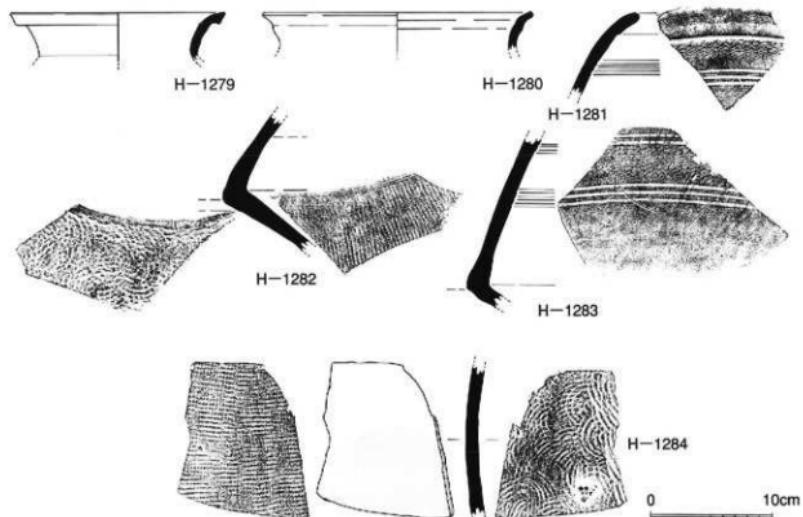
H-1259は石に灰や窓噴片?が溶着した資料で、石は被熱を受け赤色化している。

H-1260~1284はS II 102(確実に検出した部分・東部からの)出土遺物である。H-1260~1266は坏Hである。H-1260は小片、H-1261は30%残である。H-1262は全体にナデのみで稜や段がない、天井にヘラ記号を記している。H-1263はほぼ完形、口径12.1cm、器高3.1cmを測り、天井にヘラ記号を記している。H-1265は外面に一部灰が被り、H-1266は内面に灰を被っている。



トーン淡：被灰

第162図 S H 102出土遺物①



第163図 S H102出土遺物②

トーン添：被灰

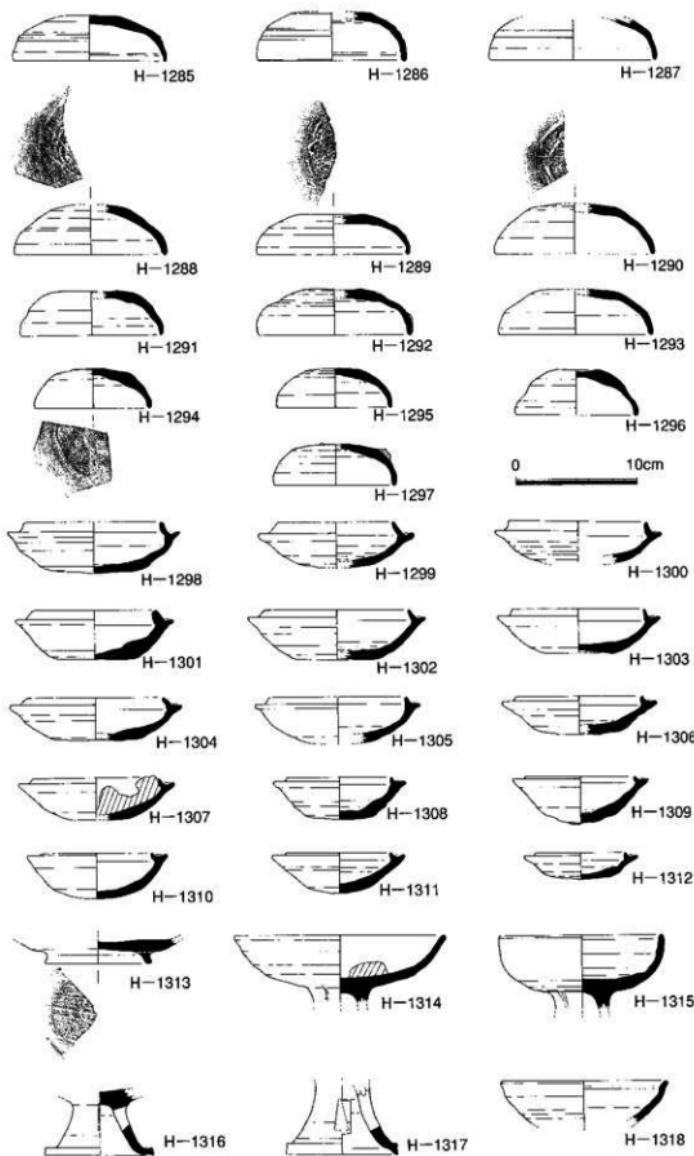
H-1267～1271は壺Hの身である。H-1267は細片であるが体部に別の須恵器片が付着した痕跡がある。H-1268は（復）口径9.6cm、器高3.4cmを測り、外面に一部灰が被っている。H-1269はほぼ完形であるが歪みが著しい、外面に灰を被っている。H-1270は（復）口径8.5cm、器高3.4cmの小型品で、外面に灰を被る。H-1271はほぼ完形で、受け部に蓋の一部が溶着している、底部調整はヘラ切り→ナデで底部にヘラ記号？ 又は工具による条痕と思われる痕跡が認められる、底部は被灰と変色部分、重みで凹んだ部分とがあり、重ね焼きの痕跡と思われる。

H-1272～1277は高壺、又は低脚の脚部である。H-1272は高壺Bで70%残、口径15.1cm、器高13.0cmを測り、二段の三方向方形透かしを施す。H-1273も高壺B、80%残であるが歪みがあり、壺部内面に大きな窓壁片が付着している、また壺部内面と外面の一辺、脚外面に被灰する。H-1274は高壺の壺部細片、H-1275は脚片で一段の二方向透かしであるが、一方が三角透かしで対面が切り込み状になっている。H-1276は残高3.1cmの小型の低脚で、外面に一部灰が被る。H-1278も低脚で脚と体部との接合部分には接合沈線が残っている。

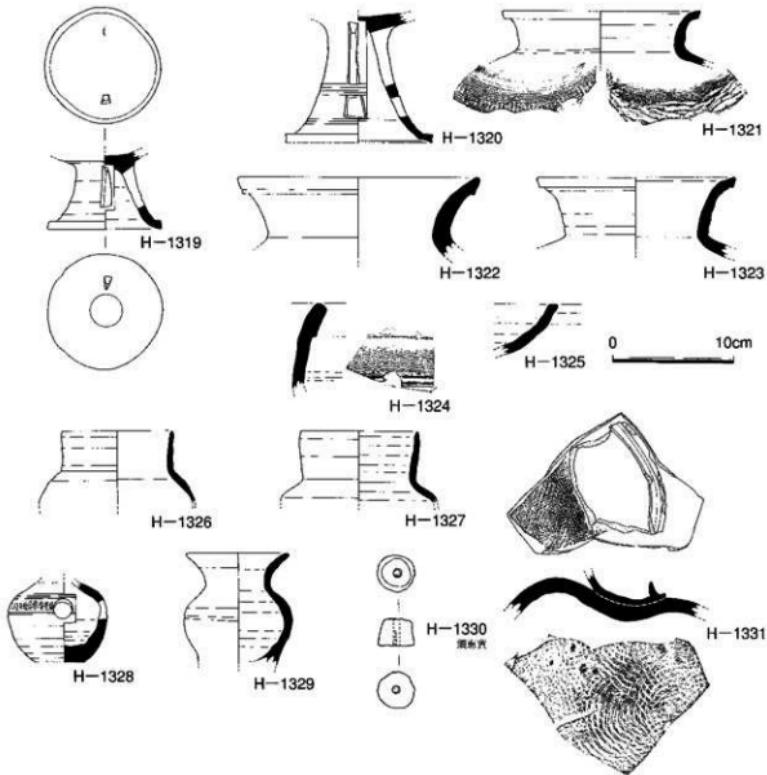
H-1279～1283は蓋片である。H-1279は甕B、H-1280は甕C、H-1281～1283が甕Aである。H-1284は蓋片を転用した置台で、外面に円形の変色部分が見られる。

H-1285～1331はS H102（西）～周辺灰原の出土遺物である、これはSH102の西部分で、遺構と灰原とが重なっており遺構のラインが不明瞭な部分から検出した遺物である。

H-1285～1297は壺Hの蓋である。H-1285は30%残、天井部を中心に灰を被っている。H-1286



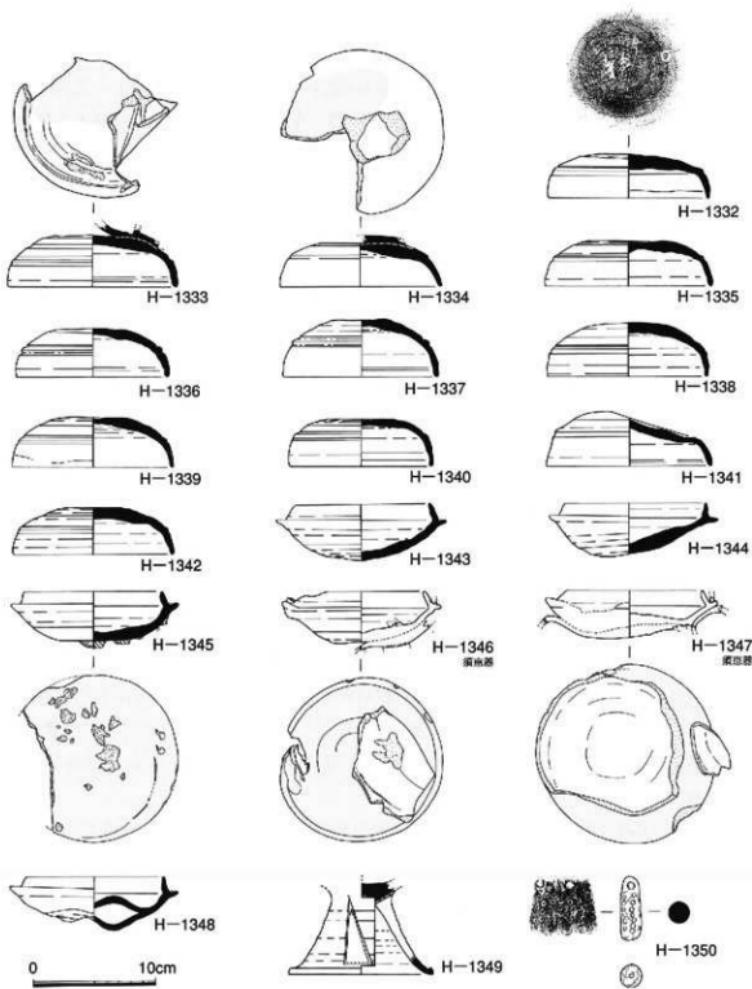
第164図 S H102（西）～周辺灰原出土遺物①



第165図 S H102（西）～周辺灰原出土遺物②

は小片である、口縁端部に刻目状の痕跡が見られる。H-1288～1290は小片、H-1288は条痕が見え、H-1289・1290にはヘラ記号が記してある。H-1291は40%残、種の部分は回転ナデで僅かに埋ませている。H-1292は口縁部付近を中心に灰が被っている。H-1293が焼成時の温度差のためか、外面は灰黄色、内面は黒色を呈している。H-1294は30%残、（復）口径9.5、器高3.3cmの小型品で天井内面にヘラ記号を記している。H-1295もH-1294と同じく小型品で天井部の一部に黄灰が被っている。H-1296・1297も（復）口径が10.0cmの小型の坏H蓋である。

H-1298～1312は坏Hの身である。H-1298は40%残、回転ナデをやや強く施しており、ナデによる凹みがよく残っている。H-1299・1301・1303・1306・1309・1310・1312は外面に被灰、H-1307は外面の一部に被灰し、内面に窓壁片が溶着している。H-1308～1312は（復）口径が7～8cm前後の小型品である。



トーン淡：板灰

第166図 (S H101・102下) 黄色砂礫層出土遺物

H-1313は高台片、坏Fか、底部は静止糸切りにより切り離しており、外面に灰を被っている。H-1314～1320は高坏である。H-1314・1315は高坏Bの坏部で、II-1314は坏部内面（見込み）に被灰と窓壁片が付着する。H-1315は坏部の30%ほどが残、歪みが大きいので補正反転して実測した。H-1316は残存高が5.4cmを測るやや低い脚で、一段二方向からの切り込みを施している。H-1317は脚片、残存部分では二方向からの透かし痕があるが透かしの形状は不明。H-1318は高坏の坏部か、小片で全形は不明である。H-1319は脚片、一段二方向からの透かしで、一方向が方形透かし、対面は切り込みで内面まで貫通していない。H-1320は長脚の高坏、脚部分で脚部が50%ほど残、残存部分では二段二方向からの方形透かしを施している。

H-1321～1324は壺片である。H-1321～1323は壺BでH-1322は内面に灰を被っている。II-1324は細片、波状文を施している。

H-1325は小片である、（口縁？）端部が水平になっている、鉢類か、端部の水平面に合わせて実測したので本來の傾きなどは岡のようではないであろう。

H-1326・1327は壺である。直口壺（壺C）の口縁部で、H-1326が（復）口径9.1cm、H-1327が9.6cmを測る、また、H-1327は内面に灰を被っている。

H-1328は龜の体部片、H-1329は子持壺の子持部分である。H-1330は須恵質の紡錘車で、中央の穿孔部分に棒状の塊が付着している。H-1331は溶着資料で坏Hと壺片とが溶着したものである。

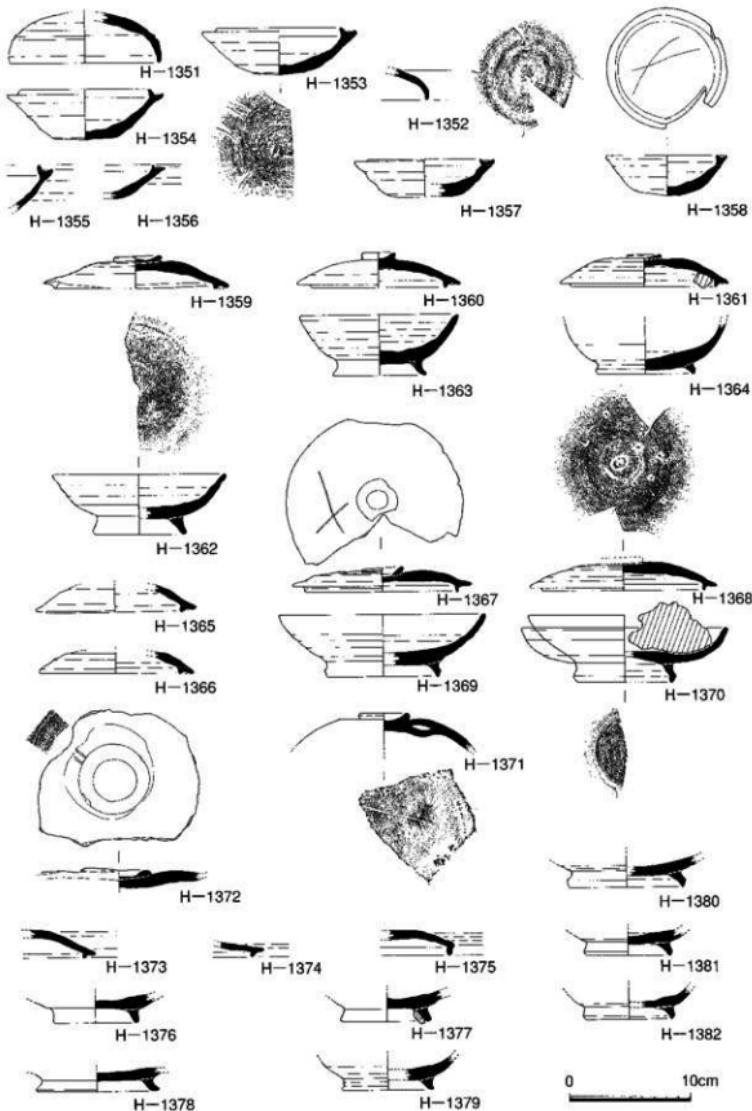
H-1332～1350は（S H101・102下）の黄色砂礫層からの出土遺物である。H-1332～1342は坏Hの蓋である。II-1332は70%残、口径13.3cm、器高3.6cmを測る、やや歪みか扁平な形態で、口縁内面は無段であるが粘土紐の痕跡が残る、天井部にヘラ記号を施す。II-1333は坏Hが溶着しており、外面に被灰する、二次焼成か。H-1334は60%残、口径13.2cm、器高3.5cmを測り、天井部に釉を被り、別の須恵器片が溶着している。H-1335は80%残、口径13.8cm、器高3.7cmを測る、天井部はケズリであるが、頂部はナデている。H-1336の天井部はヘラ切り→ケズリであるが、頂部までケズリが及ばず未調整となっている。H-1337は80%残、口径12.8cm、器高4.7cmを測る、外面は部分的に被釉している。H-1339は50%残、粘土紐の痕跡が観察出来る。H-1340は60%残、口縁内面には指頭大のナデによる凹みが施されている。H-1341は80%残、口径13.6cm、器高4.5cmを測る、天井部が凹んでいるがこれは重ね焼き時に生じたものであろう。

H-1343～1348は坏Hの身である。II-1343はほぼ完形、口径11.1cm、器高4.6cmを測る、底部の調整はヘラケズリである。H-1344は80%残であるが底部が凹む。H-1345は80%残、外面に激しく釉を被っており、かつ、外面に別須恵器の円形剥離痕が見られる。H-1346は坏Hの溶着資料で坏身の外面に灰を被っている。H-1347も同じく坏Hの溶着資料で、坏身の外面に灰を被る。H-1348は90%残であるが、歪みと火膨れが生じている、外面に黄灰を被る。

H-1349は高坏の脚部で一段二方向より三角透かしを施す。

H-1350は棒状の上鍤で片側に孔を穿ち、体部は全面に竹管文を施す、焼成は須恵質で灰白色を呈している。

S H113は調査区北東端、山津1号窯の北東で検出された十坑である。表上除去後の遺構検出では詳



第167図 S H113出土遺物①

細は不明であったが、bライン、cライン、dラインの断面観察の結果、出土遺物も年代的にまとまっており、また図版21（D）のように1号窯を垂直に切り込んでいるため、山津1号窯廃絶後に窯の一部を破壊して掘削された土坑状の遺構と判断した。検出長は長軸6.9m、短軸1.7m～、深さ0.7m程度を測るが、黒色の灰原との重なり部分もあって全形の形状は不明である。出土遺物のH-1351～1411は時期的に比較的まとまった遺物が出土しており、これらは、先述した各セクションでの詳細な取上げ結果とも合致するものである。

H-1351～1411はS H113出土遺物である。H-1351・1352は坏Hの蓋である。H-1351は15%残で（復）口径12.6cm、器高4.1cmを測る、H-1352は微細片である。

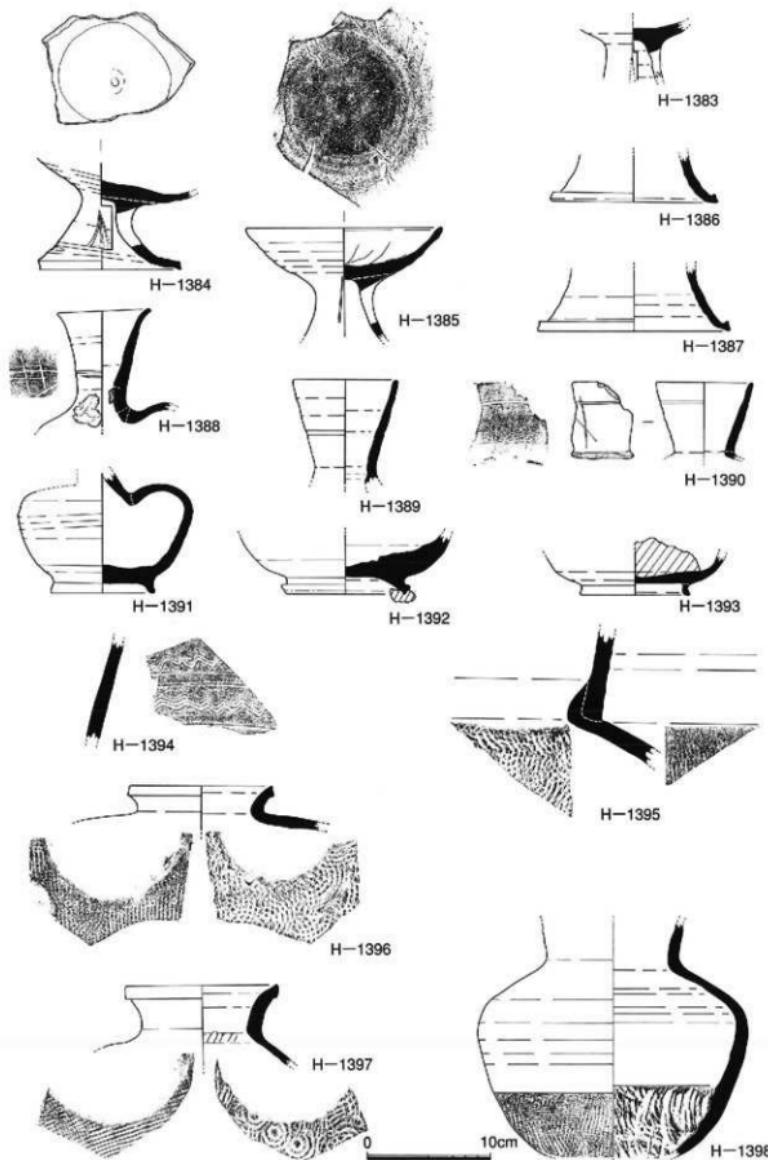
H-1353～1358は坏Hの身である。H-1353は30%残、外面に灰を被り、底部には工具によると思われる条痕が残る。H-1354は30%残、外面に被灰する。H-1355は復元が不可能な細片。H-1356も細片で坏Hの身か、かえりのある蓋かの明確な区別が困難である。H-1357も小片で（復）口径9.4cm、器高3.1cmを測る。H-1358はほぼ完形、口径8.4cm、器高3.3cmを測り、内面にX印のヘラ記号を施す。

H-1359～1361・1365～1368・1371～1375は坏F（又は坏G）の蓋である。H-1359は90%残、口径13.1cm、器高2.7cmを測る、かえりを有し、輪状のつまみを付す、外面とつまみ内にいりい黄灰を被っている。H-1360は40%残、（復）口径11.0cm、器高2.9cmを測る、かえりを有し、径2.8cmの小さな輪状のつまみを付す、外面全体に激しい灰を被っており、端部は歪んでいる。H-1361は40%残、つまみは輪状つまみでかえりを有する、天井とつまみ内に被灰し、内面に窯壁片が付着している。H-1365・1366は蓋の小片、かえりを有し、H-1365の外面には灰を被る。H-1367は80%残、口径12.6cm、器高2.1cmを測り、輪状のつまみを付す、外面にX印のヘラ記号を施す。H-1368は70%残、かえりを有し、つまみ部分は剥離している、このつまみ部分の剥離痕には静止の糸切り痕が残る、外面に被灰する。H-1371は輪状つまみを付した蓋片、内面にヘラ記号を施す。H-1372も輪状つまみの蓋片、外面に被灰しているがつまみ周辺は円形に灰を被らない箇所が見られる、またヘラ記号を施している。H-1373～1375は蓋の微細片である。

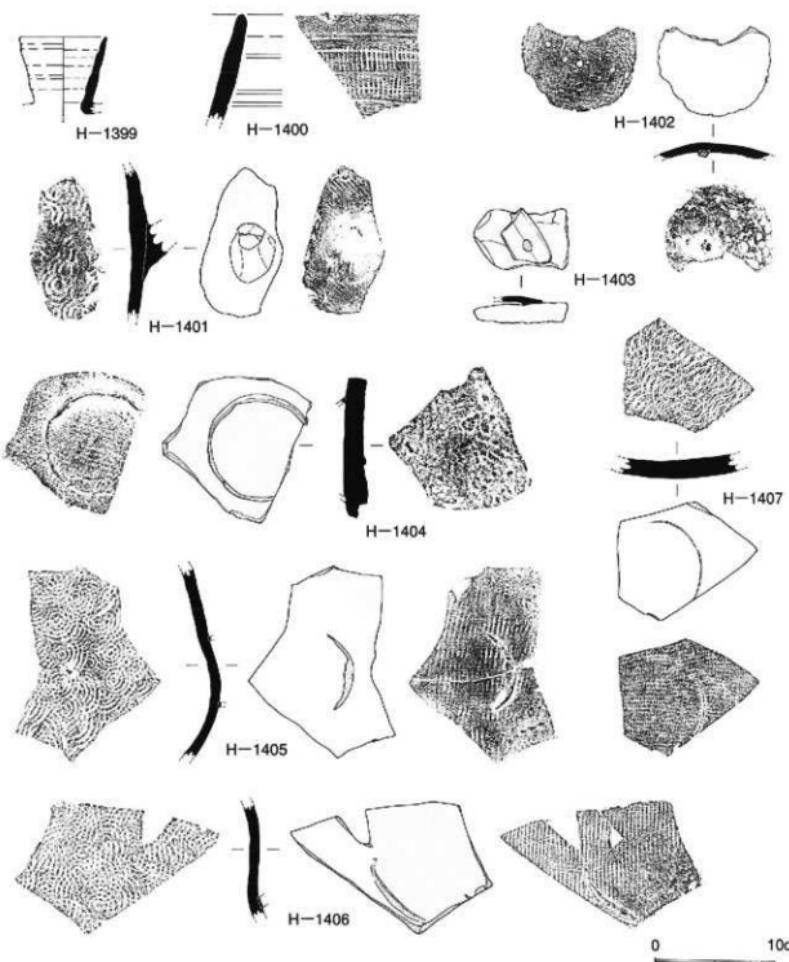
H-1362～1364・1369・1370は坏Fの身である。H-1362は40%残、（復）口径14.2cm、器高4.9cm、高台径7.8cmを測る、底部の調整はケズリで高台内面に部分的に灰が被る、また見込み部分にはヘラ記号を記している。H-1363は40%ほど残、底部はヘラ切りで貼り付け高台、高台部分は部分的に剥離している。H-1364の底部はヘラ切り→ナデで内外面に薄く灰を被っている。H-1369はしっかりした高台を付し、坏部は皿状でやや大きい、底部調整はヘラ切り→ナデである。H-1370は50%残、内面に大きな窯壁が付着しており、その重みのためか、やや歪んでいると思われる所以、補正部分も同時に実測した。底部には灰が被り調整は不明瞭、ただし円弧状の沈線が巡っている。

H-1376～1382は高台片で、概ね坏Fと思われる。底部の調整はナデ（H-1376・1378・1379？・1382）、ケズリ（H-1380・1381？）、被灰で不明瞭（H-1377）であり、全て切り離しは非糸切りのものばかりである。

H-1383～1387は高坏である。H-1384は坏部の上面を欠損しているが、坏部内面（見込み）に灰

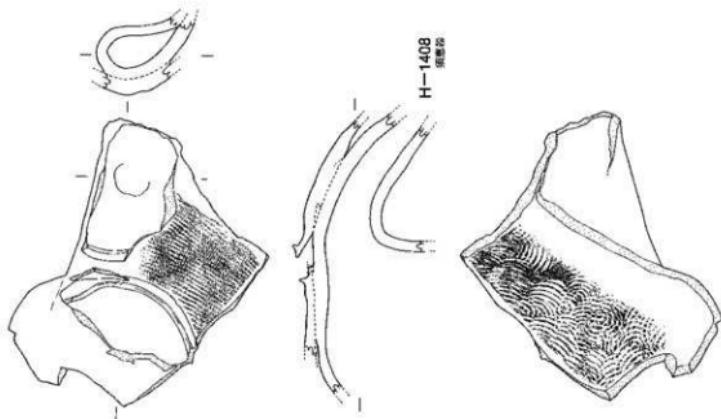
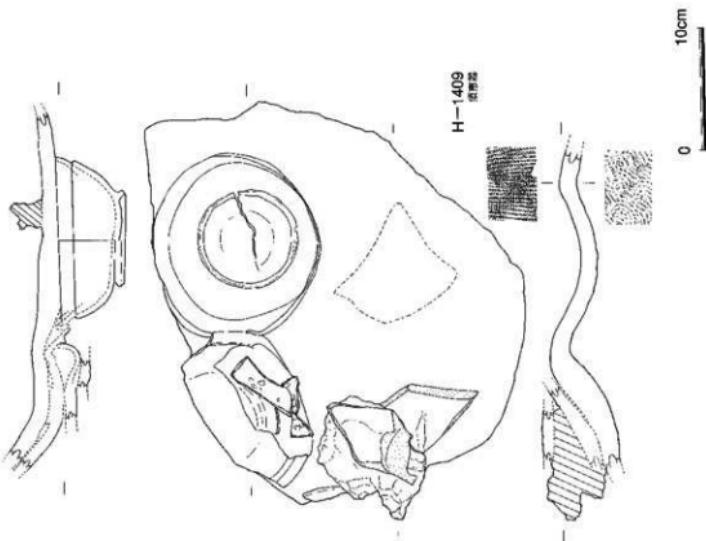


第168図 S H 113出土遺物②

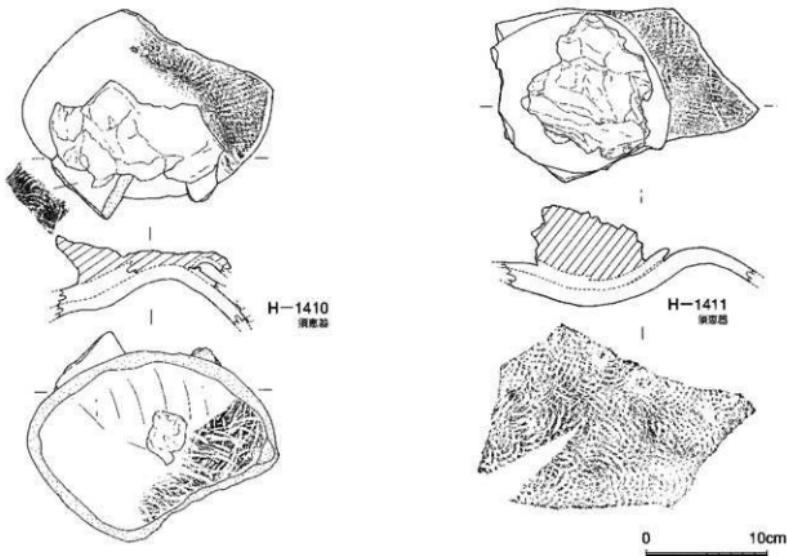


第169図 S H113出土遺物③

トーン線：被底



第170図 S H113出土遺物④



第171図 S H113出土遺物⑤

が被っていない部分が径8.7cm程度の円形で残っている、重ね焼きの痕跡と思われ、体部も若干歪んでいる、透かしは一段二方向の透かしで、一方が三角、もう一方が切り込みである。H-1385は高環Bで环部内面(見込み)にヘラ記号を施す。H-1386・1387は細片で脚であろうか。

H-1388～1392は壺である。H-1388は壺K、頸部が歪んでいるので接合痕が極めて明瞭に観察出来る。頸部に井印のヘラ記号を記す。H-1389も壺Kの口縁片である。H-1390は口縁部分の破片、外面にX印のヘラ記号を記す。H-1391は壺Kの体部片で歪みが著しい、肩部と底部内面に灰を被る。H-1392は壺の高台片で焼成時による破裂が著しい、高台径は9.9cmを測る。H-1393は壺、又は壺の底部である。

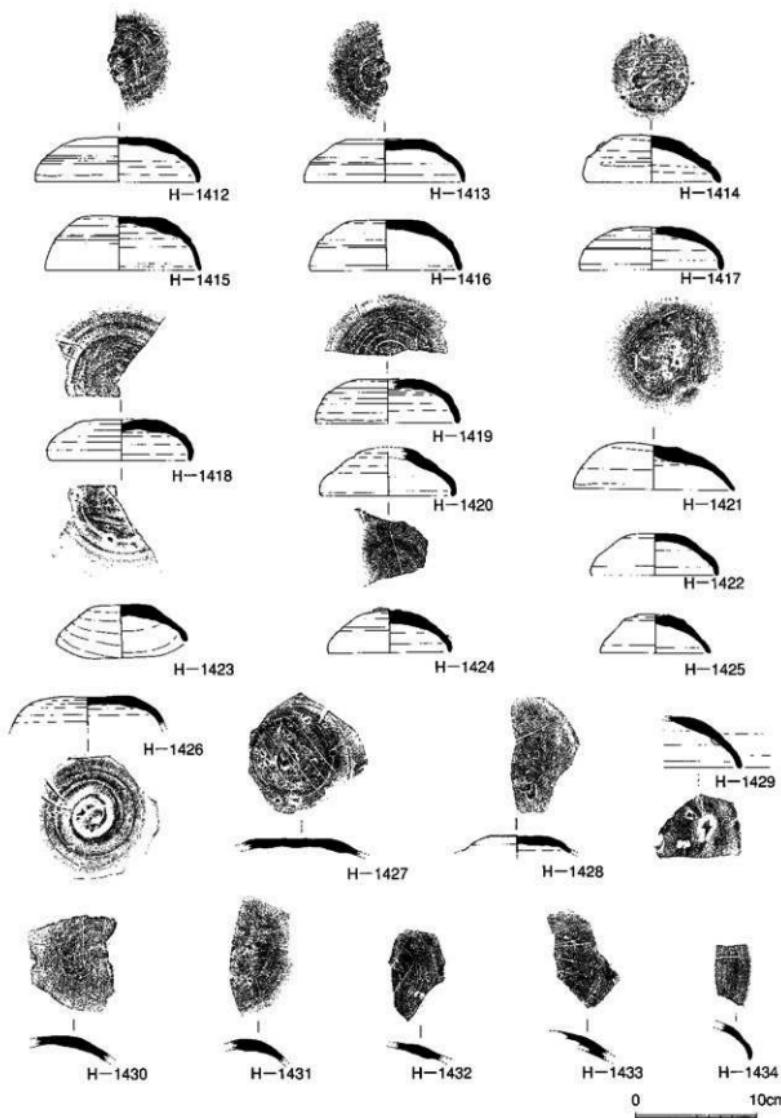
H-1394～1398は甕(H-1396は横瓶か)である。H-1394は小片で波状文を施す。H-1395は甕Aの頸部で接合部分が明確である。H-1396・1397は甕B又は横瓶、外表面はタタキ調整である。H-1398は体部で胴部下半はカキメとタタキ調整である。

H-1399～1401は小片である。H-1399は壺の口縁部、(復)口径7.0cm、残高6.4cmを測る。H-1400は復元不可能な小片、鉢か。H-1401は把手片である。

H-1402は円盤状に剥離した須恵器で傷みが激しく二次焼成を受けていると思われる。

H-1403は須恵器と石とが溶着した資料で、須恵器はかえりのある蓋片である。

H-1404～1407は壺片を転用した置台で、何らかの須恵器を置いたと思われる円形の剥離片などが残っている。



第172図 H区 灰原上層出土遺物①

H-1408～1411は壺Fと大甕とが溶着した資料で、何れも同一個体であろうが直接的に接合できるものは無かった。このうち、H-1408は壺F蓋が二個体が大きく重むる甕片と溶着している。H-1409は大甕片に壺Fが二個体溶着しており、この他にも須恵器片と窯壁片が溶着している箇所や、何か個体が接していたと思われる凹み跡（図では波線部分）などが見られる、このうち壺Fは一つ（図の左上）が蓋と身とがセットで溶着しており、もう一つ（図の右上）は身と身の溶着か身と蓋か、完全に溶着しているので詳細は観察出来ない。H-1410は甕片に壺Fの蓋と身とのセット、及び須恵器片と窯壁片とが溶着している。H-1411ではかえりを有し輪状つまみを付す蓋片が、窯壁に押しつぶされるように甕片に付着している。

④ II区灰原上・中層の出土遺物

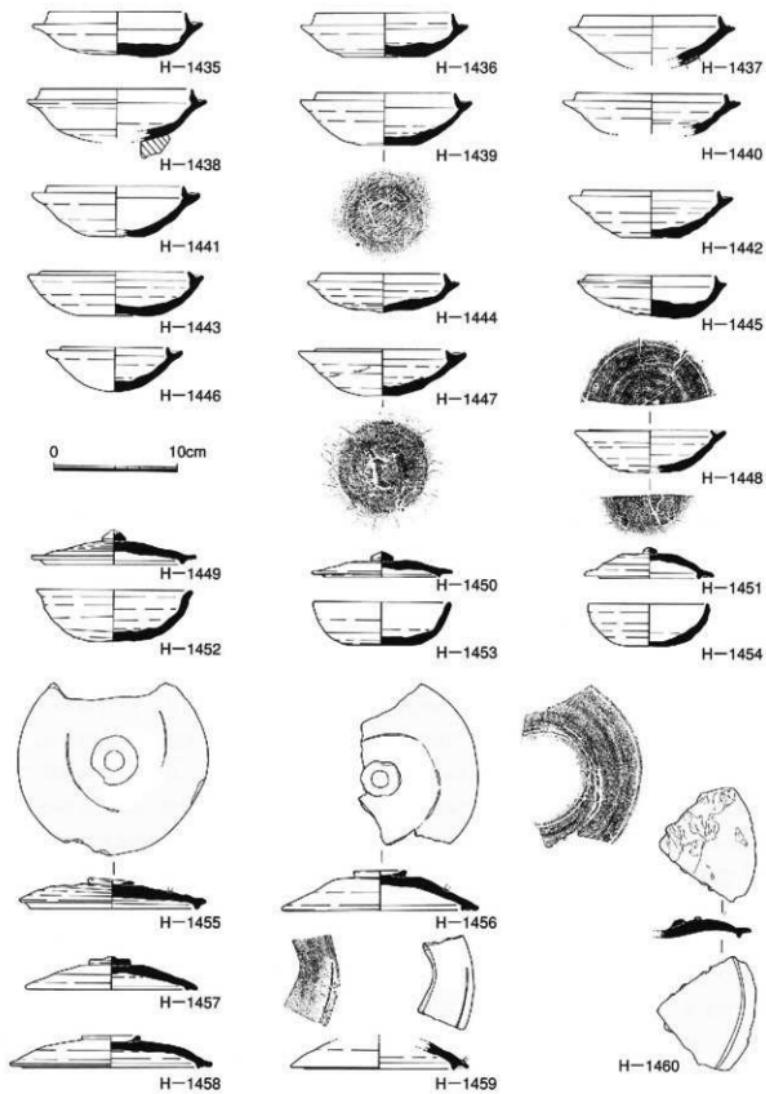
H区の構造（山津1号窯とその灰原を含めて）と遺物の概要は上に記した通りである。H区からは、各セクションの項で記してあるように、この他に調査区全体で複数の時期の灰原が堆積し、出土遺物も極めて大量であった。

これらを明確に区別して調査することは出来なかったので、便宜上、山津1号窯の灰原をH区の灰原下層とし、1号窯絶後に堆積した灰原層をH区の灰原上・中層として調査を実施した。ここでいう上層・中層というのは時期的な意味を含んでいるのではなく、掘削時における相対的な上下関係に過ぎない。

土層觀察や遺物取上げの結果、出土須恵器の時期も広い範囲に及び、かなり複雑な堆積が見られるので、現地においては何度かの灰原の堆積が複雑に混ざっている感じを受けた。以下、実測した遺物は全体量の僅かに過ぎないが、各遺物を器種毎に記していく。

H-1412～1668はH区の灰原上層出土遺物である。H-1412～1434が壺Hの蓋である。H-1412は30%残、粘土紐痕が僅かに残り、天井部にはヘラ記号を施す。H-1413は20%残、天井の頂部はナデでその周辺のみケズリが残る、また天井にヘラ記号を記している。H-1414は80%残、口径11.0cm、器高3.9cmを測るが歪みがある、稜の部分はやや太い沈線が施されているがこれは一回せずに途中で途切れている、天井には工具によると思われる条痕が残る。H-1415は70%残、口径12.8cm、器高4.4cmを測る、やや軟質で黄灰色を呈している。H-1416は25%残の破片、外面に被灰する。H-1418は小片で天井に工具によると思われる条痕が残る。H-1419は天井部にヘラ記号を記してある。H-1420は内面にヘラ記号を記す。H-1421は80%残であるが歪む、稜の段が無く、天井には工具によると思われる条痕が残っている。H-1422～1425は小型の壺H蓋で、何れも（復）口径が10cm内外を測る。H-1423は80%残であるが歪みが強く、H-1425はヘラ切り木調整の痕が良く観察出来る。H-1426は蓋の大井部分、内面にはロクロ目が顕著。H-1427～1434は何れも細片で、内外面にヘラ記号を記している。

H-1435～1448は壺Hの身である。H-1435は80%残、口径11.1cm、器高3.5cmを測り、外面に被灰する。H-1436は80%残、口径11.3cm、器高3.6cmを測る。H-1437は外側の一部に灰を被り、別の須恵器片との剥離痕が残る。H-1438は窯壁片が付着する。H-1439は80%残、口径11.4cm、器高4.3cm



トーン法：極灰

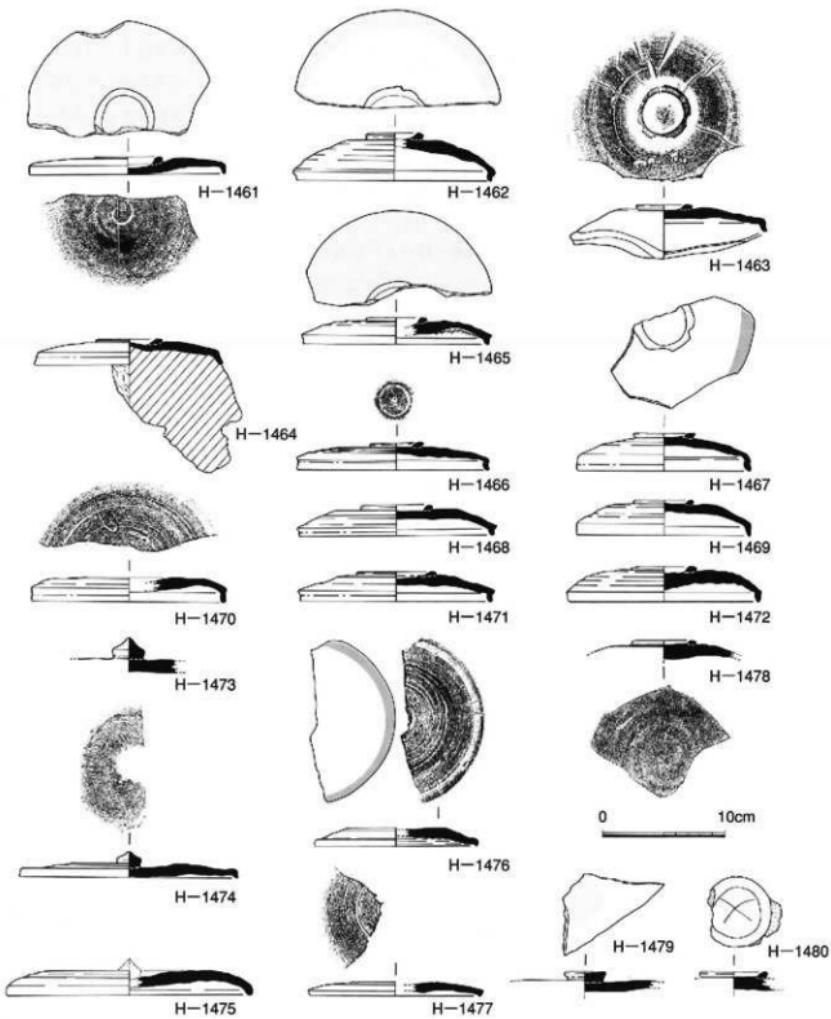
第173図 H区 灰原上層出土遺物②

を測り、底部は平坦で工具によると思われる条痕が残っている。H-1440は破片、外面に被灰と窓壁の付着がある。H-1442・1443も外面に灰を被る。H-1444は30%残、底部の調整は周辺ヘラケズリである。H-1445の底部は回転ヘラケズリを施しているが、中央部分はヘラ切り→ナデである。H-1446は40%残、(復) 口径8.8cm、器高3.6cmと小型で外面に被灰する。H-1447は底部に工具によると思われる条痕が残っている。H-1448は50%残、底部には工具によると思われる条痕が残り、内面にはヘラ記号を施している、また体部外面に被灰している。

H-1449～1454は壺Gである。H-1449は50%残で(復) 口径11.2cmを測る壺Gの蓋、かえりを有し、つまみは宝珠つまみ(一部欠損)である、外面天井部に被灰する。H-1450は60%残の壺G蓋、(復) 口径9.6cmを測り、かえりを有し宝珠つまみを付す。H-1451も壺Gの蓋で50%残で小さなボタン状のつまみを付す。H-1452～1245は壺Gの身と思われるが、壺G蓋との明確な区別は不可能である。H-1452は80%残、口径12.8cm、器高4.2cmを測る、底部調整は回転ヘラケズリで口縁端部がやや外反するので身として実測した。H-1453は80%残、口径11.4cm、器高3.5cmを測り、外面に部分的な被灰がある。H-1454は30%残、蓋か身かの区別は極めて困難である。

H-1455～1460はかえりを有する壺Fの蓋である。H-1455は80%残、口径13.7cm、器高2.5cmを測るがやや歪む、天井には被灰し、別の須恵器の剥離痕が円形に残る、つまみは輪状つまみである。H-1456は40%残、天井には灰が被ってあるが、円形の剥離痕の内側には灰が被っていない、重ね焼きの痕跡であろう。H-1457は70%残、(復) 口径12.4cm、器高2.7cmを測る、天井の調整はケズリであるがやや不明瞭でナデしているか、つまみは径3.4cmの扁平な擬宝珠つまみである。H-1458は30%残で外面に灰を被る、つまみは輪状つまみ、やや傷んでおり二次焼成か。H-1459はかえりを有する蓋の小片、外面に剥離痕があるが重ね焼き痕であろう。H-1460は輪状つまみを付している、外面には窓壁や黄灰が激しく、また内面にも灰が被っており二次焼成と思われる。

H-1461～1472はかえりを有せずに端部が折れ曲がる蓋で、器種的には壺F(または塊A)の蓋になると考えられる。H-1461は50%残、天井部に被釉しておらず凹んでいる、内面にヘラ記号あり。H-1462は50%残、外面周縁部に円弧状に灰を被る、重ね焼きの結果であろう。H-1463は80%残であるが歪みが著しい、外面にタキ痕のような痕跡あり。H-1464は50%残、輪状つまみであるがつまみ径は5.4cmと大きい、内面に大型の窓跡片が付着している。H-1465は30%残、外面に厚く被灰し、内面に窓壁片が付着する、二次焼成か。H-1466は70%残、口径15.7cm、器高2.3cmを測る、天井部の調整は回転ヘラケズリ→貼り付けつまみで、つまみ内には円弧状の痕跡がある。H-1467は50%残、重ね焼き痕と思われる変色が見られる。H-1468は30%残、天井部の調整は回転ヘラケズリ→貼り付け(輪状) つまみである。H-1469は40%残、やや焼成が計上白色を呈している。H-1470は30%残、ヘラ記号か? H-1473は大型の宝珠つまみ片で、H-1474は端部が僅かに突出する蓋、60%残、口径18.0cm、器高2.1cmを測る大型品で皿類の蓋であろう、天井の調整は回転糸切り→周辺ケズリ→宝珠つまみ貼り付けである、口縁端部は短く小さく、僅かな粘土を貼り付けている様子である。H-1475も大型の蓋、40%残で(復) 口径が20.0cmを測る、つまみ部分は欠損しているが、宝珠形のつまみが付していたものと思われる。H-1476は40%残、端部の凸起がほとんど見られない、つまみ部分は欠損



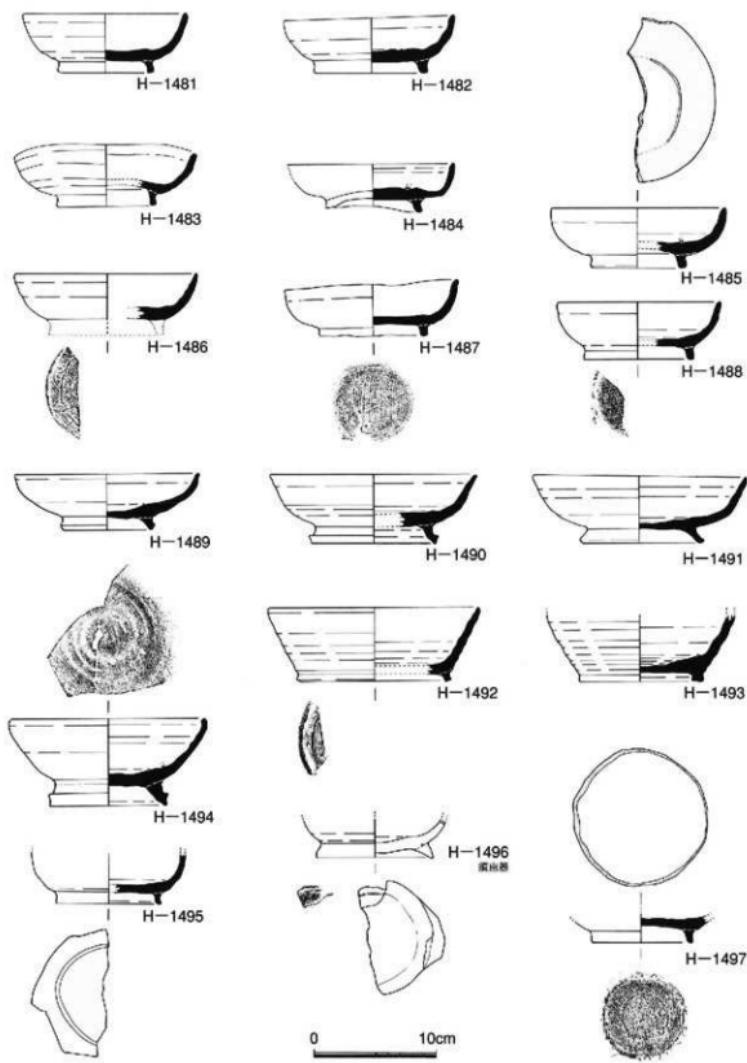
トーン淡：被灰
トーン濃：変色

第174図 H区 灰原上層出土遺物③

していて詳細は不明、重ね焼きと思われる変色が認められる。H-1477も同じく端部が短く、つまみ部分を欠損した蓋で円弧状の沈線が見られる。H-1478は輪状つまみの破片、内面にX印のヘラ記号が記されている。H-1479もつまみ片、径3.4cm程度の扁平なボタン状のつまみを付す、つまみ部外面の平坦面に被灰している。H-1480は輪状のつまみ片、つまみ内にX印のヘラ記号を施している。H-1481~1496が环Fの身である（H-1492は环B）。H-1481は50%残、底部調整はナデ（糸切り→ナデ？）である。H-1482は80%残、（復）口径14.0cm、器高4.75cmを測る、軟質で白灰色を呈しており、底部調整は不明瞭（ナデ）。H-1483は60%残であるが大きく歪む、被灰とやや傷みがあり二次焼成か。H-1484は80%残、ただし歪みがあり、外面の一部に被灰する、内面に別の須恵器片の剥離痕が見られる。H-1485は50%残、外面と内面（見込み）に被灰し、内面には別須恵器片の剥離痕がある。H-1486は細片であるが高台が剥離している、これによれば底部調整は糸切り→高台貼りつけ→ナデ調整である。H-1487は70%残、口径14.3cm、器高4.55cmを測る、焼成は少し甘く灰白色を呈しており、底部の切り離しは静止糸切りである。H-1488は40%残、底部調整は静止糸切り→ナデである。H-1489は30%残、底部調整はヘラ切り→ナデか、調整痕はナデ消されており不明瞭である。H-1490は40%残、底部調整はヘラ切り→ナデか、かなり広い回転ヘラケズリを施している、内面（見込み）に灰を被る。H-1491はほぼ丸形、口径17.4cm、器高5.6cmを測る、高台径は9.5センチで「ハ」字状に大きく広く、底部調整はナデ。H-1492は体部が直線的に伸びる环Bである、20%残で底部の残りが悪く調整不明瞭。H-1493は20%残、全体像は不明であるが环又は壺か。H-1494は60%残、（復）口径16.2cm、器高7.1cmを測り、高台径9.6cmの高くしっかりした高台を付す、内面に被灰と円形の別須恵器片の剥離痕が認められる、重ね焼き痕であろう。H-1495は高台部分を中心とした破片、底部に黄灰がたまっており底部調整は不明（糸切りか？）。H-1496は40%残の高台片、底部調整はヘラ切り→ナデで高台部分が一部剥離している、剥離部分には断面V字状の沈線が見られる、接合沈線か。

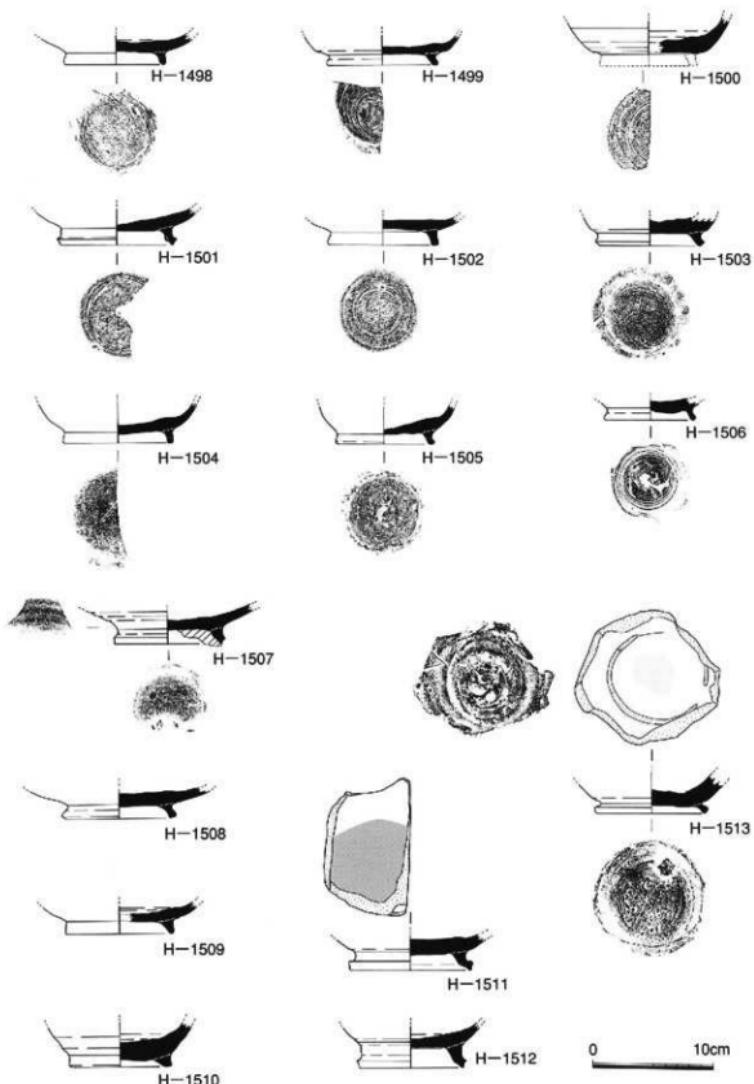
H-1497~1513は壺（または壺）の高台片である。H-1497の底部調整は静止糸切りで、底部中央には円弧状の痕跡がかすかに認められる。H-1498の底部調整は静止糸切り→ナデで高台を貼りつける。H-1499は小片、底部の切り離しは回転糸切りである。H-1500は高台部分が剥離した底部片、H-1501はヘラ記号のある底部片である。H-1502の底部調整は静止糸切り→ナデで円弧状の痕跡とヘラ記号とが施されている。H-1503調整は回転糸切り→ナデで、糸切りがナデ消されかけている。H-1504は外面に被灰し、ヘラ記号が記されている。H-1505の底部はナデ調整、ヘラ記号が見える。H-1506は底部の高台内に円弧状の沈線が施されている。H-1507は底部調整が静止糸切り→ナデで、窓壁片が付着している、また体部にヘラ記号を施す。H-1508は底部調整がヘラケズリ→ナデで、焼成が甘く白色を呈している。H-1509は被灰がある、二次焼成か。H-1511は内面に重ね焼きと思われる円形の変色部分がある。H-1512は高台が一部剥離して貼り付け状況は良く観察出来る。H-1513は内外面共に傷みが激しく二次焼成を受けている、内面には別の須恵器との剥離痕があり、底部にはX印のヘラ記号が記されている。

H-1514~1530は塊（塊A・B）である。H-1514は40%残、底部調整は糸切りか。H-1515は

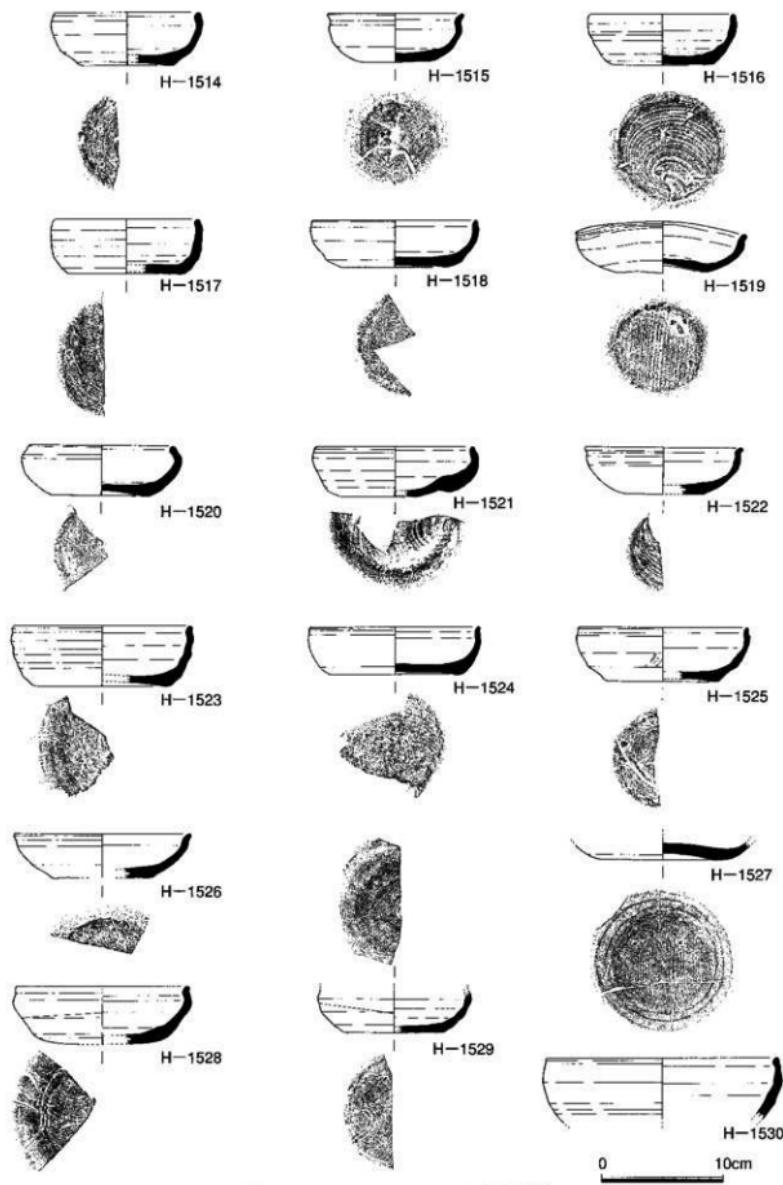


トーン添：無灰

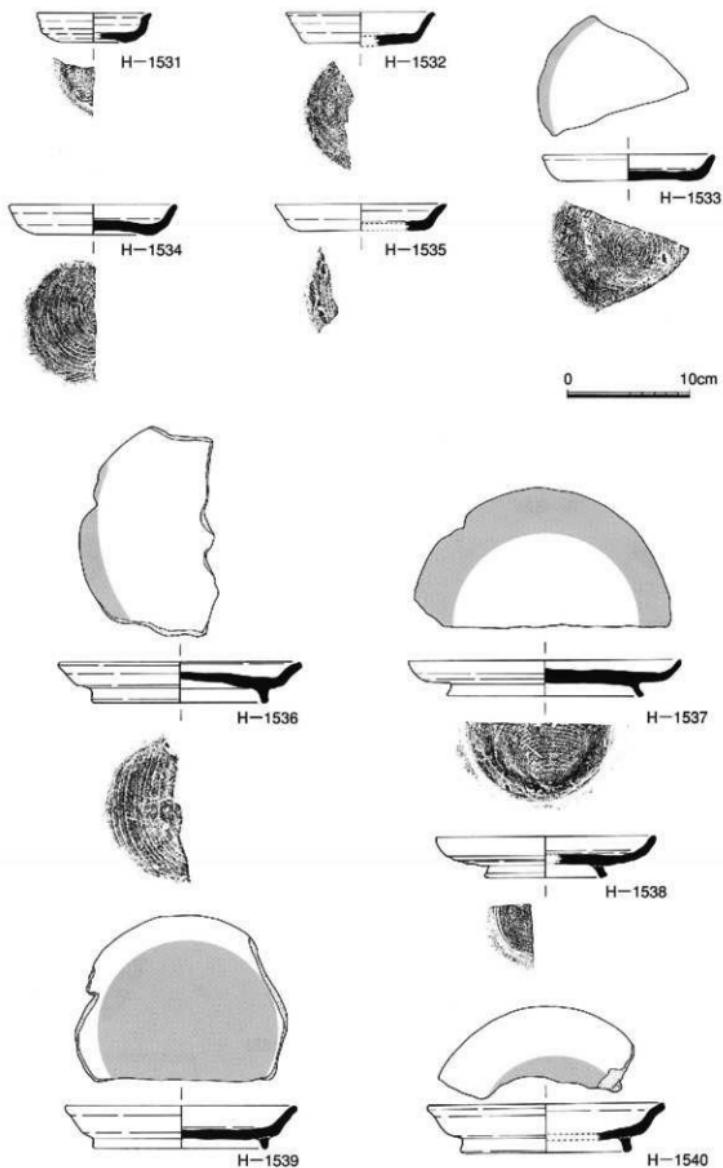
第175図 H区 灰原上層出土遺物④



第176図 H区 灰原上層出土遺物⑤

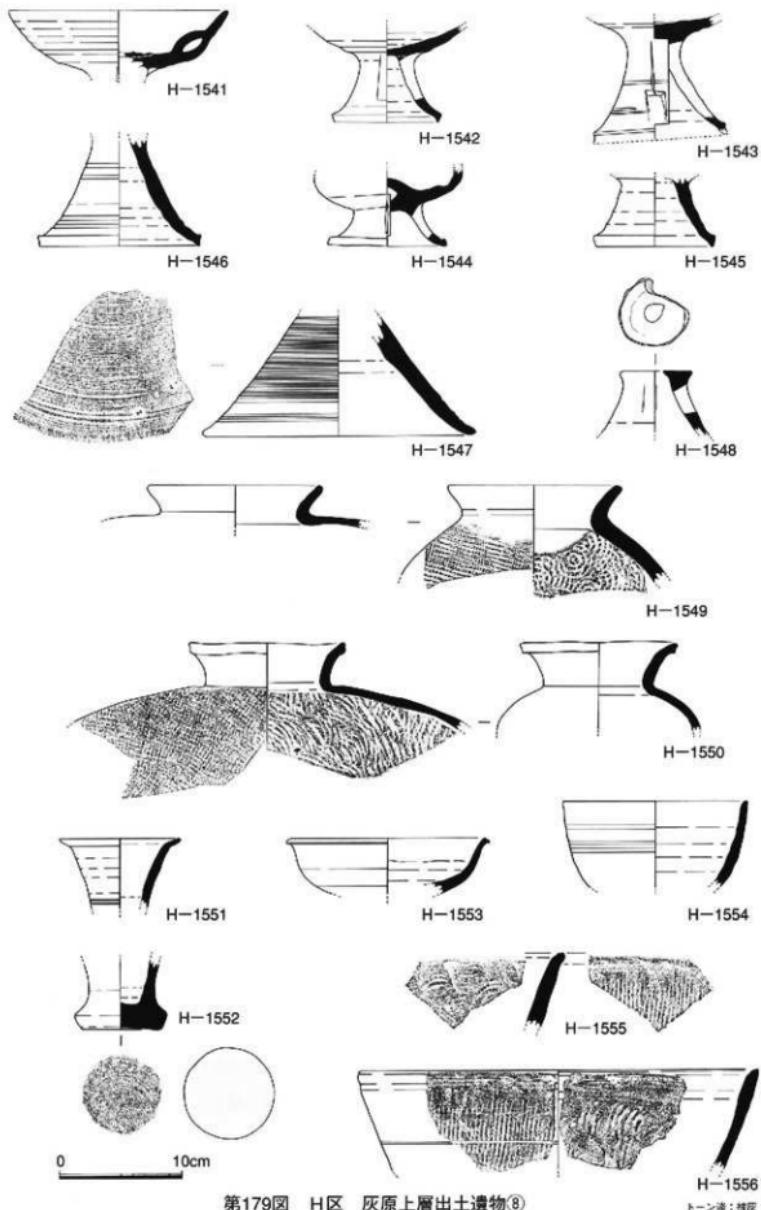


第177図 H区 灰原上層出土遺物⑥



第178図 H区 灰原上層出土遺物⑦

トーン淡：変色



第179図 H区 灰原上層出土遺物⑧

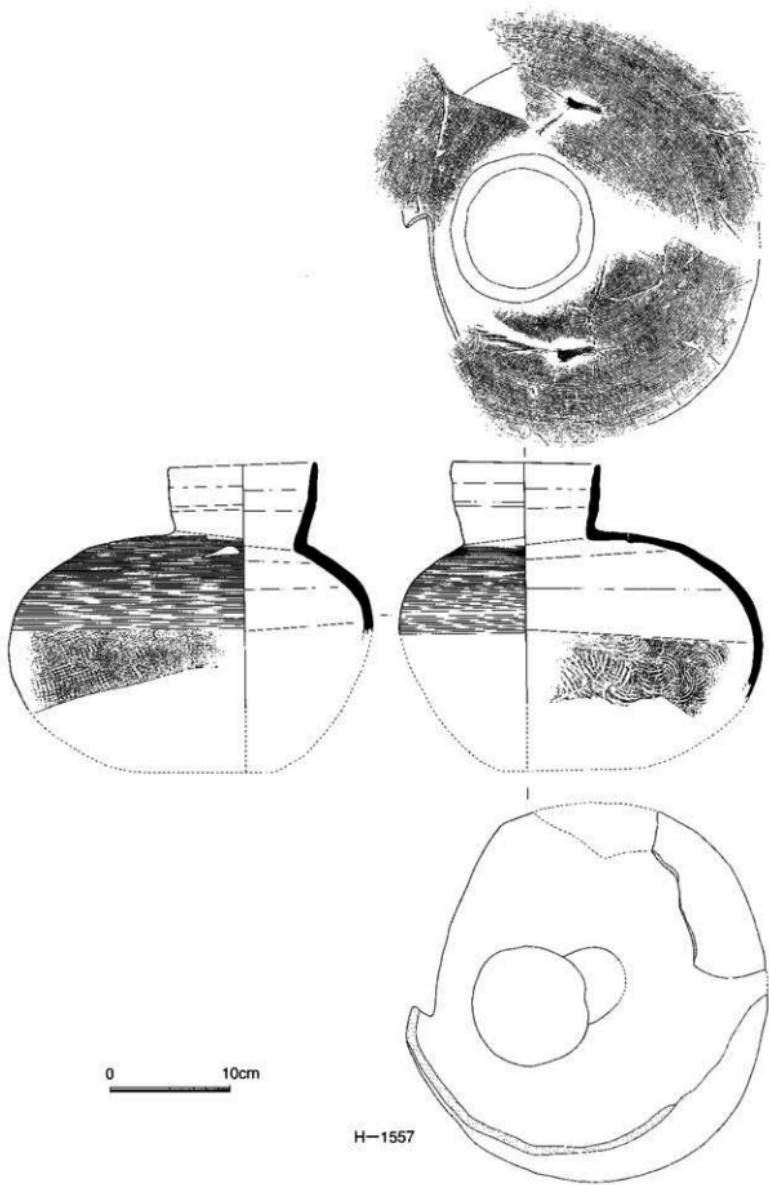
80%残、口径11.0cm、器高4.0cmで口縁端部が強くくびれる、底部には工具痕と思われる条痕が認められる。H-1516は70%残、口径11.8cm、器高4.2センチを測る、底部の切り離しは回転糸切り未調整である。焼成はやや甘く、色調が赤褐色を呈している。H-1518は40%残、傷みが激しく二次焼成か、底部の切り離しは回転糸切りである。H-1519は90%残、ただし歪みが激しい、底部は静止糸切り未調整。H-1520は30%残、底部の切り離しは静止糸切りである。H-1521は50%残であるが、歪みが大きい、底部の切り離しは糸切りである。H-1522は小片、底部調整は糸切りで、やや軟質で焼成が甘い。H-1523は20%残、軟質で黄灰色を呈している、回転ナデが強く施されており凹線状に凹凸が顕著である。H-1524も軟質で灰白色を呈している、口縁端部はくびれる、底部には回転糸切り痕が残る。H-1525は30%残、底部はヘラ切り→ナデか、底部に太い沈線状のものが見られる。H-1526は30%残、やや歪む、底部調整は静止糸切りか。H-1527は底部片で底部調整は静止糸切り、底部の周辺をヘラケズリする、焼成は不良で褐灰色を呈している。H-1528は40%残、底部は糸切り→ナデ、外面に重ね焼き痕と思われる変色が見られる。H-1529にも同じような重ね焼きの変色が見られる、底部調整は回転糸切りで内面には不定方向の(仕上げ)ナデが見られる。H-1530は大型の塊B片である。

H-1531は無高台の皿(皿A・C)である。H-1531は40%残、(復)口径9.4cm、器高2.4cmの小皿で外面と口縁端部に被灰している、二次焼成か。H-1532は30%残で歪みあり、底部は半底で回転糸切りである。H-1533は内外面に重ね焼き痕と思われる変色が見られる、底部の切り離しは回転糸切りである。H-1534は40%残、底部の切り離しは回転糸切りである、若干軟質で暗茶色を呈している。

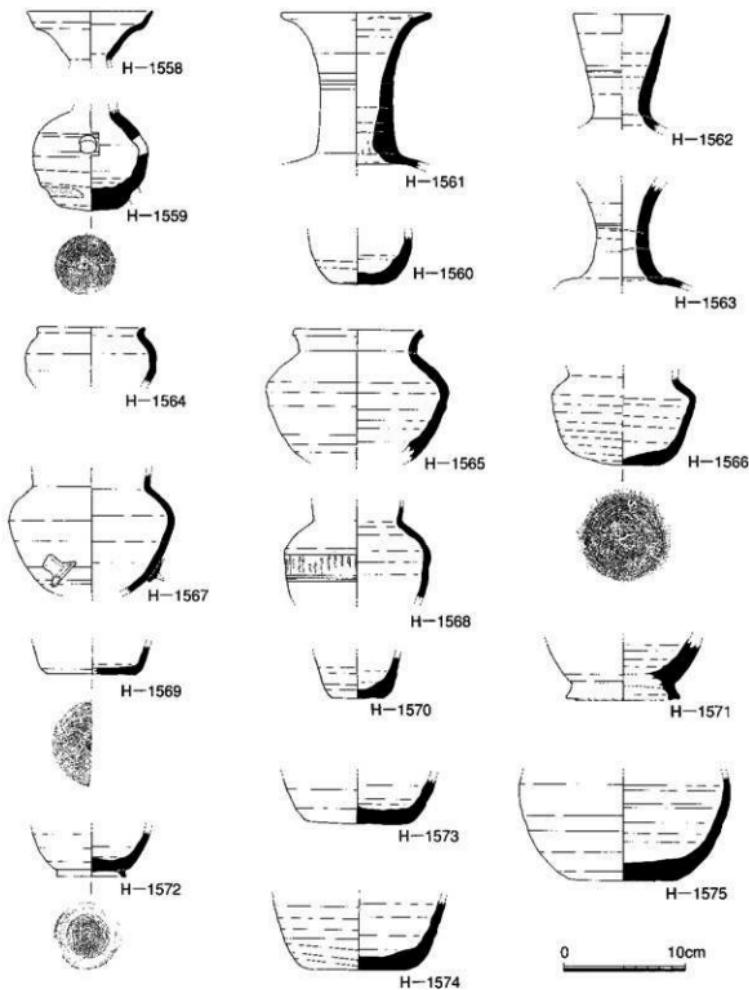
H-1536~1540は高台付きの皿(皿B・D)である。H-1536は50%残、口径20.0cm、器高3.4cmを測り底部の切り離しは糸切り、重ね焼き痕と思われる変色が認められる、全体的にやや軟質で歪みがある。H-1537は50%残、口径22.4cm、器高2.9cmの大型皿で、内面に重ね焼きと思われる円形の変色(被灰の有無)が認められる。H-1538は30%残、やや軟質で黄褐色を呈している、底部調整は糸切り→ナデで、体部下半(腰)部分はケズリが認められる。H-1539は80%残、口径19.0cm、器高3.5cmを測り、内面に重ね焼きと思われる円形の変色が見られる、底部調整は風化が激しく不明瞭(ナデか)、やや軟質で灰黄色を呈している。H-1540は30%残、内面に重ね焼き痕と思われる変色有り、底部調整はナデ、焼成は行く非還元で赤褐色を呈している。

H-1541~1548は高坏、又はその他の脚類である。H-1541は高坏Bの坏部片で火膨れが激しい、内面に窓壁片が付着し、被釉している。H-1542・1543は脚→坏部の高坏片である、H-1543は二方向二段透かしで上段は切り込み、この切り込みが下段まで続き下段のみ方形の透かしを切り出している。H-1544は底脚の坏(塊)で歪みと火膨れが認められる。H-1545は脚部、脚の50%残であるが残存部分に透かしは無し、内面に被灰している。H-1547は脚か、全体にカキ目が施されているが小片のため詳細は不明である。H-1548は脚類と思われるが天井部(図上)に焼成後の穿孔、又は剥離が認められる、ただし二次焼成の痕跡はなく、軟質で茶褐色を呈している。

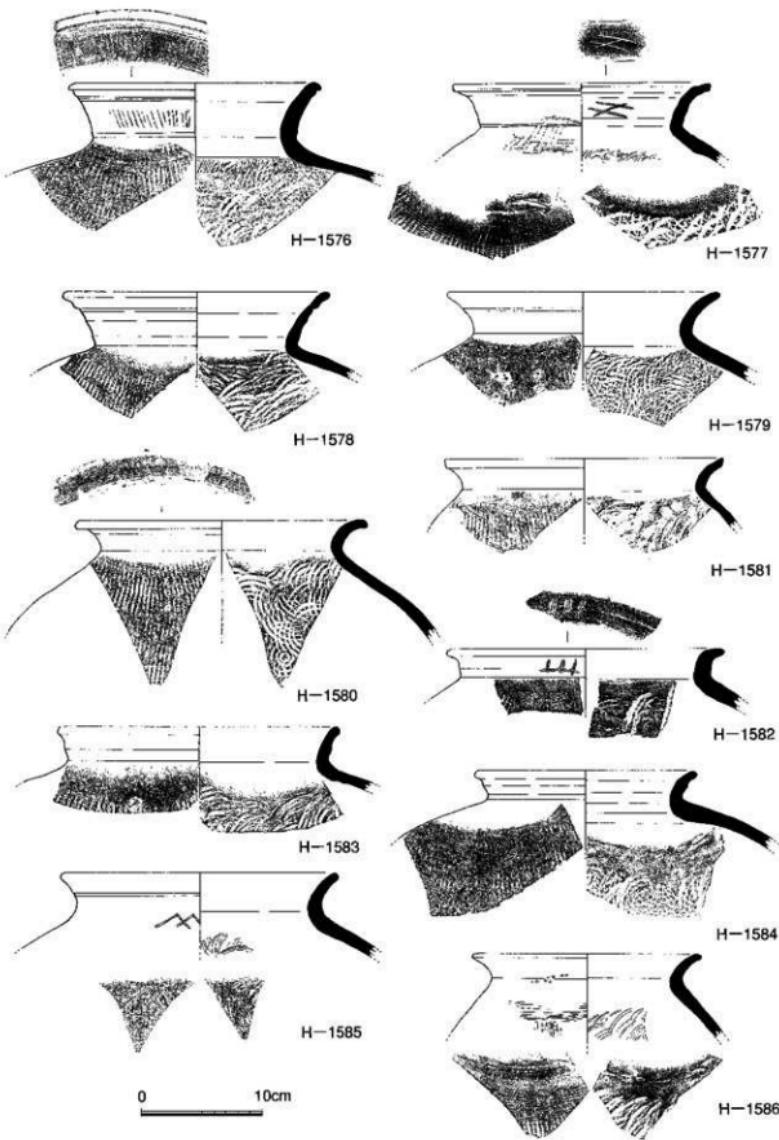
H-1549・1550は横瓶で何れも細片である。H-1549は内外面タタキ調整で、口縁部は短い。H-1550も体部の内外面はタタキ調整であるが、口縁端部は面を持っている。



第180図 H区 灰原上層出土遺物⑨



第181図 H区 灰原上層出土遺物⑩



第182図 H区 灰原上層出土遺物①

H-1551・1552は捏鉢（鉢D）である。H-1551は薄手で口縁端部は屈曲して外反する、内面に被灰している。H-1552は底部片で切り離しの糸切り痕が見え、またこの底部に灰が被っている。

H-1553～1556は鉢・塊類である。H-1553は口縁が20%ほど残、体部が強く内湾しており端部はやや外反ぎみである、(復) 口径は16.7cmを測る。H-1554は体部が深くほぼ直線的に伸びている、脚付塊か、微細片のため詳細は不明。H-1555・1556は小片のため全形の詳細は不明、傾きがやや強いので鉢として実測したが脚の可能性も高い、内外面はタタキ調整である。

H-1557は平瓶である。大型品で口径12.1cm、(復) 器高25.3cmを測る、退化した把手を二つ付し、体部はタタキ調整で肩部にカキ目を施す。体部上部（口縁の横）に閉塞痕と思われる楕円状の痕跡が確認出来る。

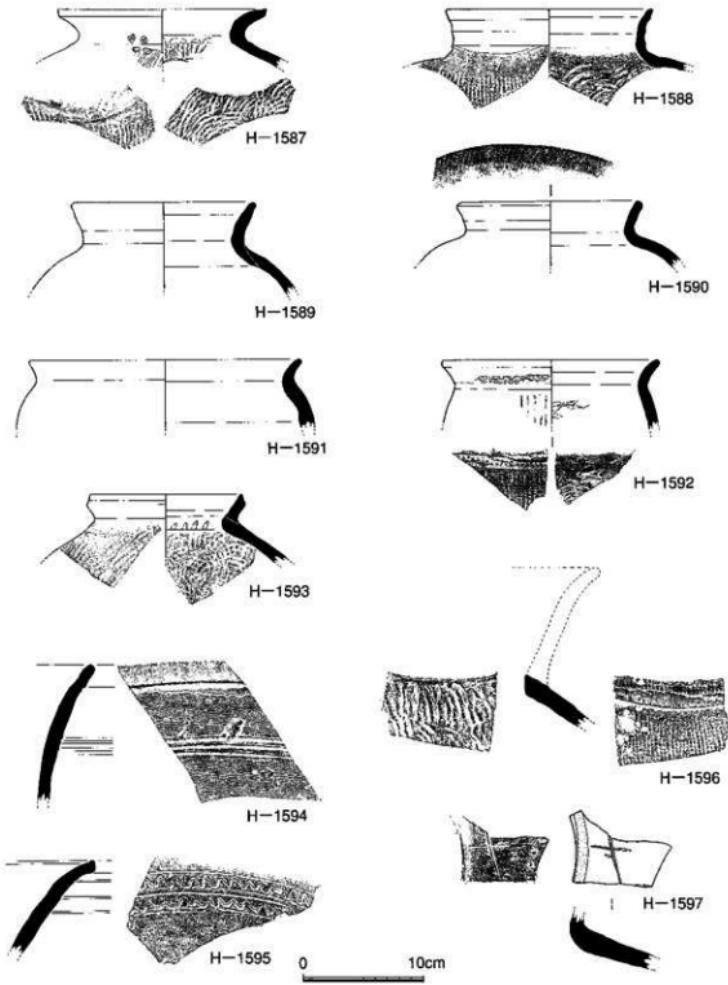
H-1558～1560は甌である。H-1558は口縁部の小片で、H-1559は体部片である。H-1559は底部付近に別の須恵器と接していた剥離痕があり、その上下で変色・被灰の状況が異なる、重ね焼きの痕跡であろう。底部の調整はヘラケズリであるがヘラ記号も記されている。H-1560は甌、又は壺の底部と思われるが、小片のため詳細は不明である。

H-1561～1563は長頸壺（壺K）である。H-1561は頸部で内外面に部分的に被灰する、口縁端部内面に（重ね焼き痕と思われる）別須恵器片の剥離痕がある。H-1562・1563も頸部を中心とした破片で共に内外面で部分的に灰が被っている。

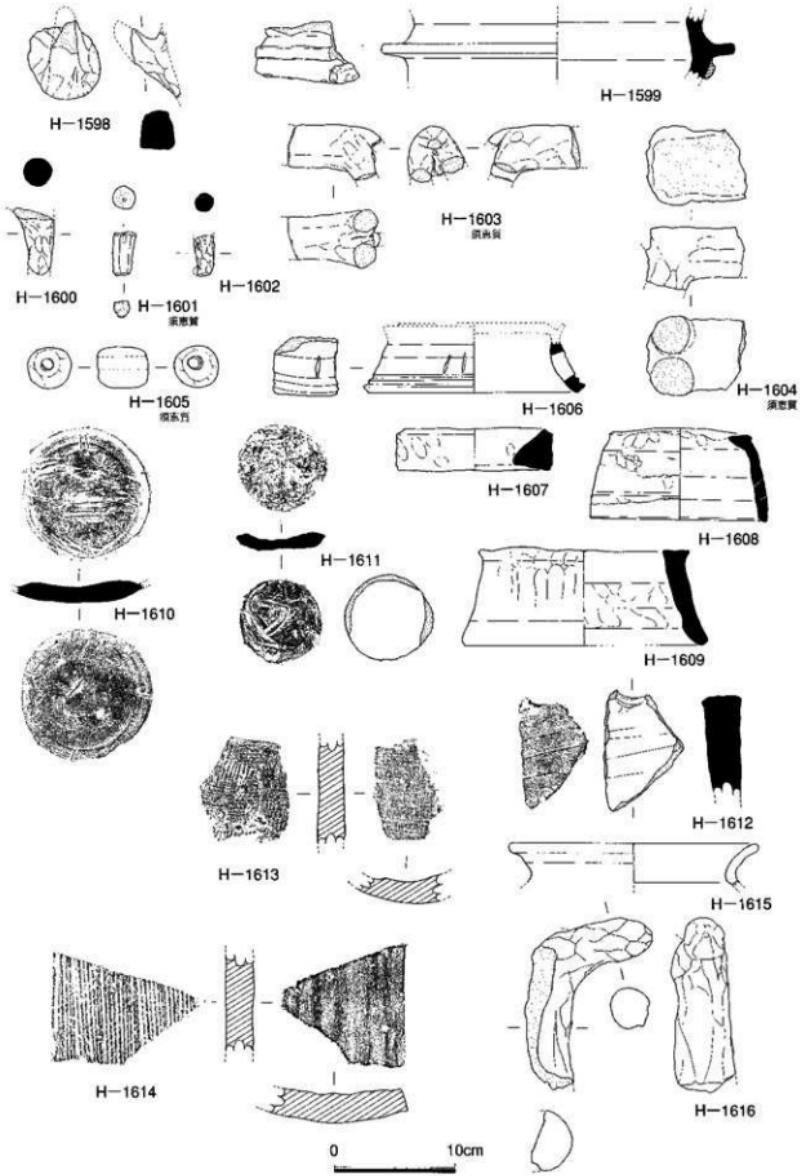
H-1564～1568は壺（壺B・C）である。H-1564は小型の短頸壺で肩部と口縁内面に被灰している。H-1565は短頸壺（壺B）で口縁端部に面を持つ、30%ほど残で胴部がやや張る、焼成は内外面で異なり、外面は普通の灰色、内面はやや焼成が甘く黄褐色を呈している。H-1566は体部片で頸径9.0cm、底径3.7cmを測る、底部の調整はヘラケズリで底部外面にヘラ記号を施している。H-1567は体部片で肩部と底部内面に灰を被っている、体部下半に坏H身の細片が溶着している。H-1568は細片で胴部に列点文を施している。

H-1569～1575は壺の底部、何れも細片で全形は不明である。H-1569は無高台で体部は直線的に伸びる、底部の調整は回転糸切りである。H-1570は小型の壺で底径は4.2cmを測る、底部の調整はケズリ→ナデ？。H-1571は高台付きの底部で厚手である。H-1572は高台径5.8cmを測り、体部はやや丸みを帯びる、底部の調整は静止糸切り→ナデであるが、中心部分は円弧状の沈線が施されており、その周辺のみをナデ（円弧状沈線内は糸切り痕が残る）ている。H-1573は無高台の底部で底径は8.6cmを測る。H-1574の底径は9.2cmである。H-1575は底部～胴部にかけての破片で厚手の壺である、底部外面に厚く黄灰を被っている。

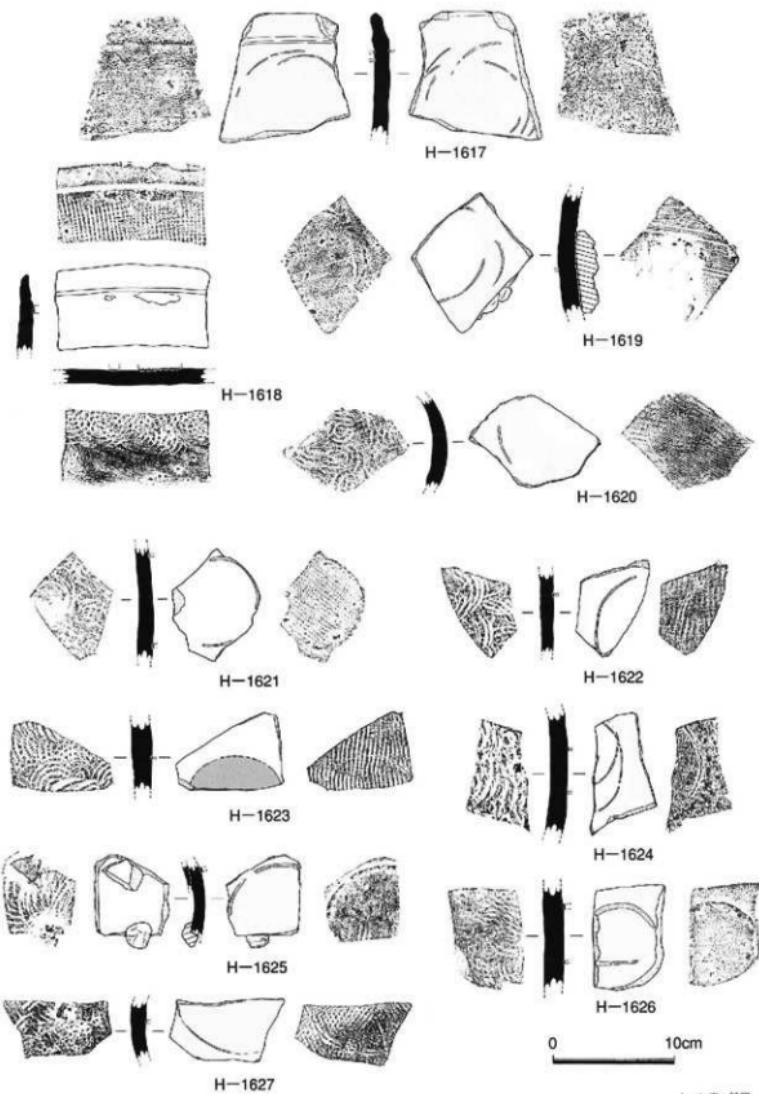
H-1576～1597は甌である。甌片の出土は多量に上るが全形を示す資料が少ないため、実測に際しては口縁部を中心に選択した、実測したものも何れも細片である。H-1576は甌A、体部の調整はタタキで、頸部にもタタキ痕が見られる。H-1577は甌A、内外面はタタキ調整で、頸部内面にヘラ記号を記している。H-1578は内外面タタキ調整で、肩部と頸部内面に灰を被っている。H-1579は甌C、内外面はタタキ調整で、肩部と頸部内面に灰を被る。H-1582も内外面タタキ調整であるが被灰のため調整不明瞭、頸部外面にヘラ記号を記してある。H-1585は肩部に二つの山形のヘラ記号を記



第183図 H区 灰原上層出土遺物②

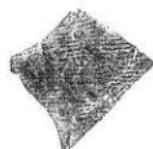


第184図 H区 灰原上層出土遺物⑬

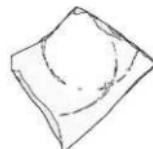
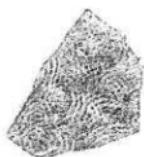


第185図 H区 灰原上層出土遺物⑭

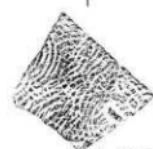
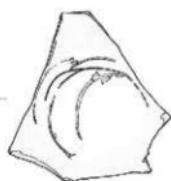
トーン淡：被灰
トーン濃：黄色



H-1628



H-1629

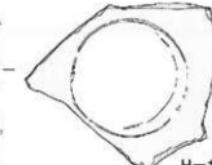


H-1630



H-1631

H-1634

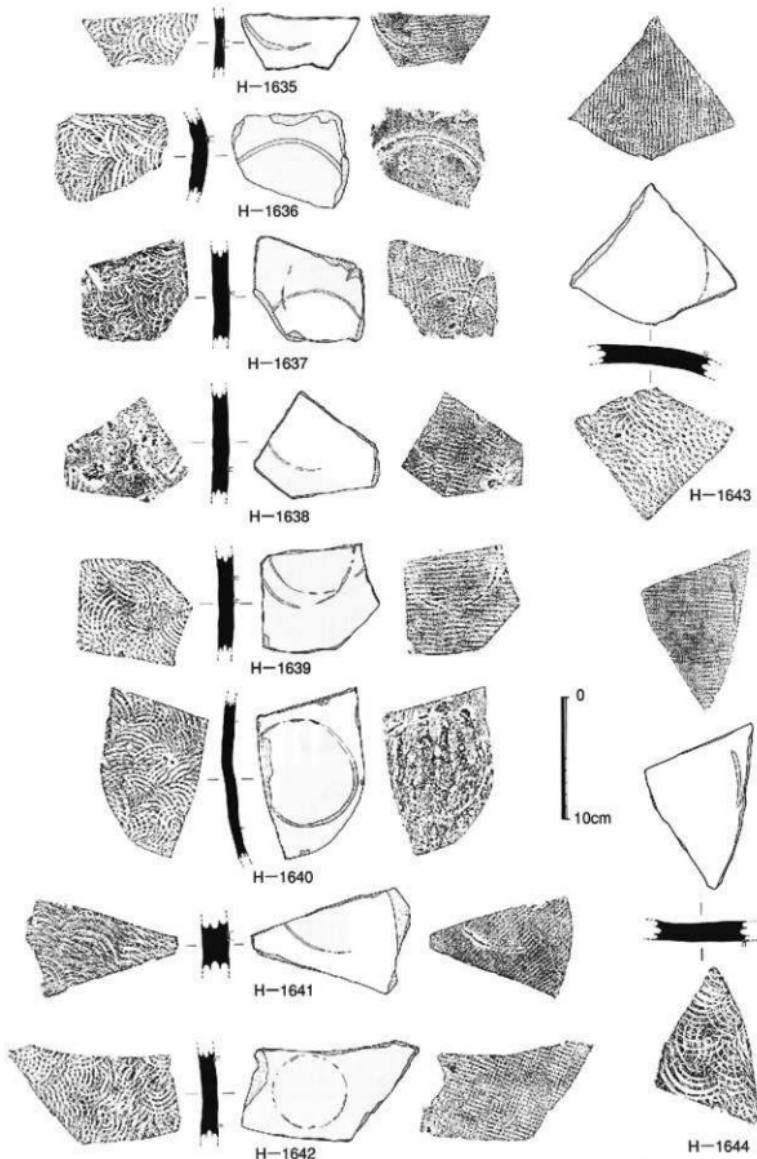


H-1632



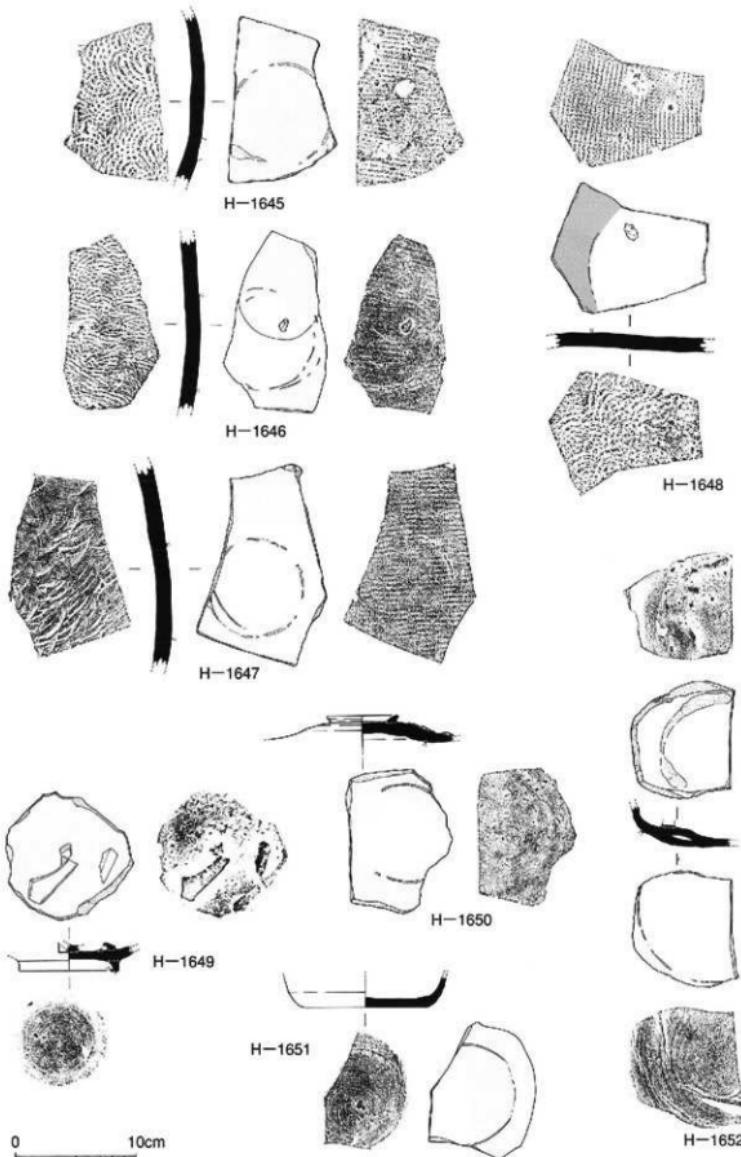
第186図 H区 灰原上層出土遺物⑮

トーン消: 桃灰

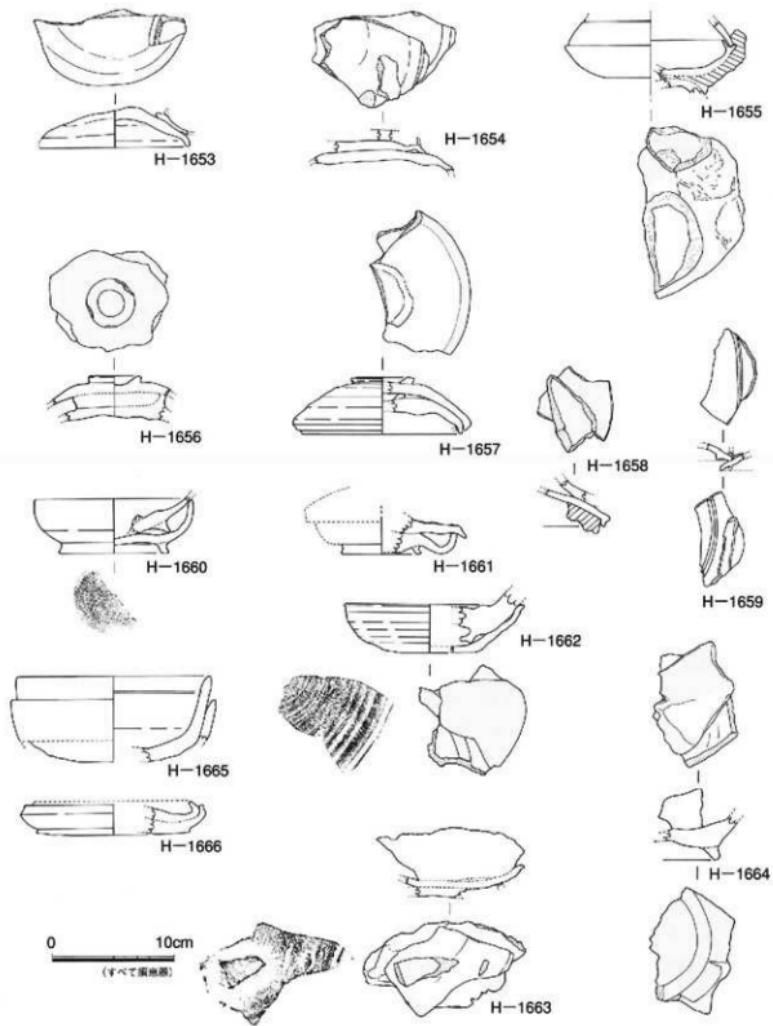


第187図 H区 灰原上層出土遺物⑯

トーン法：被灰

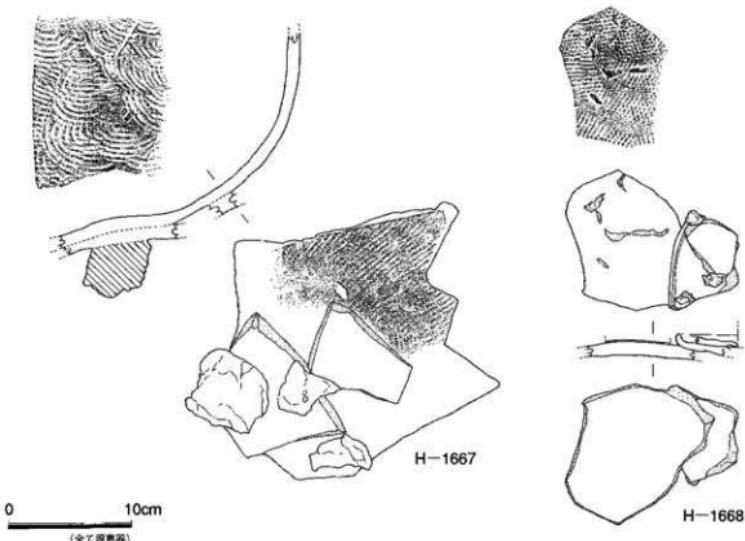


第188図 H区 灰原上層出土遺物⑯



第189図 H区 灰原上層出土遺物⑯

トーン塗：黒灰



第190図 H区 灰原上層出土遺物⑩

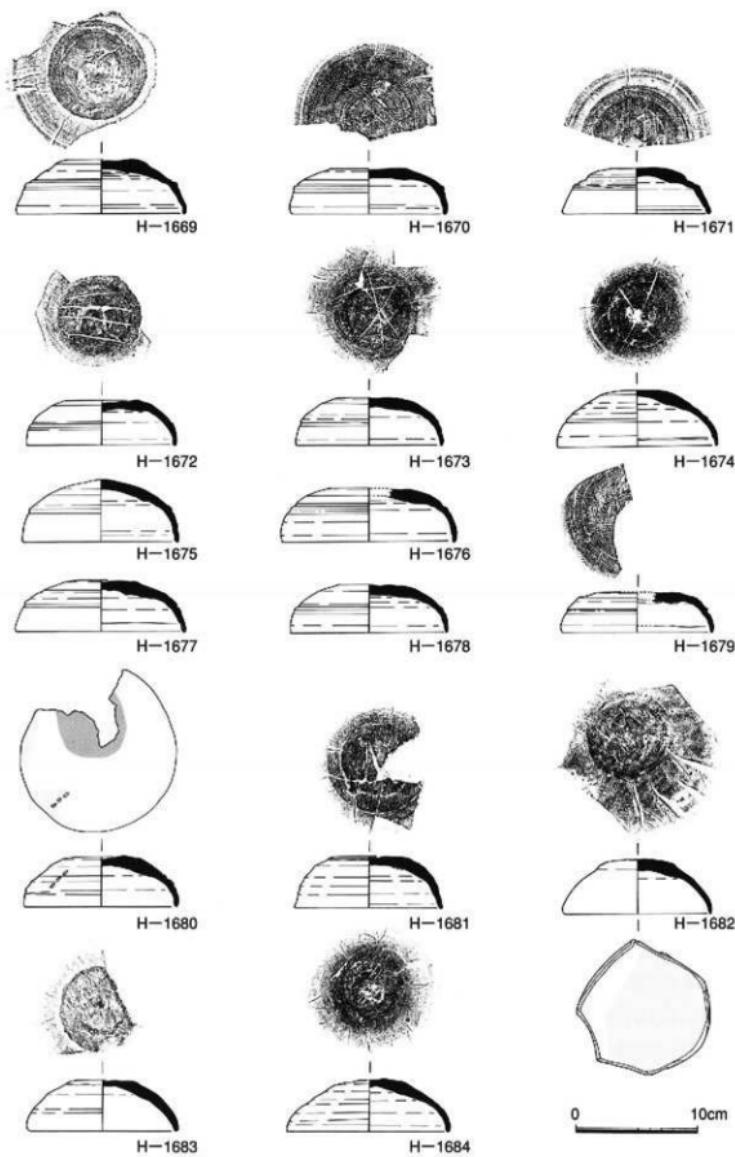
してある。H-1586は甕C、体部の内外面はタタキ調整で、肩部と口縁内面に被灰する。H-1587は甕Cで、頸部に竹管や工具による刺突文が見られる。H-1588は肩部外面にカキ目があり、H-1589は頸部と体部との接合痕が明瞭に観察出来る。H-1590は甕C、肩部と頸部内面に厚く灰が被り調整は不明瞭、体部内面はナデ、また頸部外面にタタキ状の痕跡がある。H-1591・1592は甕D、H-1591は微細片で内外面共にナデ調整である。H-1592は体部がタタキ調整で、頸部にも方格のタタキ痕が見られる。H-1593は頸部・肩片、体部はタタキ調整で口縁端部はやや内湾し尖る、頸部が剥離しかけしており接合痕跡が明瞭である。H-1594～1597は甕A、H-1596は頸部の剥離痕が擬口縁状になっており、H-1597は肩部にヘラ記号を施している。

H-1598～1612は灰原上層から出土したその他の須恵器である。H-1598は把手片である。H-1599は子持壺の突帶部分か、微細片でやや歪んでいる様子なので詳細は不明。

H-1600～1604は須恵質の十馬片である。特にH-1600～1602は脚片と思われるが微細片のため詳細は不明。H-1601には2mmの小孔が穿かれているが、これは脚底まで続いていない、脚と体部とを接合するときの痕跡であろう。H-1603・1604は十馬の体部片、残存部分から裸馬と思われる。

H-1605は十輪の完形品である、長さ4.2cm、幅3.4cm、孔径1.0cmを測る、焼成が甘く一見、上師質の黄褐色を呈しているが、軟質の須恵質であろう。

H-1606は円面観である。微細片な為詳細は不明であるが、(復)脚径17.0cm、残高4.2cmを測る、透かしは残存部において2つ確認したが切り込み状の穿孔である、この切り込み間は1.2cm間隔であるが、反対方向には3.3cmの間で透かしが無いので、透かし(切り込み)はかなりランダムに施されている。



第191図 H区 灰原中層出土遺物①

トーン淡：被灰
トーン濃：金色

たと考えられる、陸部・海部は（図上では波線で復元したが）共に欠損しているので事實上は不明といわざるを得ない。

H-1607は窓道具か、三角状の断面を呈している、上下の判断も困難である、調整はナデ・オサエなどが施されており、粗雑な作りで凹凸が激しい。H-1608は焼台の小片である、回転ナデで整えられているが、作りが雑でオサエ痕や粘土組痕が残る。H-1609は焼台片で、調整は内外面ともナデ・オサエで作りが極めて雑である。

H-1610・1611は円盤状の須恵器片で、H-1611は切り抜き円盤痕であろうか。

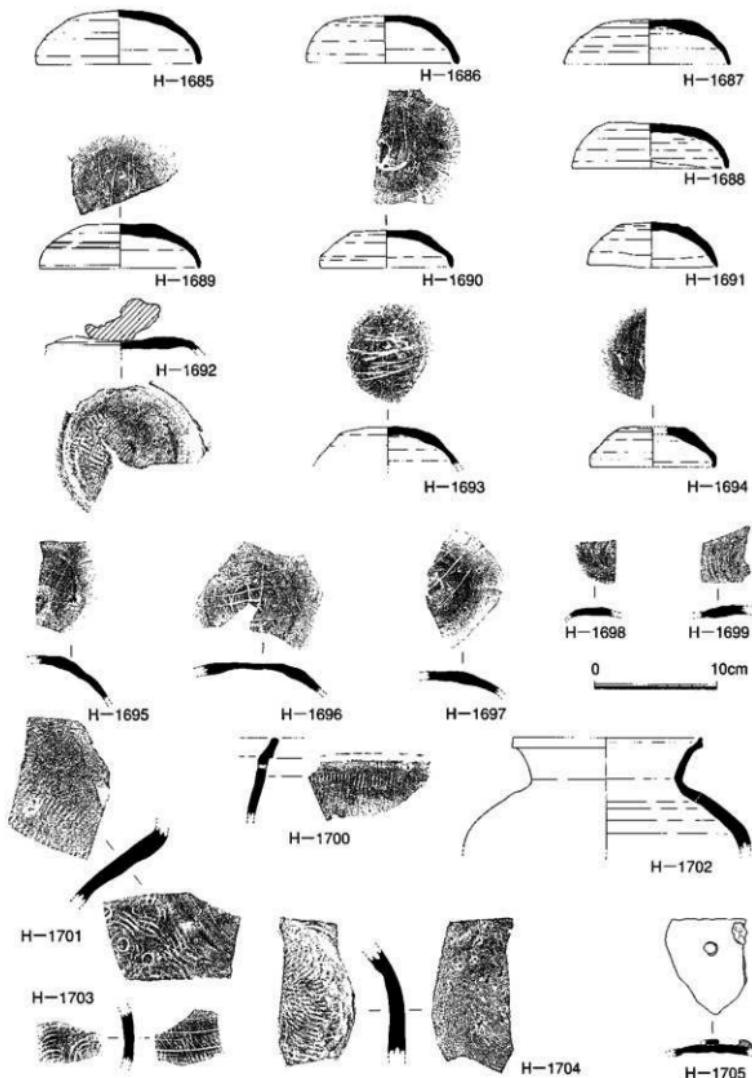
H-1612は器種不明、受け口状の半円形があり、外面？ケズリ、内面？はナデで整えられている。

H-1613・1614は平瓦である。H-1613は凸面に平行タタキ、凹面に布目が残る。H-1614は焼成が甘く非還元炎焼成で黄褐色を呈している、端部は極めて平坦で、調整は凸面が繩目、凹面はケズリ→ナデか。

H-1615・1616は灰原上層から出土した上師器で、H-1615が甕片、H-1616が上製支脚片で何れも細片である。

H-1617～1652は須恵器片を転用した置台である。甕片を転用したもの（H-1617～1648）が最も多いが、蓋（H-1650）や环（H-1651・1652）などにも二次焼成や別の須恵器剥離痕があるので、置台に転用していると考えられる。転用の痕跡は概ね円形の剥離痕と円形の変色であり、中には複数回転用したような痕跡も多い（H-1628・1633・1639）、またこの円形の痕跡は径が8～9cm前後のものがほとんどである。

H-1653～1668は溶着した須恵器の資料である。本書では須恵器は断面黒巻りを原則としているが、溶着状況を示すため断面白抜きにしてある。H-1653は小型の环日の肩部分に环Hの身が溶着したものである。H-1654は环Hの蓋と身とが溶着したものである。H-1655は环Hの蓋と身とがセット関係に溶着しており、かつ、身の外面に壺？と思われる別の須恵器の溶着がある、灰・窓壁等の降りものは身側から蓋側に向かって垂れており、焼成時は蓋・身とが逆であったと考えられる。H-1656は輪状のつまみを付す蓋と高台との溶着資料である、高台の内面側には被灰が無いが、蓋外側には黄灰を被っている。H-1657は蓋同士の溶着資料である、また、図外側の蓋外側には円弧状に被灰した部分があり、この部分にも重ね焼きをしていたと考えらえる。H-1658は蓋に高环が溶着したものか、蓋内面には窓壁が付着し、蓋外側には黄灰を被っている。H-1659はかえりのある蓋が二個体溶着したもので、H-1660は环Fが二個体分重なって溶着している。H-1661は环下の蓋と身とがセット関係にあって溶着したものであるが、大きく歪んでしまっている。H-1662は塊Aの内面に高台部分が溶着している、高台部分は火勝れもあってか極めて厚手である、蓋か、外面に灰を被っている。H-1663は石と須恵器片とが溶着した資料である、須恵器片は塊Aか。H-1664は高台片に石が溶着した資料で激しい被灰が見られる。H-1665は塊Bが二重に重なって溶着しているもので、下のものは擬円錐状に欠損し、平坦に剥離している、外面に厚く黄灰が被灰する。H-1666は器種不明の重ね焼き資料、底部が平坦でケズっているので図のように実測したが天地が逆なのかもしれない。H-1667は大甕の溶着資料で、甕底部外側に別の須恵器片と窓壁とが付着している。H-1668は甕片と蓋・环？



第192図 H区 灰原中層出土遺物②

とが溶着したもの、不自然な溶着只合であり何らかの転用の結果であろう。

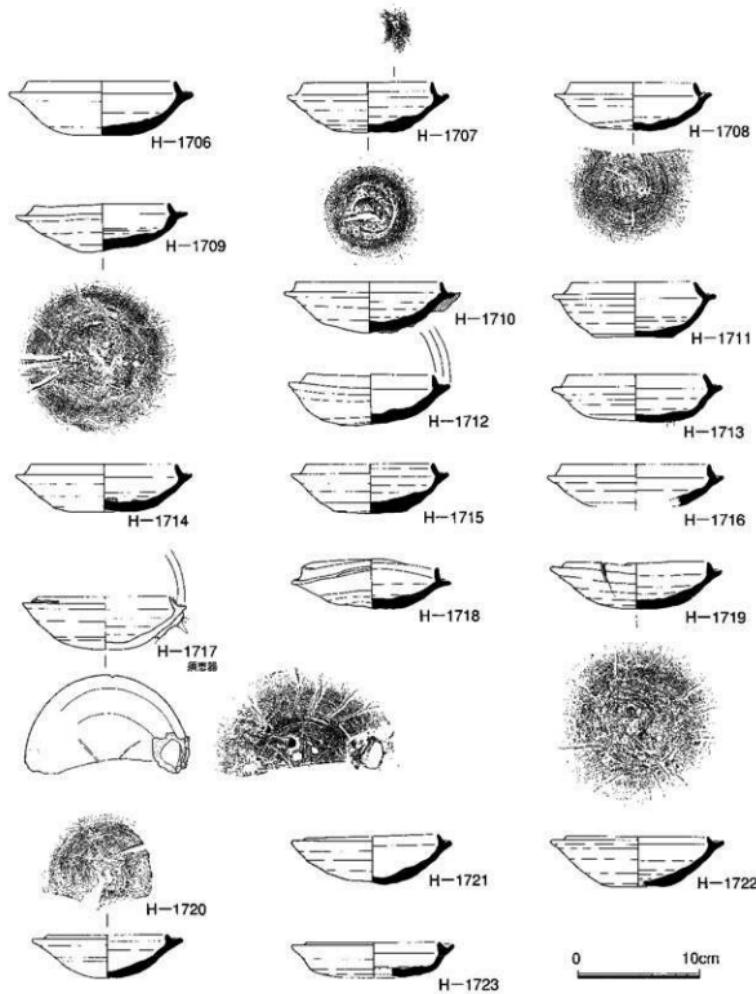
H-1669～1795はH区の灰原中層出土遺物である。H-1669～1699が坏Hの蓋である。H-1669は40%残、天井は平坦でT具による条痕が残る。H-1670は40%残、天井調整は全面的にケズリを施しており、ヘラ記号を記している。H-1671は50%残、天井部に工具によると思われる条痕が残る。H-1672は50%残、歪みが認められる、天井調整はケズリでヘラ記号を施す。H-1673・1674も同じく天井にヘラ記号を記している。H-1675は70%残であるが歪みがある。H-1676は40%残、焼成が日く暗黄褐色を呈している。H-1677は60%残で（復）口径は13.8cm、器高4.2cmを測る。H-1679は30%残、天井部にヘラ記号を記している。H-1680は70%残、口径12.5cm、器高4.1cmを測る、天井部に変色した箇所があり、また天井中心部も変色がある。H-1681は50%残、天井部の調整は周辺ヘラケズリで頂部にはヘラ記号が施されている。H-1682は40%残、天井部はヘラ切り後、T具によると思われる条痕とヘラ記号を施している。H-1683は40%残、天井部はヘラ切り後に工具によると思われる条痕が施されている、焼成不良のためやや軟質で灰白色を呈する。H-1684は90%残、口径13.2cm、器高4.3cmを測る、体部の回転ナデ調整が明瞭で、天井部の調整がナデ、また天井部にT具によると思われる条痕が残る。H-1685は60%残、天井調整はナデで軟質なため黄灰色を呈している。H-1686は90%残、口径12.4cm、器高3.9cmを測る、天井調整はケズリで外側に部分的に被灰する。H-1687は80%残であるがやや歪む、天井部分は切り離し後未調整である。H-1688はほぼ完形、口径12.9cm、器高3.7cmを測り、稜は無段、天井調整はケズリである。H-1689は20%残で、天井にヘラ記号を記している、焼成は非還元で白灰色を呈している。H-1690は30%残、天井部にヘラ記号あり。H-1691はほぼ完形、口径10.7cm、器高3.8cmと小型品で、外側に被灰している。II-1692は天井部のみの破片、円盤状に欠損しており、天井に窓壁が付着する、また内面に格子目状のタタキ痕のようなものが見られる。II-1693は天井片、外側にはヘラ状T具によって多くの線刻が施されている。H-1694は20%残、天井はヘラ切り→周辺ケズリ？でヘラ記号が記されている。H-1695～1698は何れも微細片で復元が不可能である、坏Hと思われるが外側にヘラ記号が記されている。H-1699も坏Hの蓋か、竹管形が施されている。

H-1700は鉢か甌か、微細片で全形が不明である、小孔が穿かれており内外面はタタキ調整である。

H-1701は甌片の体部、H-1702も甌か、微細片で体部の形状は不明。H-1703は内面に同心円文当て具痕が残るもので、外側には列点文が施されている。

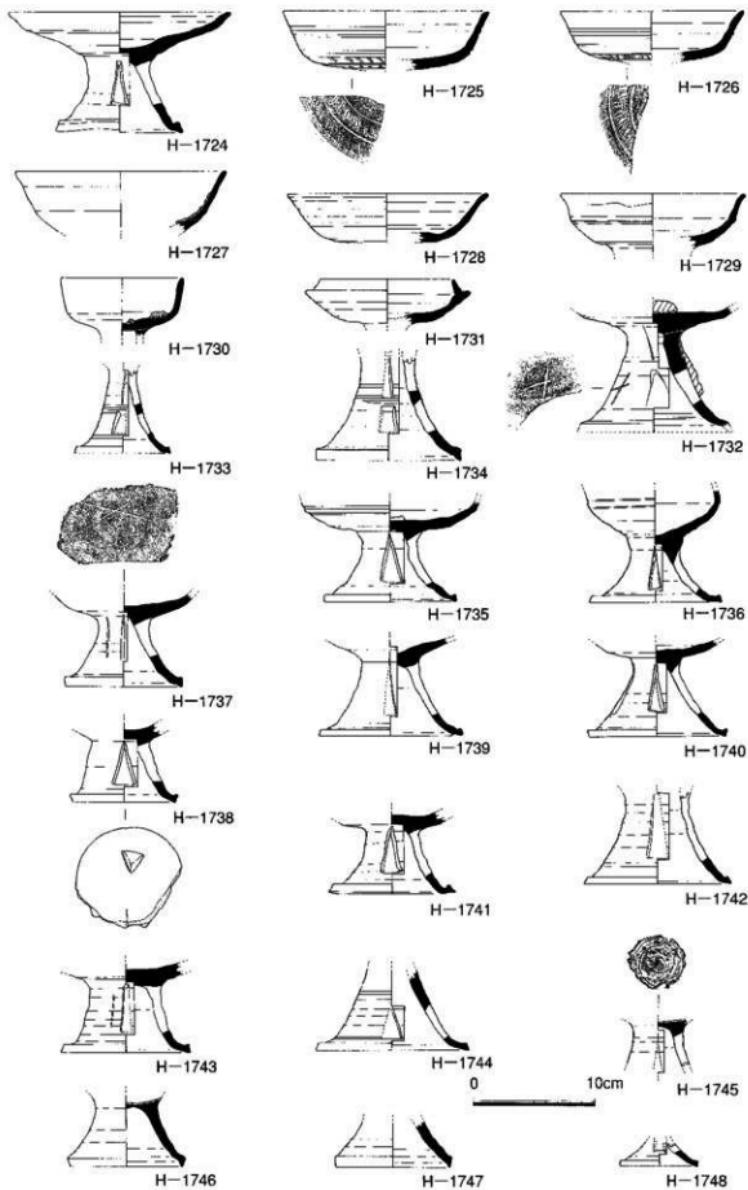
H-1704は提瓶の微細片である、内面は同心円文当て具痕が残り、外側はカキ目を施している。H-1705は器種不明、径1cm程度の小さな浮文を付す。

H-1706～1723は坏Hの身である。H-1706は60%残、内外面に激しい被灰があり二次焼成を受けている。H-1707は80%残、口径10.5cm、器高4.1cmを測る、底部はヘラ起こしと思われる痕があり、その周辺をケズっている。内面は表面の一部が剥離しており、粘土内の胎土を観察することが出来る。H-1708は60%残、底部調整は周辺ヘラケズリで、底部中央に工具によると思われる条痕が残る、受け部の端部を強く屈曲させており、また受け部の接合痕が良く観察することが出来る。II-1709は90%残、口径11.3cm、器高4.0cmを測る、底部はヘラ切り→ナデで若干ケズったような砂粒の移動が見

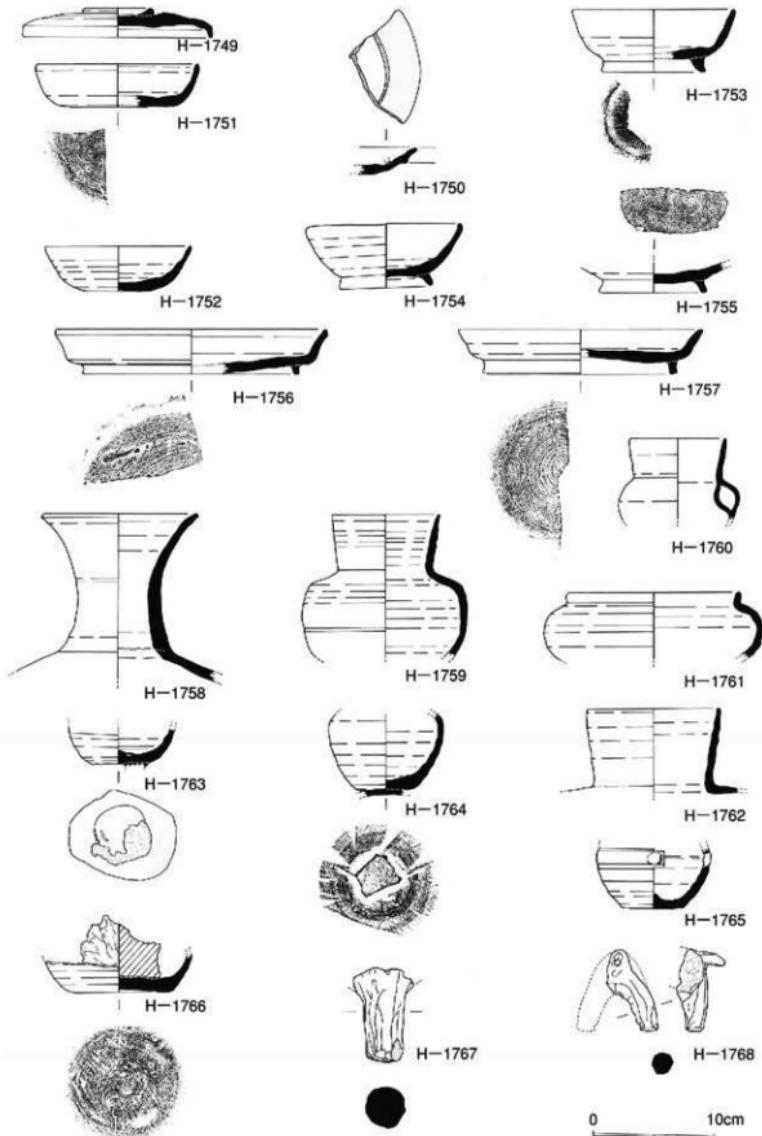


トーン漢：複数

第193図 H区 灰原中層出土遺物③



第194図 H区 灰原中層出土遺物④



第195図 H区 灰原中層出土遺物⑤

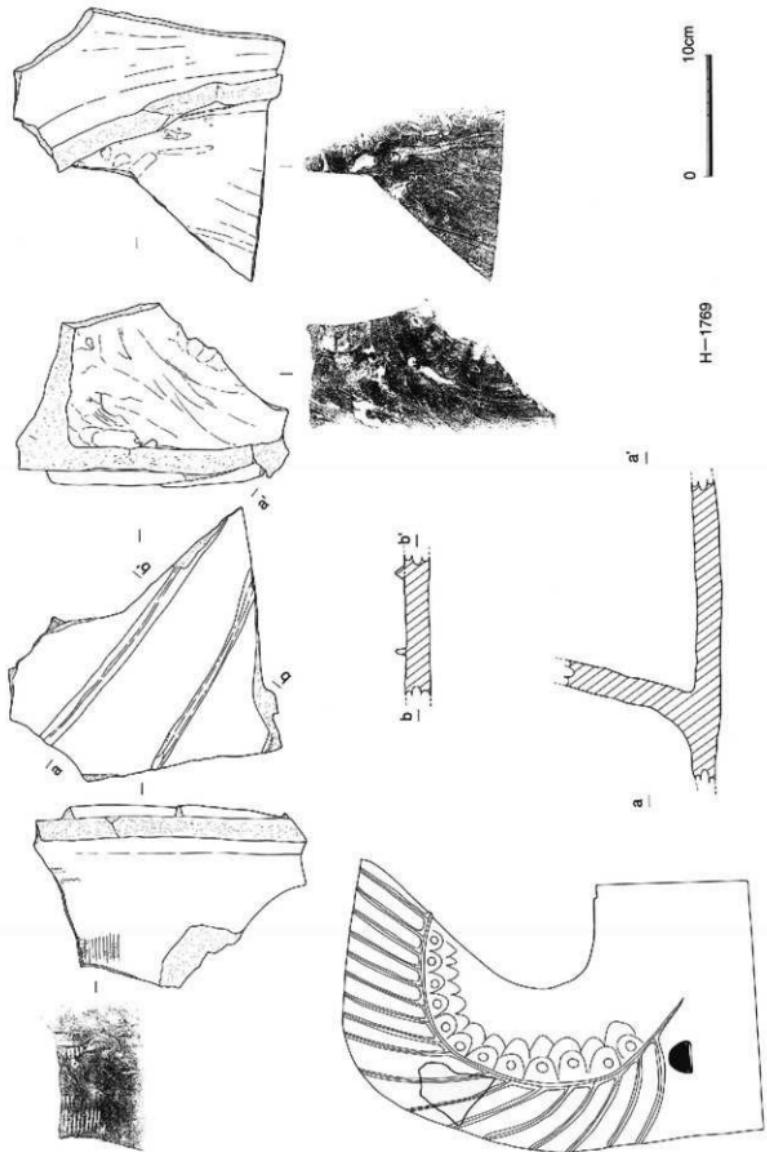
トーン波：被灰

られる。H-1710は50%残、底部調整はナデ、外面に窯壁片が付着している。H-1711は20%残、やや軟質で淡灰色を呈している、底部調整は周辺ケズリで底部中央は未調整である。H-1712は70%残、口径10.6cm、器高4.7cmを測るが歪みが認められる、二次焼成か傷みが強く、外面と受け部に被灰している。H-1713は70%残であるが歪む、外面に被灰している、底部調整はケズリである。H-1714は30%残、全面に二次焼成と思われる傷みと被灰が著しい。H-1715は60%残、歪みがあり外面に被灰する。H-1716は小片、受け部外面と体部内面に被灰する。H-1717は50%残、体部外面に釉を被り、受け部内面にも被灰する、また体部外面に別の坏日身が溶着している。H-1718は90%残だが歪みあり、口径11.2cm、器高3.9cmを測る、底部調整はヘラケズリであるが、底部中央はほとんどケズリが及んでいない。H-1719は完形であるが、ひび割れと歪みが見られる、底部の調整にはナデが施されているが、僅かにケズリ痕もあるので周辺ケズリと思われる。H-1720は40%残、底部内面にヘラ記号を記している。H-1721は80%残、底部調整はヘラ切り→ナデである。H-1722は40%残、外面に被灰する。H-1723は20%残、外面に被灰する。

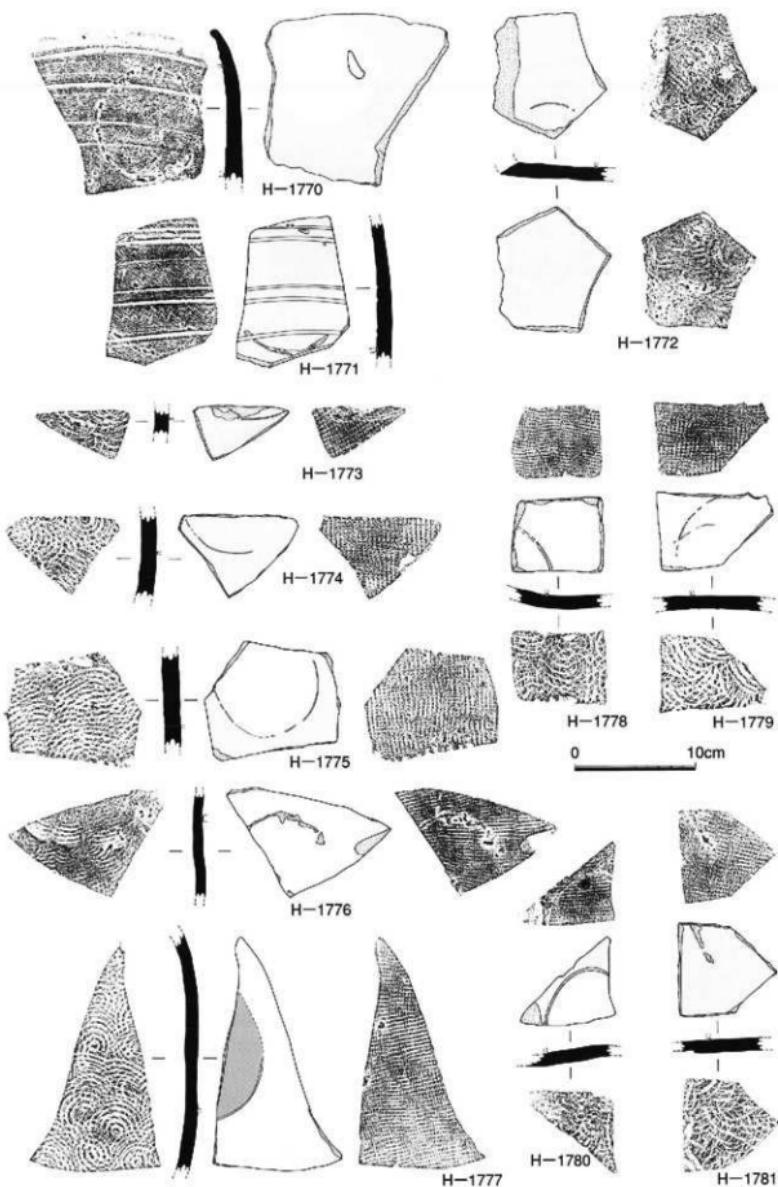
H-1724~1748は高坏、及び脚類である。H-1724は60%残の高坏B、(復)口径18.1cm、器高9.9cmを測る、一段二方向の三角透かしで、坏部内面と脚部外面に灰を被る。H-1725・1726は高坏Bの坏部である、坏底部外面に刺突文を施し、外面には被灰している。H-1727も坏部であるが小片で歪みあり、坏部内面に被灰と窯壁片の付着が見られる。H-1728・1729も高坏Bの坏部片である。H-1730は高坏C、坏部内面に釉が被っており、窯壁の細片も多数付着する。H-1731は高坏Aの坏部で、切り込みが僅かながら確認できる、坏部外面に被灰している。H-1732は脚部、外面に黄灰が厚く堆積しており、傷みも見られる、二次焼成か、透かしは二段二方向で上段は切り込み、下段は三角状?である、脚下半に×印のヘラ記号が記されている、また外面に灰を被る。H-1733は脚片、高坏Cか、二方向二段の透かしを施す。H-1734~1744は脚を中心とする破片で、H-1734は二段二方向?方形?透かしで、四線の途切れ部分がある、H-1735は歪みがあり、内外面に被灰している。H-1736も歪みがある小片。H-1737は坏部内面に×印のヘラ記号がある、透かしは一段二方向の切り込みであるが、もう一本沈線がみられる、切り込みに失敗したものであろうか。H-1738は焼成が甘く、非還元で赤褐色を呈している、透かしは一段二方向で、一方は一角、もう一方は切り込みである。H-1739も軟質で黄褐色を呈している。H-1740は底径11.4cmを測る、一段三方向三角透かしである。H-1741は脚部のみ完形、底径10.4cm、残高6.7cmを測る、一段二方向三角透かしである。H-1743は一段二方向方形?透かしであるが、それぞれの透かしの横に切り込みが入っている。H-1744は細片で内面に灰を被る。H-1745は脚の小片で、坏部との接合面に円形の痕跡が明瞭である。H-1746は脚部の完形であるが透かしはない。H-1748は脚の小片、底径6.3cmの小型品で透かしが二方向より入る、低脚坏であろうか。

H-1749・1750は蓋である。H-1749は60%残の坏Fの蓋、輪状つまみで天井調整はヘラケズリ、また外面に灰を被る、H-1750はかえりのある蓋片で大きく歪み凹む、外面に別の須恵器剥離痕があるが一時焼成時(重ね焼き)か二次焼成時(転用)のものかは不明、被灰はない。

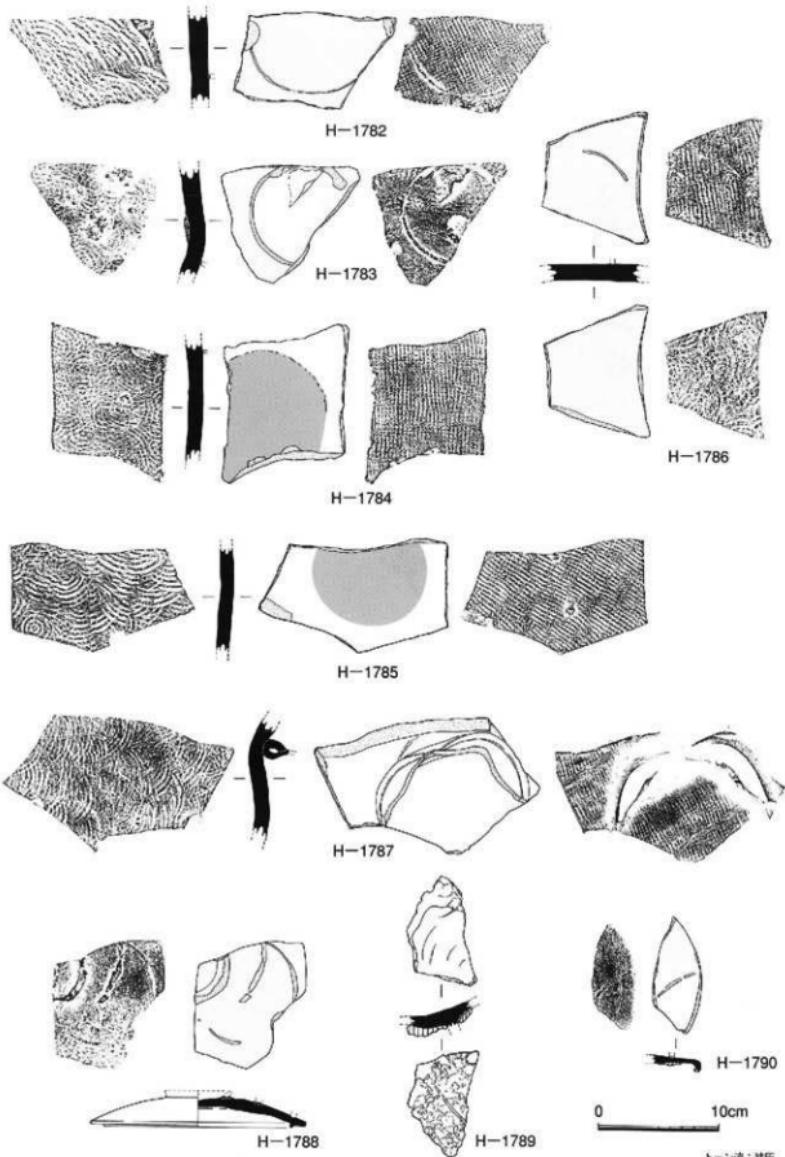
H-1751・1752は無高台の塊である。H-1751は塊の破片である、底部の切り離しは糸切りで口縁



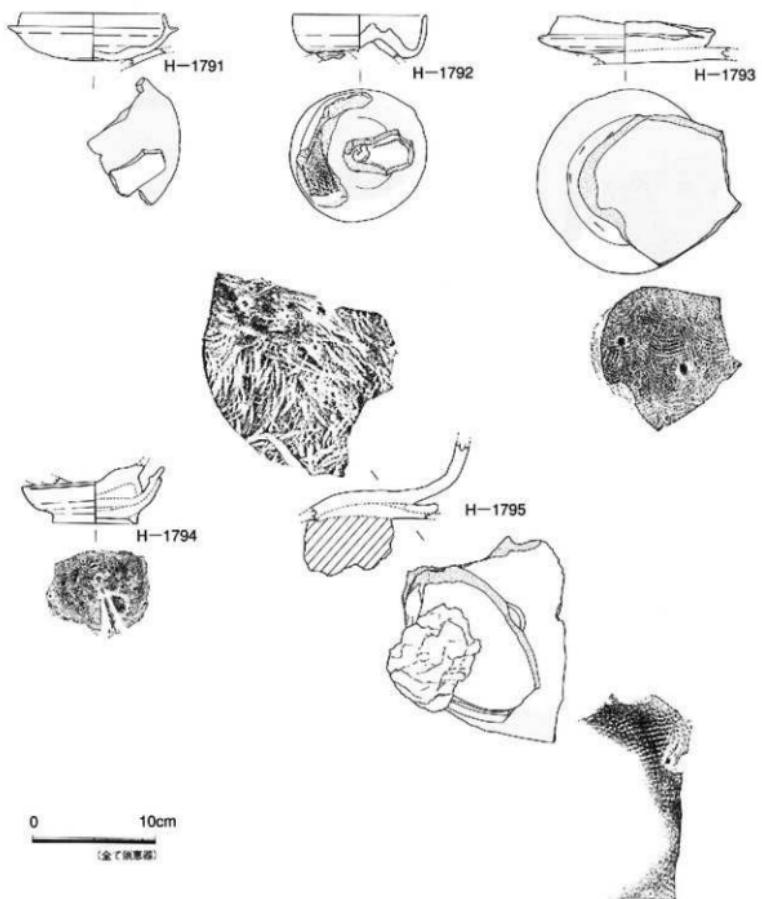
第196図 H区 灰原中層出土遺物⑥



第197図 H区 灰原中層出土遺物⑦

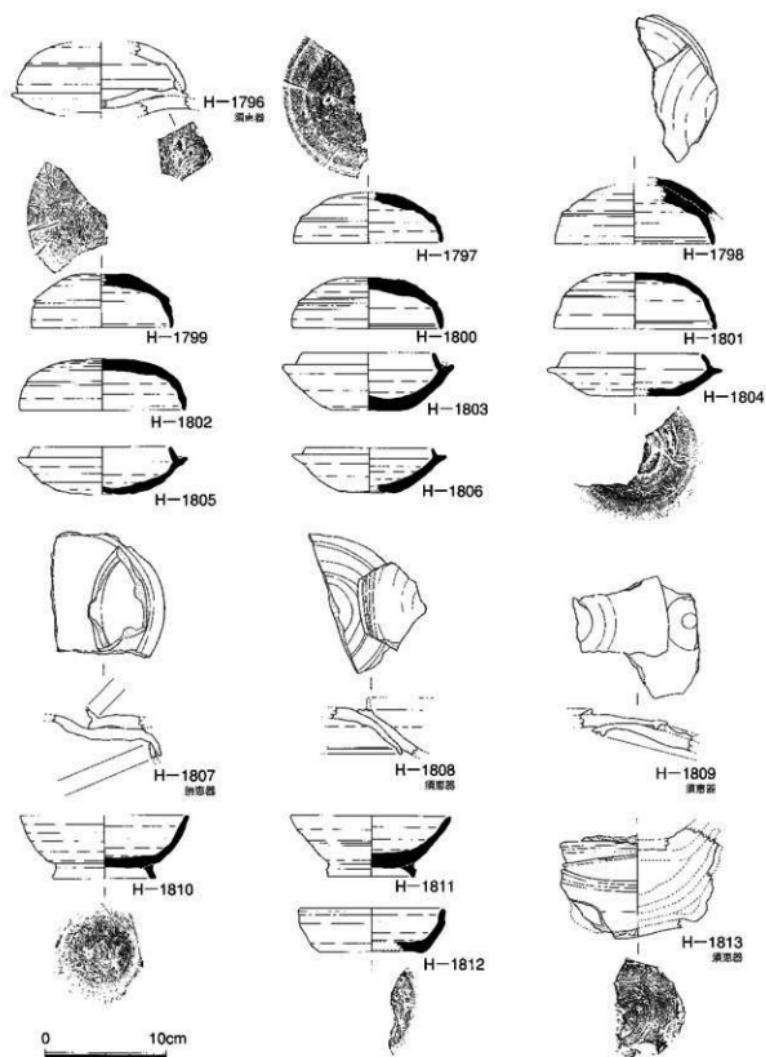


第198図 H区 灰原中層出土遺物⑧



トーン淡：黒灰

第199図 H区 灰原中層出土遺物⑨



第200図 H区 南壁出土遺物①

部のくびれは無い。H-1752は40%残、器形的にはいわゆる金属器の金鉢に類似している、(復)口径12.0cm。器高3.7cmで底部調整はナデである。

H-1753～1755は坏Dである。H-1753は30%残、底部の切り離しは静止糸切りで、体部外面に重ね焼き痕と思われる変色が見られる。H-1754は80%残で口径13.2cm、器高5.3cmを測る。H-1755は高台片、底部調整はナデで内面(見込み部分)にヘラ記号を記している。

H-1756・1757は皿りである。H-1756は20%残、口縁端部に面を持つ、底部調整はナデか。H-1757は50%残、内面にオサエにより粘土痕があり、底部の切り離しは回転糸切りである。

H-1758～1765は壺、及び甌である。H-1758は長頸壺(壺K)の口縁～頸部である。口縁内面に別の須恵器片の付着が見られる。H-1759は直口壺(壺C)である、内外面に被灰している。H-1760も直口壺(壺C)の細片で火彫れが見られる、外面に被灰する。H-1761は短頸壺(壺B)の破片である。H-1762は直口壺(壺C)で(復)口径11.0cmを測る。H-1763・1764は壺、若しくは甌の底部である、底面に重ね焼き痕と思われる別の須恵器片の剥離痕が残る。H-1765は甌で底部の調整はケズリ、底部内面にはロクロ目と思われる粘土の盛り上がりが顯著である。

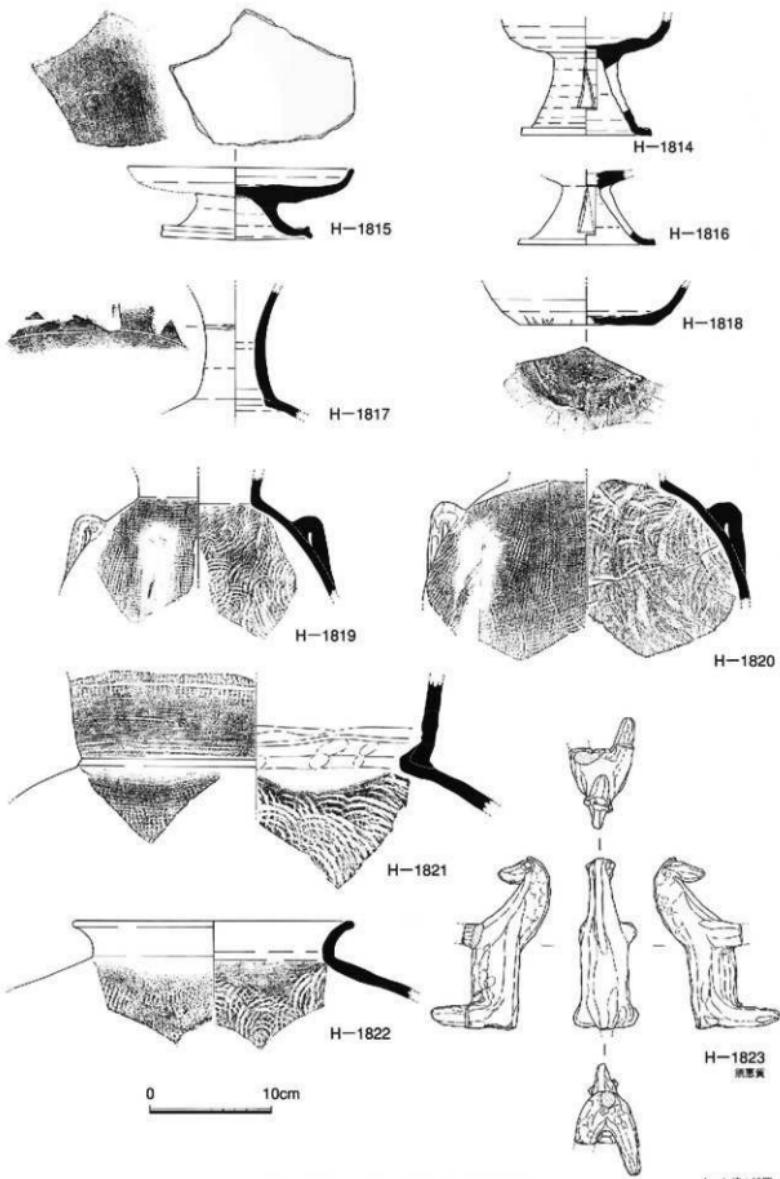
H-1766は壺の底部で底部の切り離しは回転糸切りである、内面に8×6cm大の窓壁片が付着しており、対面の一部に被灰している。

H-1767・1768は須恵質の上馬である。H-1767は脚の破片で残存長は7.6cm、幅3.4cmと比較的大い。H-1768は後脚一帯部分の破片で焼成は良好、茶褐色を呈している。

H-1769は鶴尾である。縦帶～鶴部の破片で残存横幅21.8cm、残存縦幅22.2cmを測る、良好な還元炎焼成で外面が暗灰色、内面が灰色を呈している、突帯部分は何れも貼りつけで鶴部の正段たる突帯部分が比較的直線的に伸び、腹部は緩やかなカーブを描いている、外面はナデ、内面(腹部裏側)は荒いオサエで、腹部外面にはタタキと思われる痕跡が残っている。

H-1770～1790は須恵器片を転用した置台である。壺片を転用したもの(H-1770～1787)が最も多いが、蓋(H-1788・1790)や高坏(H-1789)などにも別の須恵器剥離痕があるので、置台に転用しているものと考えられる。転用の痕跡は概ね円形の剥離痕と円形の変色であり、中には複数に転用したような痕跡もある(H-1788)、またこの円形の痕跡は径が8～9cm前後のものがほとんどであるが、H-1787では高坏の脚と壺片とが溶着している。

H-1791～1795は溶着資料である。本書では須恵器は断面黒塗りを原則としているが、溶着状況を示すため断面白抜きにしてある。H-1791は坏Hの身と他の須恵器片とが溶着した資料で、体部外面に被灰している。H-1792は高坏と壺片とが溶着したもので、高坏の脚が重みで崩れたように歪んでいる。H-1793は坏Hの身と壺片とが溶着したもので、坏H身はほぼ完形、重み等の圧力で変形したように扁平な形になっている、壺片側に灰を被っている。H-1794は坏Fの溶着資料、完形品でやや小ぶりの坏F(図の一番下)にかえりのある蓋を逆さまに置き、更にその上に高台(坏Fであろう)を乗せている、一番下の完形の坏は口径11.5cm、器高3.8cmを測り、底部の調整はナデである。H-1795は壺と蓋とが溶着したもので、蓋は輪状つまみを付し、かえりを有する形態である。



第201図 H区 南壁出土遺物②

トーン線：黒灰